

スペイン語と日本語の音声の対照的研究

Estudio Contrastivo de Sonidos Españoles y Japoneses

東京外国語大学大学院修士論文

Tesis de maestría en el Curso de Posgrado de la Universidad de Estudios Extranjeros de Tokio

上田博人
Hiroto Ueda

1977
ver. 2012/11/2

要旨

本研究では主として構造言語学の方法を用いて、スペイン語と日本語の音声の記述とその対照分析を行い、およびスペイン語を学ぶ日本人と日本語を学ぶスペイン語話者の学習上の問題点について考察する。

第1章では、対照分析の方法論（音声学的方法、音韻論的方法、統計的方法、弁別素性分析、生成音韻論）を検討する。筆者は、具体的な音声現象から出発して帰納的に音韻理論を構成する構造言語学の方法が最も対照分析に有効であるという結論に達した。こうして比較はすべて音声のレベルで行い、それが両言語においてどのように構造化されているかを見ることによって学習者の犯す誤りの原因を明らかにすることができる。第2章で分節音素を、第3章で音の結合を、最後の第4章で超分節的要素（アクセント、音調、リズム）を扱う。

*この論文は1977年に執筆・提出し、Ueda (1977, 1978)でスペイン語で発表した。その後、一部訂正と加筆を行った。また、各所に筆者の発音によるサウンドスペクトログラムを挿入した(本稿で◆で示した)。これにはSILのSpeech Analyzer (<http://www.sil.org/computing/sa/>)を使用した。

Resumen

En este estudio, basándome principalmente en los métodos de lingüística estructural, me dedico a descripciones de los sonidos españoles y japoneses, a análisis contrastivos, y a reflexiones sobre los problemas de aprendizaje tanto de los japoneses como de los hispanohablantes que estudian español y japonés respectivamente.

En el capítulo 1, trataré de examinar los métodos de análisis contrastivos: método fonético, método fonológico, método estadístico, análisis de rasgos distintivos y método de fonología generativa. He llegado a la conclusión de que el más eficaz para el análisis contrastivo es el método de la lingüística estructural que parte de los fenómenos fonéticos concretos para construir inductivamente la teoría fonológica. De esta manera se puede llevar a cabo la comparación en el nivel fonético y explicar las causas de los errores de los aprendientes observando la manera de estructuración de los sonidos en ambas lenguas. En el capítulo 2 estudio los fonemas segmentales; en el capítulo 3, combinación de sonidos y, en el capítulo 3, los fonemas suprasegmentales (acento, entonación y ritmo).

* Esta tesis la escribí y presenté en 1977 y la publiqué en español en Ueda (1977, 1978). Posteriormente la he corregido y agregado en forma de Suplementos en este documento. Al mismo tiempo he insertado *passim* espectrogramas fónicos de mi propia pronunciación, que son *outputs* por Speech Analyzer de SIL (<http://www.sil.org/computing/sa/>), señalados por ◆ en la tesis.

目次

スペイン語と日本語の音声の対照的研究.....	1
要旨.....	2
音声表記一覧.....	5
その他.....	6
はじめに.....	7
1. 方法.....	7
1.1. 比較の方法.....	7
1.2. 比較の枠組み.....	10
1.3. 資料.....	15
2. 各音.....	20
2.0. 音素目録.....	20
2.1. 母音.....	21
2.1.1. スペイン語の母音.....	22
2.1.2. 日本語の母音.....	25
2.1.3. 比較.....	27
2.2. 半母音.....	29
2.2.1. 上昇二重母音.....	30
2.2.2. 下降二重母音と母音連続.....	41
2.3. 閉鎖音.....	44
2.3.2. 有声閉鎖音.....	44
2.3.1. 無声閉鎖音.....	47
2.4. 破擦音.....	49
2.4.1. スペイン語/c/.....	49
2.4.2. 日本語/c/.....	50
2.4.3. 比較.....	50
2.5. 摩擦音.....	52
2.5.1. スペイン語/f, θ, s, x/.....	52
2.5.2. 日本語/s, z, h/.....	52
2.5.3. 比較.....	53
2.6. 鼻音.....	58
2.6.1. スペイン語/n, ñ/.....	58
2.6.2. 日本語/m, n/.....	59
2.6.3. 比較.....	59
2.7. 流音.....	61
2.7.1. スペイン語の/l, ʎ, r, r̄/.....	61
2.7.2. 日本語の/r/.....	61
2.7.3. 比較.....	61

2.8. 音節末子音	65
2.8.1. スペイン語の音節末子音	65
2.8.2. 日本語の音節末子音	69
3. 音の結合	83
3.1. 音節の核	83
3.1.1. スペイン語の核	83
3.1.2. 日本語の核	86
3.1.3. 比較	87
3.2. 子音結合	89
3.2.1. スペイン語の子音結合	89
3.2.2. 日本語の子音結合	90
3.2.3. 比較	91
3.3. 音節境界	93
3.3.1. スペイン語の音節境界	93
3.3.2. 日本語の音節境界	94
3.3.3. 比較	95
4. アクセント・イントネーション・リズム	97
4.1. アクセント	97
4.1.1. アクセントの基本的性質	97
4.1.2. アクセントの基本的位置	102
4.2. イントネーション	110
4.2.1. 高さのレベル	110
4.2.2. 末尾のイントネーション	116
4.2.3. 休止	124
4.2.4. 音調の配列	127
4.3. リズム	131
参考文献	134

音声表記一覧

THE INTERNATIONAL PHONETIC ALPHABET (revised to 2005)

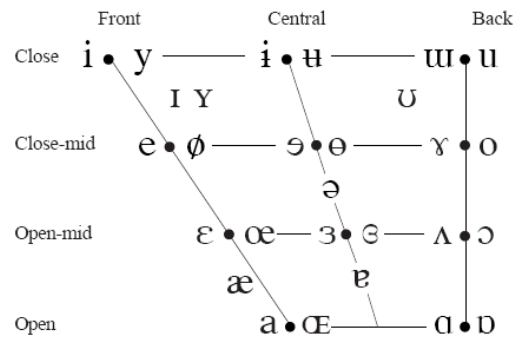
CONSONANTS (PULMONIC)

© 2005 IPA

	Bilabial	Labiodental	Dental	Alveolar	Postalveolar	Retroflex	Palatal	Velar	Uvular	Pharyngeal	Glottal
Plosive	p b			t d		ʈ ɖ	c ɟ	k ɡ	q ɢ		ʔ
Nasal	m	ɱ		n		ɳ	ɲ	ŋ	ɴ		
Trill	ʙ			ʀ					ʀ		
Tap or Flap		ⱱ		ɾ		ɽ					
Fricative	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ʂ ʐ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
Lateral fricative				ɬ ɮ							
Approximant		ʋ		ɹ		ɻ	j	ɰ			
Lateral approximant				l		ɭ	ʎ	ʟ			

Where symbols appear in pairs, the one to the right represents a voiced consonant. Shaded areas denote articulations judged impossible.

VOWELS



Where symbols appear in pairs, the one to the right represents a rounded vowel.

出典： The International Phonetic Association

<http://www.langsci.ucl.ac.uk/ipa/index.html>

*以下の publica domain の使用条件に従う。

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

*次は本論文で用いられる音声記号である。

調音方法	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	p, b		t̪, d̪	t, d	t̠, d̠	c, ɟ	k, g	ʔ
摩擦音	ɸ, β	f, v	θ, ð	s, z	ʃ, ʒ	ç, ʝ	x, ɣ	h, ɦ
鼻音	m	ɱ	ɳ	n		ɲ	ŋ	
接近音				ɹ		j	ɥ	
側面音			ɭ	l		ʎ		
顫動音				r				
弾音				ɾ				

*母音は i, i, u, u, o, o, a, a, ə, ə, ə を使用する。

*日本語の歯茎硬口蓋音(alveolopalatal) : [ç], [ʝ]

*スペイン語の円熟音(mellow): [d]

*右肩の⁺と⁻でそれぞれ、調音点の前身と後退を示す。例 : [k⁺]

その他

S.	スペイン語
J.	日本語
/C/	子音
/L/	流音
/S/	半母音
/V/	母音
/N/	鼻音
/S/	音節
/M/	モーラ音素
#	休止

はじめに

構造言語学の方法に基づいてスペイン語と日本語との音声の記述とその対照的分析および学習上の問題点について考察する。

スペイン語の音声の研究には、Navarro Tomás (1918), Stirling (1935), Gili Gaya (1966), Quilis y Fernández (1969), Dalbor (1969) などの著書があり、日本語の音声については、Edwards (1903), 佐久間(1929), Bloch (1950), 服部(1951), 金田一(1967) の著書やその他の多くの雑誌論文 (巻末の参考文献) が発表されてきたが、対照音声学の立場からの研究は原(1963)を除いては例がなかった。

しかし近年、言語学の諸理論の発展とともに対照研究の一般的な方法が開拓され、それを各々のケースに応用した具体的な研究成果も多く発表されている¹。これらの資料のうち現在まで入手できたものを参考にし、また筆者が日本人の立場から研究してきたスペイン語の音声の資料や授業での経験をもとにして、可能な限り網羅的にまとめたものが本論文である。

1. 方法

具体的な対照分析をはじめの前に、その方法論を検討し比較作業の枠組みを提示したい。また、ここで用いられる資料の性格とその扱い方についても言及する。

1.1. 比較の方法

これまで対照分析は、その性格や目的に応じて様々な方法でなされてきたが、それらは次のように分類できる。

- (1) 音声学的方法
- (2) 形式的音素論
- (3) 統計的方法
- (4) 弁別素性分析
- (5) 生成音韻論
- (6) 音声事実に基づく音素論

(1) 音声学的方法とは、たとえば閉鎖音の氣息音を伴う開放という現象について各言語を比較したり、各言語の母音の長さを比較したりする方法である。この方法では音素的差異の有無にかかわらず、すべてを同一のレベルで扱うため、言語を構造的に見る視点を見失いやすい、という難点がある。音声学的方法は音声事実を重視するという点で評価されるが、その音声事象が音素的にどのような価値があるかを常に考慮に入れなければ、単なる音声の比較にとどまることになるだろう²。

(2) 形式的音素論による方法では、逆に音声事実を抽象化させて比較作業を進めるもので、

¹ Hammer and Rice (1965), ELEC (1967), Di Pietro (1971, 1974), 高田 (1974).

² この意味で Lisker and Abramson (1964)や Delattre (1965)は優れた音声学的研究である。

その典型が類型的音韻論である³。また、音声上の類型論の試みもある⁴。形式的音素論として、デンマーク学派の音素論 (Fischer-Jorgensen, 1952; Togeby, 1951) があげられるが、この方法を用いた対照研究は少ない(林, 1958)。対照分析がすべて具体的な音声によってなされるならば、純粋に形式的な音素論を用いての分析は不可能である。しかし、音声事実の観察が不完全なために、安易な簡略化をするならば⁵、それは形式的音素論の欠点となるだろう。

(3) 統計的方法は、音声の性質よりもむしろその頻度や確率を扱うものである。統計的処理のためには離散的な (discrete) 単位が便利なので音素の出現頻度の研究が多いが、基本的な異音についても頻度調査が可能である⁶。この方法の難点は音素分析法が異なると比較ができなくなることである。たとえば、スペイン語の非音節主音 [j], [ɥ] をそれぞれ /i/, /u/ と解釈するか、/y/, /w/ と解釈するかで、結果が大きく異なることになる。また、音素の出現頻度とその機能負担量(functional load)は必ずしも一致しない。機能負担量に関わるのは頻度よりもむしろ音素の情報量であるから、頻度(確率)の syntagmatic な分析が必要である⁷。

次に、(4) 弁別素性分析(distinctive feature analysis) による方法について見よう。Jakobson, Fant and Halle (1952) は、スペクトログラフに現れる各音の音響的性質に基づいて、12組の対立をなす特徴を取り出し、このなかにすべての言語の音素の弁別の特徴が含まれる、と主張した。それが正しいならば対照研究の有効な方法として採用できるはずである⁸。しかし、二項対立説や示差的特徴の設定そのものに批判があり⁹、また世界のすべての言語の研究がなされていないうちに普遍性を唱えるような apriorism の危険も指摘されている¹⁰。筆者は、弁別の特徴を用いて対照分析を試みたが、余剰的特徴を含めても、まだ記述し得ない重要な点が残るので、この方法を断念せざるを得なかった。弁別の特徴は極度に記号的であり、+や-で表すことのできない調音点の相違や複雑な調音器官の運動を記述するには不向きである。

しかし、ある音素的対立を観察するとき何が弁別の特徴であるかを見ることは重要である。たとえば、スペイン語(S)話者が英語(E)の[θ]を[t]に置き換えて発音することが観察される。これは、E.[θ]が円熟的(mellow)であるために、対立する粗擦性(strident)のS.[θ]に同化されず、類似の調音点をもつS./t/を代用したと解釈できる¹¹。/θ/音素のない中南米のスペイ

³ Trubetzkoy (1939), Hockett (1955), Voegelin (1956, 1957), Voegelin and Yegerlehner (1956)。しかし、類型論は個々の対照研究を目的としていないので、ここに分類するのは適当ではないだろう。

⁴ Robins (1964; 1969): 376 ff.

⁵ たとえば、「日本語には[l]がないので、日本語話者は[l]と[r]の区別がつかない」というような説明である。

⁶ 英語については Hayden (1950), Trnka (1966); スペイン語では Zipf and Rogers (1939), Navarro Tomás, Delattre (1965); 日本語では Edwards (1903; 1935), 大西(1937), 中野(1973)などがある。

⁷ Hockett (1955: pp215-218), 上田(1975: p. 107ff).

⁸ たとえば、Singh (1968)は、弁別の特徴を用いて error analysis を行っている。

⁹ 小泉(1971: p. 117ff).

¹⁰ Martinet (1955: pp. 73-75).

¹¹ S:[θ]の粗擦性については cf. 原(1975)。

ン語話者にとっては、なおさらその傾向が強い。一方日本人は E:/θ/ を J. /s/ に置き換えるため、thin と sin の区別が困難になる。これは日本語では閉鎖音(stop:/t/, /d/) と摩擦音 (fricative:/s/, /z/) が弁別されるためである。このように同じ E. /θ/ の受け入れ方が S と J で異なるのは、S では円熟性：粗擦性、J では閉鎖性：摩擦性の対立が弁別的であるためであり、このような弁別的特徴を用いた説明が可能になる¹²。

(5)生成音韻論の方法はどうだろうか。Chomsky and Halle (1968) によれば、文法の一部門を構成する音形部門は統語部門によって生成された表層構造に、音形解釈を与える。そこで、基底音形表示と音声表示の 2 つの表示のレベルが、音形規則によって結び付けられる。構造主義の音素論が、具体的な音声の資料から音素を抽出させていく帰納的方法をとるのに対し、生成音韻論では基底の形態音素的なレベルから具体的な音声を生成させるという演繹的方法をとるのが特徴である。生成音韻論でも弁別的特徴が用いられるが、Jakobson-Fant-Halle 流の音響音声学的特徴よりも、調音音声学的特徴を用いている点が注目される¹³。教育的には調音音声学のほうが有効であるため、それを主とし、機械による観察 (音響音声学) を従とする分析が望ましいであろう。

生成音韻論の方法による対照分析の例として、Di Pietro (1971; 1974) がある。ここでは、まず個々の言語の音声の複合形式を引き出す普遍的な音素性の貯蔵庫 (stock) を設定し、普遍的な選択規則によって一般的な階層をなす素性の順序付けをおこなう。たとえば、[consonantal]と[vocalic]は、この階層の頂点を占める。つぎに、個々の言語がそれらの素性の全体をどのように利用するかを見ながら音素間の相違を論じるのである。たとえば、北京語(Ch)では[aspiration]は各種の閉鎖子音の特徴であるが、[voice]が無氣息音に現れるのは任意である。一方英語(E)では[voice]を使って[b], [d], [g]と[p], [t], [k]を弁別するが、[aspiration]は位置的変異音である。以上を弁別的特徴で示すと、次のようになる。

弁別的特徴	Ch:[p ^h]	Ch:[p]	E:[p]	E:[b]
voice	—	±	—	+
aspiration	+	—	±	—

これを言語の学習の場面にあてはめると、英語話者が北京語を学ぶ場合は[p^h]を正しく調音するが、北京語の Ch. [p]は E. [b]のように聞こえる。一方、英語を学ぶ北京語話者は、E. bill を[bil]のようにも[pil]のようにも発音する傾向がある。E. [b]が Ch. /p/に対応し、これが[±voice]であるためである。

また、英語話者がスペイン語の ciudad「都市」/θyu'dad/の複数形 ciudades/θyu'dades/を*/θyu'dadz/とするような干渉も音素論のレベルで扱われる (同：p. 199)。

Di Pietro の論述を追ってきたが、彼の方法はすべて構造主義的音素論の枠組にも無理なく置き換えることができる。たとえば、*/θyu'dadz/の例は形態論、または音素配列論で扱われる問題である。このような母国語の類推による干渉と、たとえば強勢のない S. /a/を E. /ə/のよ

¹² 弁別的特徴による個別言語の分析は Muljadic (1969; 1974)が参考になる。

¹³ Harms (1968), Chomsky and Halle (1968).

うに弱化させるような音声的干渉とは性質が違うであろう。前者は適切な指示さえ与えれば容易に正しく /θyu'dades/ に矯正されるが、音声的な弱化現象 (E:/ə/) の矯正にはかなりのトレーニングが必要である。両者を同じレベルで扱う生成音韻論的方法は教育現場では採用しにくいであろう。

また、実際の見地からも構造主義音素論のほうが優れていると思われる点がある。たとえば、先の北京語と英語の分析で同じ [±] の特徴表示でも、一つは自由変異であり、他方は位置的変異である。これを峻別しないかぎり干渉の予測が立たない。

生成音韻論は記述の簡潔性 (simplicity) と言語現象の普遍性を追求するあまり、音声事実を見失いがちにさせる表示をするおそれがある。筆者は対照音声学においては、言語の普遍性を求めるばかりではなく、むしろ個別言語の相対的認識を可能にすることにも重要な意義があると考え。個別言語の特徴は他言語との比較によってより明確になる。

1.2. 比較の枠組み

本論文で採用する方法は、先 (1. 1) にあげた最後の「(6) 音声事実に基づく音素論」である。これは音声のレベルを比較のための共通の場とし、各音声は両言語において、どのように異音として構造化されているかを見る方法である。次にその具体的な作業方法について述べる¹⁴。

先の北京語と英語の場合を例にすると、まず両言語の異音を共通の場に並べる。この共通の場を「音声場」(phonetic field)と名づける¹⁵。ここには当該音素のすべての異音を音声的性質に基づいて列挙する。

(1) [p^h]----- (2) [p]----- (3) [b]

(1) [p^h]では、[p]の両唇の開放より少し遅れて声帯の振動が始まる。(2) [p]では、閉鎖の開放と声帯の振動の開始は同時であり、[b]では開放以前に声帯の振動がある。

(1) [p] [h][a]
 両唇：——閉鎖——<開放=====
 声帯：—————<振動開始==

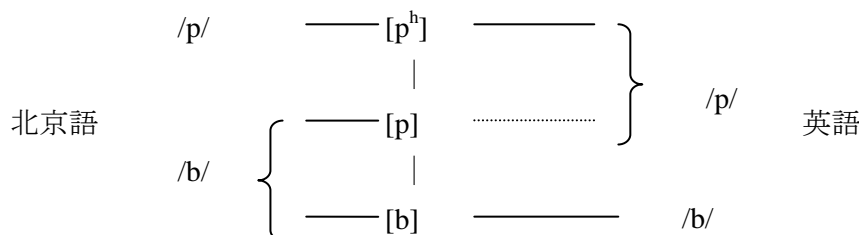
(2) [p] [a]
 両唇：——閉鎖——<開放=====
 声帯：—————<振動開始=====

¹⁴ これまでに提案された対照音声学の枠組みには、Politzer (1954), Yao Shen (1955, 1959), Weinreich (1957), Moulton (1962, 1968)などがある。

¹⁵ この用語は、Trier や Weisgerber らが説く「意味場」(semantic field)からの類推である。意味場においては、色彩、方角、血縁関係など比較的閉じた世界がよく扱われているが、音声は意味よりも構造化されているので、field という考え方がより無理なく適用できる。意味場については Öhman (1953)を参考にした。

(3) [b] [a]
 両唇：——閉鎖——<開放=====
 声帯：——<振動開始=====

このように(1) [p^h]----- (2) [p]----- (3) [b]の関係は直線的であるために、これらは「一次元的音声場」(unidimensional phonetic field) にあると考えられる¹⁶。次にこの共通の場が両言語においてどのように構造化されているかを示すために以下のような工夫をする。

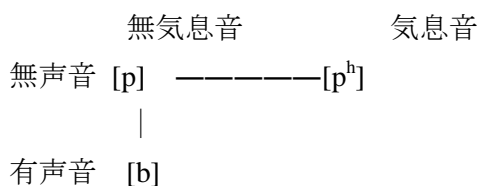


実線で示した関係は、/#___V/の環境にあり、点線で示した関係は、/s___V/の環境にある。

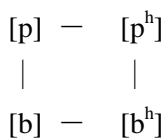
/a/-----[b]-----/c/

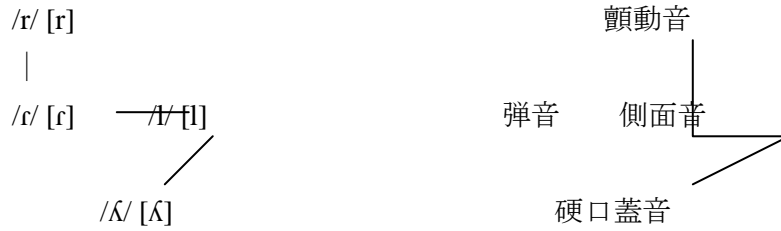
で示される関係にある場合は、何も干渉が起こらないため、/#___V/の環境における[p^h]の場合は問題ない。一方、次の図で示される関係になると音素的な問題が起こる。

¹⁶ 一方、氣息音と有声音を独立させて考えるならば、次のように音声場は縦と横の「二次元」(bidimensional)となる。

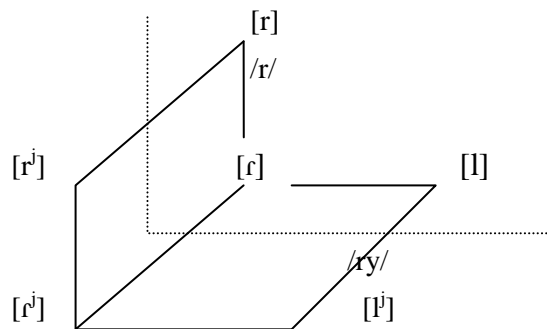


しかしこの図では、(1) [p^h]— (2) [p]— (3) [b]という直線的な関係を見失うことになる。ヒンディー語(Hindi)やマラティー語(Marathi)などのようにこの3者に[b^h]が加わるならば、問題なく二次元になる。

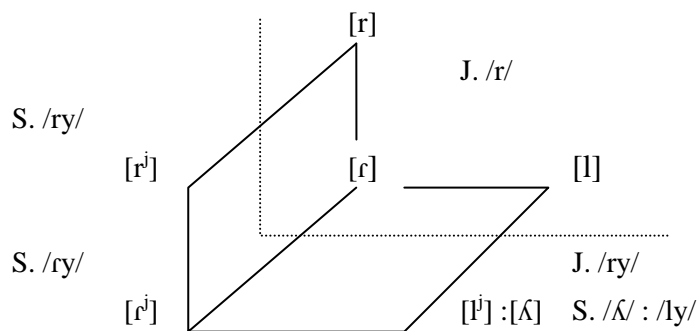




一方、J. /r/とJ. /ry/の異音は次のような音声場を構成する。



両者を同じ音声場に置くと、次の図のようになる。



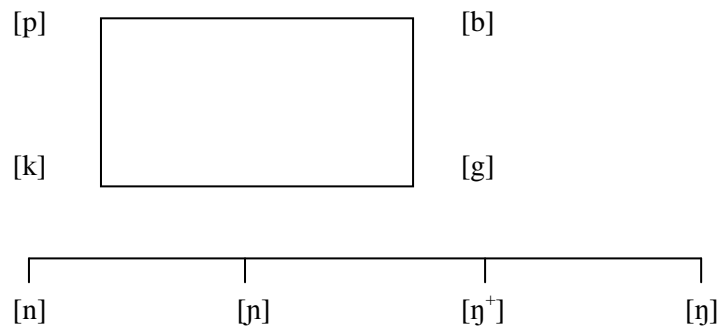
この図から、スペイン語を学ぶ日本語話者は、S. /ʎ/をJ. /ry/に引き付ける傾向と、S. /r/, /r/, /l/をJ. /r/にまとめてしまう過小区別をする傾向があることが指摘できる。

このような音声場の考え方はプラーグ学派音韻論が音素のレベルで考えた「相関」(Korrelation) や「相関の束」(Korrelationsbündel) の概念と共通するものである¹⁹。これは、対照音声学の見地からみると二項対立による記述よりも以下の点で優れている。

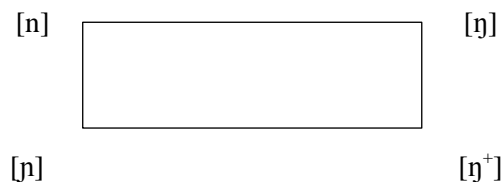
二項対立による方法では、調音的に不規則な事情を単純な+や-の表示に置き換えることによって割り切ってしまうおそれがある。たとえば、McCawley (1968, pp. 91-99) の日本語の

¹⁹ Trubezkoy (1939, 1969): 66ff. Martinet (1955), pp. 99-100.

子音の特徴表示において、p, t, k, s, b, ...のセグメントと py, ty, ky, sy, by, ...のセグメントの素性の相違は口蓋化を示す[±sharp]である。しかし、口蓋化にもさまざまな度合いがあって、対照音声学的にはそれらを同一の[+sharp]という特徴にまとめてしまうことはできない。たとえば音声のレベルの、J. n[n]と ny[n̠]の関係は、J. g[ŋ]と gy[ŋ̠]とは異なる。このことは、たとえば[±voice]で特徴付けられる[p] : [b]=[k] : [g]の関係と比較してみるとよくわかる。[p] : [b]=[k] : [g]は次の図のように2次元的な場(平面)を構成するが、n : ny = g : gyの調音点はn, ny, gy, gの順で直線的に後寄りになるので、1次元的な場となる。



一方、後者を次のように2次元に設定するのはn/ : /ny/=/g/ : /gy/の関係を予想しているので、音素的な考え方である。



音声場では音声の実質を重視しなければならない。実際にスペイン語話者は、たとえば「蟹」/kani/ [kaɲi]と「鍵」/kagi/ [kaŋ̠i]の区別を困難に感じる。これは、スペイン語話者が[±sharp]を弁別できないのではなく²⁰、[n̠]と[ŋ̠]の調音点の差が区別しにくいのである。この事実は2次元の図よりも先の直線的な図によって容易に説明できるのである。

また、二項対立方式では調音上の細かな相違を記述することはできないが、音声場を用いるならばそれらを限りなく列挙することも可能である。

第2章以下の記述では、対照研究の性格上どうしても両言語の構造的差異や音声的差異に注目するが、より大きな枠組みの対照研究であるならば、両言語の類似点をも扱わなければならないであろう。高田(1974)は次のように述べている。

kontrastiv な対照研究は、(...) 両言語を対照した際に、その異質な面に重点を置いた、

²⁰ たとえば、S. /n/ : /n̠/, /l/ : /l̠/の対立では[±sharp]が弁別的特徴である。

いわば「つまみ食い」のような研究であった。(…)そののち、両言語体系の全体について異質なものと同質な点も同時に同等に扱って、網羅的に対照しなければならないという考え方が発展し、そのための名称に *konfrontativ* という表現が使われたようである。

さらに大きな観点をもつ一般音声学的枠組みの中に両言語を位置づける方法もある。しかし、これは最初に言語普遍的な枠を設定してしまうのではなく、あくまで個々の言語の音声的事実を記述しそれを他の言語と比較していきながら、さらに大きな一般音声学的枠組みを構成していくべきである。全体の方向は個別言語音声学→対照音声学→一般音声学の順となるだろう。

1.3. 資料

本論文で用いられる資料は、主として(1)文献によるものと、(2)筆者の観察によるものに大別される。

現在までに筆者が入手できたスペイン語および日本語の音声を扱った文献では、その対象が異なる方言であったり、また同一の音声事実を示すと思われるものが異なった表記で記述されていることもある。このような不統一のためにそのままの形では直接に資料として使うことができない。よって、これらの資料を同一のレベルで扱えるようにするため、これらを評価し記述の精度や音声の表記もなるべくむらのないように統一した²¹。

本研究の直接的資料は、筆者が日本人の立場から観察し研究したスペイン語の音声である。調音的記述には、信用ある音声学書を参考にしながらも筆者自身の調音感覚を重視した。

発音のスタイルは、(1)ぞんざいな発音(*easy*)、(2)普通体(*usual*)、(3)丁寧な発話(*careful*)の3種に分け、(2)を主に、(1)、(3)を参考にした。(1)~(3)は相対的なもので、明確な境界線は引けないが、(1)は親しい間柄での通常の会話などに見られる発話、(2)は会話が幾分丁寧になされる場合で、たとえばスペイン語話者が外国人に向かって話すときのスタイル²²、(3)は発話自体に意識を向けた場合で、たとえば録音を意識した発話がこれにあたる²³。

筆者の個人語を考えてみると、日本語本来の音韻と外来性の音韻が混在していることがわかる²⁴。そこで「日本語の」音声の記述として、どこまでを取り上げるべきか、またそれらと同じレベルで扱うか、区別するかという問題がある。Bloch (1950; 1975: 115) は次のように述べている。

どの単語が借用語であるかを決定できるような純粋に記述的な基準はないし、分析

²¹ ほとんどの場合、I. P. A. を採用したが、若干の追加がある。また日本語との比較の必要から、従来のスペイン語音声学の慣用 (R. F. E. , 1915) にない記号を用いた場合もある。cf. Internatinal Phonetic Association (1949), 大西 (1950).

²² Fries (1945, 1957m p. 110)の”matter-of-fact conversation”より少し丁寧な発話。

²³ Ebeling (1967). 金田一 (1965; 1967: 367-391)のいう「丁寧な発音」。

²⁴ cf. Fries and Pike (1949).

者が外国語をたまたま知っているために、借用語であることがわかるかぎり、日本語の語彙全体からそれらを除くのも理屈がたたない。同じ方言において、借用語は他のもう一つ別の体系を成しうる。という Fries and Pike (1945) が述べた見解は受け入れがたい。ある方言の音素体系として認められうるものは必然的に単一の体系をなし、多重な体系をなさないのである。

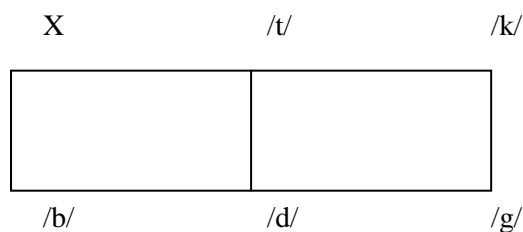
一方 Wenk (1966) は、日本語の音素体系を別々の音素分析の結果として次の3種に分けている。

- (1) Pure Japanese : 日本語固有の形態素
- (2) Sino-Japanese : 中国語起源の外来語およびその類推によって生まれた語
- (3) Western borrowings : ヨーロッパ語、とくに英語からの外来語

McCawley (1968) も、(1) Native, (2) Sino-Japanese and Onomatopoeia, (3) Foreign という3種の strata of vocabulary を認め、これらが素性として指定されると音形規則の適用のされ方が異なってくる、という。

Lovins (1975b) は、外来語素性を特徴づける音韻規則の例外的適用が形態素全体に関わる特徴表示よりもむしろ独立した個々の分節素(segment) または分節素の短い連鎖にかかわるものだと述べ、いわゆる語彙層化 (lexical stratification) を批判している²⁵。また、外来語音性を連続体 (continuum) として捉えている。

筆者はこの問題について次のように考える。外来語音性 (foreignism) が感じられる音声の性格にはさまざまなものがあるが²⁶、それが日本語の他の音韻と相関関係をもつ場合は、その音韻は日本語の中に統合されている、と見なすことができる²⁷。たとえば、語頭の/p/音素は頻度が少なく外来語音性が強く感じられる音であるが、語頭において次の図のXの位置に入ることにより相関を完成させる音であるために統合されている (integrated) と考えてよいだろう。



また、/...VQ__V.../の環境におこる音素は普通/p, t, k, c, s/の5音素である。例:「一步」/iQpo/, 「一等」/iQto:/, 「一緒」/iQsyo/。これらはすべて無声の子音であるため、この条件を満たす/hも外来語としてこの環境に現れる可能性がある。例:「マッハ」/maQha/, 「ゴッホ」/goQho/。しかし、「バッグ」、「ベッド」などの/g/や/d/は先の条件 (無声子音) を満たさないので統合さ

²⁵ 外来語音の扱い方については Lovins (1975a)が詳しい

²⁶ Trnka (1966), pp. 50-57.

²⁷ cf. Martinet (1955): 79.

れず、そのため「バック」、「ベット」のように/Q/の子音が無声化される傾向がある。そこで日本語の音韻を記述するときには、先の環境における/h/も含めておくことが望ましい。それは、日本語話者がスペイン語の *hijo* 「息子」 [i'xo] を /iQho/ としがちな理由の 1 つとして考えなければならないからである。

このように、外来語音のうち頻度の少ないものでも日本語の音韻体系に統合されていると考えられる音も日本語の音として含めなければならない。第 2 章以下で稀にしか用いられない語が例としてあげられるのは、この理由によるのである。スペイン語の音声記述についても同様である。

以上は両言語を個別に扱った音声資料の問題であるが、次に対照音声学の資料について述べる。一次資料は筆者が教室で観察した学生の発音である。幸い、高校生にスペイン語を教える機会があったので、そのときに気づいたことをメモにとり、それを分類して整理した。高校生であるためか、英語の干渉などが少なく音声的に素朴な資料を得ることができた²⁸。逆に、スペイン語話者の日本語に見られる干渉は、知人の発音を観察した。不明な点は直接聞く（尋ねる）ことにした²⁹。

次に、いわゆる「二言語併用者」(bilingue) や「二言語兼用者」(diglotte)³⁰ の発話に見られる日本語やスペイン語の干渉を二次的資料として用いた。これを二次的としたのは話者の個人的な経歴や当該言語との接触状態を客観的に判断する手立てがなかったからである。つまり、両言語の音韻の違い以外の要素が入っている可能性があるためである。これは初歩の学習者の純粋性と区別されなければならない³¹。しかし、初歩の学習者のおかず誤りとは違って、ほとんど完全な域に近いので、そこで見られる干渉はよほど克服が困難なものであると想像される。これは学習の難易度決定の重要な資料となるであろう。難易度の決定は理論的にも可能であるが³²、二言語使用者の言語的背景の様々な要因と外国語音の習得度との相関関係を分析することによって、さらに具体的なものになる³³。

三次資料として外来語があげられる。榎垣 (1943; 1963: 2) によれば、外来語の研究の目的として、(1) 外来語を資料としての言語研究、(2) 外来語を通じての日本文化史の研究、(3) 外

²⁸ もっとも、留学から帰国した学生には英語の干渉が強く、たとえば無声閉鎖音の氣息音化 (tú[t^hu]) や非強勢母音の弱化 (de España[dəs'paɲə]) などが観察された。

²⁹ 言語調査ではインフォーマントに meta-language に属することは質問すべきではない、と言われる(たとえば、太田 1959: 14ff)。しかし、対照的に音声を研究するときには話者の直接的な経験が問題点の解決の重要な糸口になることがある。音素分析において資料提供者は "gathering" の段階で必要なのであって、"collation" の段階では必要でないが (Hockett, 1958m p. 103ff)、対照音声学における資料提供者への meta-linguistic な interview はこの gathering の段階に属する部分が多い。

³⁰ cf. Tabouret-Keller (1967; 1972): 262.

³¹ 太田(1965: 3)は、初歩の学習者から二言語併用者に近い段階までを連続的にとらえ、音体系を習得する過程を考えている。

³² Stockwell and Bowen (1965), pp. 9-18.

³³ たとえば Hirano Weitzman (1967).

来語と固有語の比較による日本文化の性格の研究、(4) 外来語を通じての日本語の基本的性格の研究がある。言語の対照研究においては (1) も重要であるが、(4) の研究も興味深い。榎垣 (同: 4) は次のように述べている。

外国語が日本語の中に取り入れられるときには音韻、文法、語彙のあらゆる面で、外国語そのままでは無理が生じる。そこで、どうしても外国語を日本語の体系に合うように順応化しなくてはならない。(…) 外来語が取り入れられて、その結果どんな変化を起こすか、その点を追究すると日本語という言語体系の基本的な構造が外国語のそれとどんなに違うか、かなりはっきりと観察することができる。

一口に外来語といっても、その母国語化の程度にはいくつかの段階が考えられる。(1) 原語の意味と形態が十分に保持されている「外国語」、(2) 意味と形態が著しくくずれ、母国語の構造にかなり同化している「借用語」、(3) 原語の特色を失い母国語と同じ扱い³⁴をうけている「帰化語」の3種に分類できるだろう。

対照研究の立場からは、(1) の「外国語」の段階が興味深い。小川 (1954: 11)によれば、「[明治時代の書生の] 発音の多くはオランダ語やポルトガル語の影響の強いものであったが、耳から聞いて正しく移そうとしたものもある。たとえば、y を『ウワイ』とし、right を『ウライト』とし、Perry を『ペルリ』としたなどは正しい音声を移そうとした態度である」。このような「耳経路」(ear-route) で受け入れられた外国語³⁵の方が資料として適している。通常の外来語では文字の影響が強いので、音声の干渉の資料としては具合が悪い。

また、外来語は社会規範的な観点から見なくてはならない。つまり、多くの外来語が教養語 (Lehnwörter) であって、そのためかなり規範的な力が作用しやすい。とくに国際化とマスコミュニケーションが発達した現代においては、この規範 (上からのお仕着せ) の作用が強い。現代日本語の表記法は、大量の外来語の流入によって新しいモーラが出現し、大幅な改変や追加が余儀なくされている³⁶。現代日本語の音韻体系を理解する上で、このような言語外的要因をも考慮する必要があるだろう。

しかし、英語と日本語の対照音声学においては外来語は資料とするだけの量的な価値が十分あるが、日本語が取り入れたスペイン語語彙や逆にスペイン語が取り入れた日本語語彙の数はきわめて少ない³⁷。このため、本研究で用いられる外来語の資料は、新聞その他の経路からとった筆者のメモによるものであって、各種の外来語辞典によるものではない。

以上が主な資料であるが、その他スペイン語圏の人々のもつ日本語の印象、日本語を習う

³⁴ 言語外的な扱いと、言語内的な扱いがあり、前者には社会的な受け入れの程度、使用頻度、使用範囲(一般的か専門的か)、使用者の意識、使用される形式 (日本語のカタカナ、スペイン語のイタリック体) などがある。後者には音韻や文法の面での同化の程度があげられる。

³⁵ Weinreich (1953; 1976): 58.

³⁶ 菅野(1976).

³⁷ 国立国語研究所(1964)によれば、中国語以外の外来語の 81%が英語で、次にフランス語が6%、ドイツ語が3%で、他は2%以下である。

ときの困難点、外国へ旅行して帰った日本人の体験談など、有益なものはすべてメモにとり、資料として用いた。

しかし、先述のように基本的な資料は学生の発音である。どの資料をとり、どれを捨てるかは、他の資料と照らしながら理論的な基準でなされるべきである。理論と事実(資料)の優先度については、両者がスパイラル(spiral)な関係にあるということを認めた上で、事実を最初の出発点とし理論的な構成を目指すべきであろう。理論は単なる記述的構成に終わるのではなく、言語事実の説明もなされなければならない。この研究でもある現象が観察されたとき、つねにその音声的説明と構造的説明を試みた。それがアドホック(ad hoc)なものにならないように、また単なる印象にもとづく推論にならないためには、一般音声学の基盤に立つ必要がある。

資料はすべてを呈示するのではなく、代表的なものを選び、例語は最小限に留めた。音声表記は、とくに精密表記が必要である場合を除き、簡略表記とした。

2. 各音

2.0. 音素目録

本章では構造言語学で扱われる「分節音素」(segmental phoneme)について述べる。「音素」についての考え方や音素分析の手順が研究者によって異なり、本章に提示する音素解釈が定説であるとは言えない。筆者はこれまでに提案されたスペイン語および日本語の音素分析を参考にしながら以下に示すような分析結果に至った。これは対照研究の性質上、音声的事実を重視したものであって、他の目的のための分析では異なる見方もありうる。ここでは、音素論の理論的研究が目的ではないので、両言語ともに筆者が最も妥当だと考える音素分析の結果だけを示すことにする。

スペイン語の音素目録は次の図に示される通りである。母音が5個、子音が20個ある。

母音と半母音	前舌	中舌	後舌
半母音	/y/		/w/
高母音	/i/		/u/
中母音	/e/		/o/
低母音		/a/	

子音	両唇	歯	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	/p/	/t/	/k/	
有声閉鎖音	/b/	/d/	/g/	
破擦音			/c/	
摩擦音	/f/	/θ/	/s/	/x/
鼻音	/m/	/n/	/ɲ/	
側音		/l/	/ʎ/	
弾音		/r/		
顫動音		/r/		

日本語の音素体系は次のようになる。母音音素は5個、子音音素は17個、その他にモーラ音素が3個ある。

母音と半母音	前舌	中舌	後舌
半母音	/y/		/w/
高母音	/i/		/u/
中母音	/e/		/o/
低母音		/a/	

子音	両唇	歯茎	軟口蓋	声門
無声閉鎖音	/p/	/t/	/k/	
有声閉鎖音	/b/	/d/	/g/	
破擦音		/ç/		
無声摩擦音		/s/		/h/
有声摩擦音		/z/		
鼻音	/m/	/n/		
流音		/r/		

モーラ音素： H Q N

金田一(1974, :. 31)は、モーラを音素的音節と考え、モーラ音素を音素的母音に分類する³⁸。筆者は、日本語のモーラ音素をスペイン語と対照するときには子音と見なしたほうがよいので、ここではこれらを「音節末子音音素」として分類することにする。よって音素的音節とモーラを区別し、音節の核になり得ないモーラ音素は音素の子音であると考え。また、モーラと区別された「音節」の単位は、後述するようにアクセントの配置の問題にも関連するので、有用であると思う。

日本語に対応する音素のないスペイン語音素は/f, θ, x, ɲ, l, ʎ, r/であり、一方スペイン語に対応する音素のない日本語音素は/h, z, Q, N, H/である。これらの音素の発音は、日本語話者、スペイン語話者にとって習得が困難であることが予想される。具体的にどのような問題点があるかを知るためには、両言語の全体的な音素パタンと異音の記述と比較を行わなければならない。

また、両言語の音節構造を比較すると、ともに音素的対立が母音の後の位置よりも前の位置において、より高く機能していることが注目される³⁹。一方、スペイン語では日本語よりも子音の結合が許されるし、日本語ではモーラ音素が音節末に存在しうる点などの相違もあげられる。

2.1. 母音

音声学的にいう「母音」とは、「空気が舌の中央を通り、口から流出し(すなわち側音でない音)、そのとき口の中で摩擦を生じない音」である⁴⁰。一方、音素論では、母音は「音節の核を形成する音素」と定義される。よって、たとえば、S. /y/や J. /H/は、音声学的には母音(vocoid)であるが、音素論的には音節の核になりえないので、子音と解釈される。本節で扱うのは音素的母音と J. /H/である。

³⁸ Jones (1950: 88)の、たとえば、syllabic m, n, ŋに関する記述も同じである。

³⁹ Malmberg (1948: 65), 橋本(1950): 229ff.

⁴⁰ Pike (1943), pp. 66-79. Pike はこれを vocoid と名づけ、その他の contoid と区別する。

2.1.1. スペイン語の母音

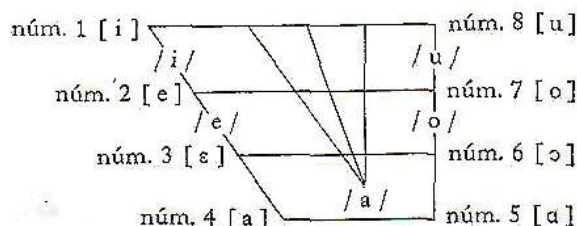
スペイン語には以下の5つの母音音素がある。[*]内の音声表記は代表的な異音である。

- /i/: 前舌・高・非円唇母音[i]
- /e/: 前舌・中・非円唇母音[e]
- /a/: 前舌・低・非円唇母音[a]
- /o/: 後舌・中・円唇母音[o]
- /u/: 後舌・高・円唇母音[u]

これらは以下のように対立する。

- *piso* (階) /'piso/ ['piso]
- *peso* (重さ) /'peso/ ['peso]
- *paso* (通過) /'paso/ ['paso]
- *poso* (沈殿物) /'poso/ ['poso]
- *puso* (彼は置いた) /'puso/ ['puso]

次の図は、Jones (1960: 31ff)の基本母音 (cardinal vowels) の1番から8番までの位置を基にして定めたスペイン語の母音音素の「母音域」(vowel area)⁴¹である。



これらの5母音は、その環境にしたがって次のような異音となって実現する。

(1) 閉音節における開母音化

スペイン語の母音は、開音節の中でも閉音節の中でも自由に起り⁴²、Navarro Tomásによれば、閉音節で開き気味になる傾向がある。例：*belga* (ベルギー人) ['belɣa], *vega* (沃野) ['beɣa]。開母音化には隣接音の影響もあり、たとえば/r/に隣接する母音は開く傾向がある。例：*pero* (しかし) [pero], *perro* (犬) [pɛro]⁴³。

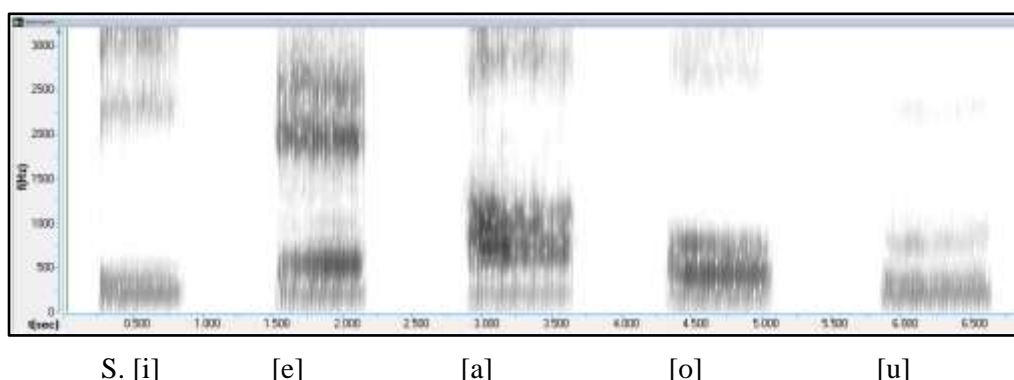
しかし筆者の観察では、母音の音色の変異が Navarro Tomás に示されるようには常時現れず、むしろ個人差があるようである。Bull (1965: 76) も両者が自由変異であることが多いので、教育上その区別が必要でないとして述べている。よって、以下の記述では、開・閉母音の異音的区別を音声表記に記さないことにする。

⁴¹ Jones (1950): 93.

⁴² その意味で英語のような「抑止」(checked)と「非抑止」(non-checked)の区別がない。

⁴³ Cf. Navarro Tomás (1918; 1972): 52ff.

◆スペイン語母音のスペクトログラフ



[i], [e], [a], [o], [u]の順で、第1フォルマント(F1)は低→中高→高→中高→低となり、第2フォルマント(F2)は高→低となる。[u]ではF1とF2がほとんど一致している。

(2) 鼻母音化

Navarro Tomás (1918; 1974: 36)によれば、2つの鼻子音の間にある母音、および、語頭において、鼻子音に後続される母音は鼻母音化する。Navarro Tomásは、鼻母音化の程度に差があることを記述していないが⁴⁴、筆者の観察によれば次のような違いがある⁴⁵。

位置	例	意味	音声表記
(1) N__N-C	<i>nunca</i>	(決して...ない)	[nu~ŋka]
(2) #__N-C	<i>enfermo</i>	(病人)	[e~ŋ'fermo]
(3) N__-NV	<i>mano</i>	(手)	[ma~no]
(4) #__-NV	<i>ama</i>	(彼は愛する)	[a~ma]

上の(1)では最も鼻音化されやすく、完全な鼻母音になる。(2)では発話のスタイルにもよるが、/e/の調音の過程で徐々に鼻音化されていく傾向がある。しかし、ふつうフランス語のような鼻母音にはならない。(3)は早い発話で鼻音化するが、丁寧な発音では比較的口音性が保たれる。(4)は鼻母音化の程度が少ない。このように、母音に後続する鼻子音が母音とともに音節を形成するか否かで鼻音化の程度が異なる。

(3) 弱勢母音の弛緩化

Navarro Tomás (1918; 1974: 45)によれば、/...__#/, /S__-S#, /__-'S-S#/の位置にある母音は弛緩する⁴⁶。

⁴⁴ 実際に鼻母音化は、発話のスタイルによって影響され、ぞんざいな発話では起りやすく、その程度も大きい。ここでは普通体で各音声と比較する。

⁴⁵ Nは鼻子音、Cは子音、Vは母音、ハイフン(-)は音節の境界、#は休止を示す。

⁴⁶ Sは弱勢音節、'Sは強勢音節を示す。

位置	例	意味	音声表記
(1) /...___-#/	<i>espuma</i>	(泡)	[es'puma]
(2) /'S-___-S#/	<i>rápido</i>	(速い)	['rapido]
(3) /___-'S-S#/	<i>temeroso</i>	(こわがりの)	[teme'roso]

Navarro Tomás 自身も述べているように(p. 46)、スペイン語の母音の弛緩化は英語の(母音弱化)(vowel reduction: 例 *able*[eibl] > *ability*[ə'biləti])ほど顕著ではなく、音色が一定に保たれていて弁別も確かである。例: *fir*mo (私は署名する) ['firmo], *fir*me (確かな) ['firme], *fir*ma (彼は署名する) ['firma]。これらの語の語末の[o], [e], [a]の音色は明瞭である。このように、強勢母音と弱勢母音の音色が共に明確であって、両者に差がないことがスペイン語の特徴である⁴⁷。Frey (1974: 48)も、教育的見地からスペイン語の relaxed vowel を指摘する必要はない、と述べている。筆者は英語の干渉を避けるためにも Frey に賛成である。

(4) 母音の長音化

Navarro Tomás (1916, 1917)によれば、スペイン語の母音は長さの点から以下の3つに分類される⁴⁸。

- (1) 長母音。15~20c. s. (c. s. =1/100 秒)。最終音節の強勢母音。ただし、[n]と[l]で終わらないもの。例: *sofá* (ソファ) [so'fa:], *ciudad* (都市) [θju'da:(d)]。
- (2) 半長母音。10~15c. s. [n], [l]で終わる最終音節の強勢母音。末尾から2番目の音節に強勢のある開音節の母音。例: *dato* (資料) ['da'o], *balcón* (バルコニー) [bal'ko'n]。
- (3) 短母音。5~10c. s. 終わりから2番目の音節で強勢のある閉音節の語。末尾から3番目に強勢のある音節の母音。非強勢母音。例: *costa* (海岸) ['kosta], *súbito* (急の) ['suβito]。

Navarro Tomás のあげている強勢の位置以外にも次のような条件がある。

⁴⁷ ただし、後述する発話末尾の弱勢母音の弛緩化は比較的顕著であるので注意したい。Jones (1950: 176)は、/...a#/が強勢母音とくらべて、幾分不明瞭な音色をもつと述べているが、これは/a/に限らない現象である。cf. Quilis y Fernández (1969: 55)。

⁴⁸ これらの材料はすべて単独に発音された場合の単語であって、いわゆる「引証形」(citation form)である。筆者はこれらが各語の母音に固有の長さではなく、むしろ音調の属性(後述)であると考え。たとえば、(a) Un muchacho. 「男の子」; (b) Buscas a un muchacho. 「君は男の子を探している」; (c) Un muchacho te busca. 「男の子が君を探している」それぞれの cha の母音の長さを比較すると、おおよそ(a) = (b) > (c)となる。スペイン語の末尾から数えて最初の強勢母音は著しく長くなる傾向があり、筆者はこれを「音調の核」(intonation nucleus)と名づける(後述)。このように1語であっても音調は存在するので、語の発音を比べるときは文中において同じ位置にあるものを比較すべきである。cf. 柘谷 (1976), pp. 369-370, n. 6. そこで、各言語が単独に発話される(すなわち、末尾の音調の前)という条件で、強勢母音の長さを比べなければならない。

上昇二重母音では、(2)の環境において半長になるが、下降二重母音では渡り音はもちろん、音節主音も長くならない。例： *suave* (柔らかな) ['suaːβe], *causa* (原因) ['kausa]。

また、後続の音節が子音+/y, w, l, r/ではじまるときも、短母音になる傾向がある。

pato (あひる) ['pa:to]//*patio* (中庭) ['paːtjo]
copa (カップ) ['ko:pa]//*copla* (小歌) ['koːpla]
lava (彼は洗う) [la:βa]//*labra* (彼は耕す) [laːβra]

2.1.2. 日本語の母音

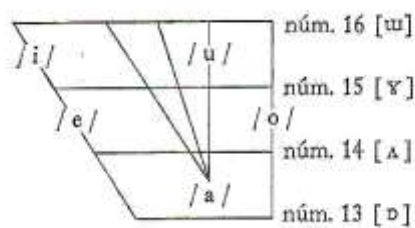
日本語には以下の5母音音素がある。右はその代表的な異音である。

/i:/ 前舌・高・非円唇母音 [i]
 /e:/ 前舌・中・非円唇母音 [e]
 /a:/ 前舌・低・非円唇母音 [a]
 /o:/ 後舌・中・円唇母音 [o]
 /u:/ 中舌・高・非円唇母音 [u⁺]

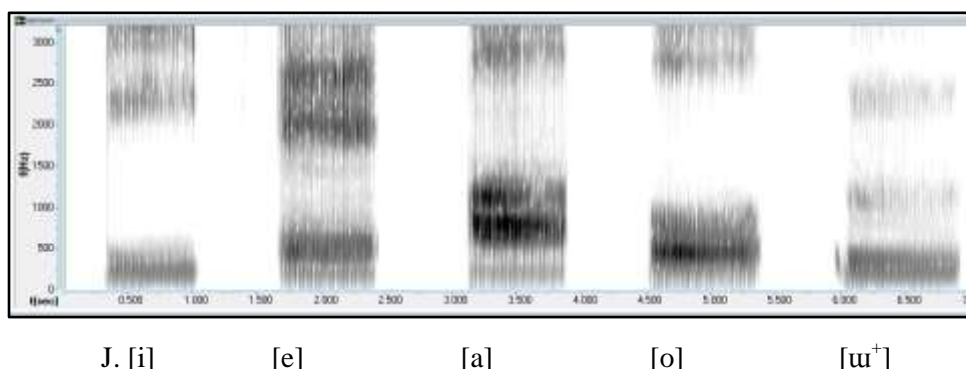
これらは以下のように対立する。

「工員」 /koHiN/ [ko:iN]
 「公園」 /koHeN/ [ko:eN]
 「考案」 /koHaN/ [ko:aN]
 「高温」 /koHoN/ [ko:oN]
 「幸運」 /koHuN/ [ko:uN]

次の図は、日本語母音音素の位置を示す。



◆日本語母音のスペクトログラム



[i], [e], [a], [o], [u⁺]の順で、F1は低→中高→高→中高→低となり、第2フォルマントF2は高→低となるが、[u⁺]では高くなっている。

日本語にはいわゆる「引き音素」/H/があり、その有無によって以下のように対立する。

「おばさん」/obasan/ [obasan] : 「おばあさん」/obaHsan/ [oba:san]

「書齋」/syosai/ [eosai] : 「詳細」/syoHsai/ [eo:sai]

Han (1962: 63f)によれば、/ba/と/baH/における/a/と/aH/の長さの比は1対2.5であるが、/b/を含めた/ba/と/baH/の長さの比はちょうど1対2になる。しかし、筆者もスペクトログラムを使って実験してみたが、Hanに類似する結果にはならなかった。母音の長さの性質は微妙で変動的であるので、Hanのように微視的に扱うのではなく、日本語のモーラを単位とする等時的リズム(後述)によって説明すべきである。

なお、日本語の長母音/VH/は、その調音の間ピッチの変化はあっても、音色が変化することはない。

以下主な異音について記述する。

(1) /u/の異音

日本語の/u/は、基本母音8番[u]に比べて前寄り、低めで、円唇化を伴わない⁴⁹。また、[s], [z], [ts], [dz]の後では、さらに中舌化する⁵⁰。

そして、日本語の/u/は/m/の前で、しばしば音節を形成する[m]となることがある。例:「馬」[m,ma], 「梅」[m,me]。

(2) 無声化

Han (1962)によれば、日本語母音の無声化には以下の4つの要因(a)~(d)がある。

(a) 母音の長さの影響。日本語母音の固有の長さは/u/, /i/, /o/, /e/, /a/の順で長く、これ

⁴⁹ これを精密に表記すると[u⁺]となるが、以下では簡略に[u]で示す。

⁵⁰ cf. 佐久間(1929).

と平行して、とくに/u/, /i/が無声化し、その中でもとくに/u/が最も無声化しやすい(p. 20)。これには/u/の音の長さだけでなく、[u]が neutral で聴こえも小さい、という音的性質も関係していると思われる。

(b) テンポ (発話の速度) の影響。話すテンポが速いと、/i/, /u/の母音はさらに無声化しやすい (p. 23)。

(c) ピッチとアクセントの影響。Hanによれば、アクセントのある音節 (高いトーンの一モーラ) では無声化が起りにくい、それがない音節では他の条件がそろえば無声化が起る(p. 27)。アクセントばかりでなく、末尾音調 (後述) の影響も考えるべきであろう。たとえば「やめます」/yamemasu↓#/ [yamemasu]⁵¹では、最後の母音が無声化したり、母音が脱落して[s]が長音化したりするが、「やめます？」/yamemasu↑#/では、[yamemasu↑]となって無声化されない[u]が現れる。

(d) 隣接音の影響。Hanによれば、無声子音[p, t, k, ts, tʃ, β, s, ɛ, ɟ, h]の間に挟まれた/i/, /u/は無声化する(p. 28)。例：「ピクリと(動いた)」/pikurito/ [pɪkurito]; 「暑さ」/acusa/ [atsɯsa]。これに付け加えて、無声子音と休止にはさまれた/i/, /u/も無声化されることがある。例：「粕」/kasu/ [kasu]

なお、日本語の母音は無声化のない限り明瞭で、また調音中に音色が変化することはない。

2.1.3. 比較

(1) S. /u/ : J. /u/

先の【図 2.1.1】と【図 2.1.2】を比較すると、日本語/u/が前寄りでかつ低め、そして非円唇である点がスペイン語と著しく異なることがわかる。とくに[s, z, ts, dz]の後の[u]はさらに中舌化されるため、スペイン語の[u]からさらに遠くなる。スペイン語を学ぶ日本語話者(JP)は、S. /u/が後舌・円唇母音であることに注意すべきである⁵²。一方、日本語を学ぶスペイン語話者(SP)は、J. /u/ [u]を発音しないので外国人らしい発音になる。

J. /o/がJ. /u/より後ろ寄りで、かつ少し円唇があるために、S. /u/, S. /w/に置き換えられることがある。例：Juan (フアン：人名) > J. /hoan/, bueno (よい) > J. /boeno/。

スペイン語では、/u/ : /o/, /wa/ : /oa/の対立があるので、両者は区別されなければならない⁵³。
例：

puso (彼は置いた) /'puso/ [púso] : *poso* 「井戸」/'poso/[póso]
tu haya (君のブナの木) /tu aya/ ['tɯaja] : *toalla* (タオル) /to'aʎa/ [to'aʎa].

日本語は、S. /u/およびS. /w/を、高舌性と体系的並行性 (S. /i, e, a, o, u/= J. /i, e, a, o, ___/) により、J. /u/に置き換えたり、一方、後舌性と円唇性により、J. /o/と同一視したりするのである。

⁵¹ ↓は下降音調、↑は上昇音調、音素表記、音声表記のボールド体はトーンが高いことを示す。

⁵² /u/を後舌・円唇で発音すると、自然に/u/の無声化がなくなる。

⁵³ 両者の区別をしない地域・文体バリエーションもある。*toalla*「タオル」[to'ʎaʎa] > [tu'ʎaʎa].

(2) J. /u/ [m]

日本語話者は、S. /umV/の連続が現れる *humano* (人間的) [u'mano]や *humedad* (湿気) [ume'da(d)]を、それぞれ、>J. [m,mano], >J. [m,meda]としないように注意すべきである。

(3) J. 無声化

先に、J. /i/と J. /u/の無声化を同様に扱ったが(2. 1. 2)、後述するように、J. /i/が先行子音を口蓋化させる働きがあるのに対し、/u/は先行子音に際立った影響を与えない。一方、/u/は最もニュートラルな母音で、たとえば外来語の、母音が後続しない子音([t], [d], 硬口蓋音は除く)に添加される母音である。例：E: *book*['bɒk] > J. /buQku/, E: *class*[klæs] > J. /kurasu/。よって以下では、/i/と/u/のそれぞれの無声化を区別して考察する。

はじめに、J. /i/の無声化を扱う。J. /i/は、先行する子音を口蓋化し、自らは無声化する。例：「ピクリ」[p'ikuri], 「知的」[t'itekiki], 「聞く」[k'ikku], 「支店」[e'iteN], 「火消し」[ç'ikeei]。そこで、JPによる発音では、スペイン語の次のような語の下線部で無声化を起こす：S. *artificial* (人工的) > J. [artifi'θial], *capital* (首都) [kapi'tal], *instituto* (研究所) > J. [insti'tuto], *asistencia* (出席) > J. [asj'stenθia]。

このように、無声化された/i/は先行の子音が口蓋化されるために、音素/i/の存在自体は容易に認識されている。たとえば、S. *sistema* (システム：複数) [sis'temas]/*sus temas* (彼のテーマ：複数) [sus'temas]のような最小対も、JPはそれぞれ[ej'ste:mas], [sɯ'ste:mas]と発音し、さらに[i], [u]を脱落させて、[e'ste:mas], [s'ste:mas]と発音する⁵⁴。この場合、先行の子音の(非)口蓋性によって両者を区別しているために、JPが/i/を無声化、または脱落させることによって弁別が困難となるスペイン語の最小対はない。

しかし、スペイン語の子音+i/ (S. [Ci]) と日本語の硬口蓋子音+無声化の/i/ (J. [C'i]) は音声的に異なり、またスペイン語は硬口蓋子音と非硬口蓋子音は弁別されるので(後述)、注意が必要である。

J. /u/の無声化の場合は、S. *cucaracha* (アブラムシ) [kuka'ratʃa] > J. [kuukara:tʃa], *Susana* (スサーナ：人名) [su'sana] > J. [suuʃa:na]のように、先行子音の音質にはとくに影響を残さないため、JPにとっては以下のようなスペイン語の最小対を弁別することが困難である。

Lo supongo (私はそう思う) /losu'pongo/ : *Los pongo*. (私はそれらを置く) /los'pongo/
las suposiciones (想定：複数) /lasuposi'θyiones/ : *las posiciones* (位置：複数)
/lasposi'θyones/

J. /u/は、外来語の子音連続に対して添加音として用いられる音であるために、さらに事情が複雑になる。JPは *Lo ha supuesto* (彼はそう想定した) [loasu'puesto]を > J. [loasupuesuto]と発音して、S. [su]の音節を不明瞭にする一方、*Lo has puesto*. (君はそれを置いた) にも/u/を添加させて、[loasupuesuto]のように、S. [s]を音節化させるために、両者の区別が困難である。一方、*no subasta* (彼は競売に付さない) [nosu'βasta]の[su]は、JPの発音でも、隣が有声子音[β]

⁵⁴ 無声母音の脱落は、-/CVC-/の場合であって、-/CyVC-/では脱落しにくいようである。例：「趣向」/syukoH/ [euko:] /「思考」/sikoH/ [eiko:]. cf. 高倉(1971)。

であるため無声化しないが、*nos basta* (われわれには十分である) [nos'βasta]に[u]が添加されて >J. [nosubasuta]とするため、前者との区別がつかなくなる。JP は先にあげたような対を聞き分けて、S. /u/を後舌・円唇・有声母音で調音するようにしなければならない。

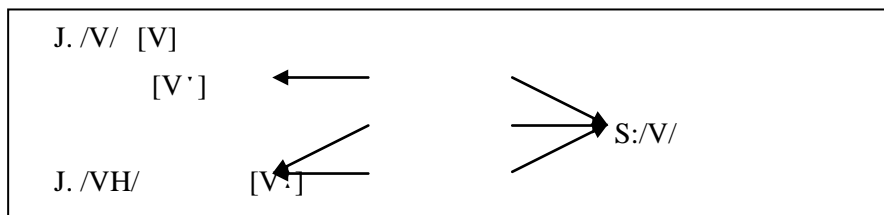
一方、SP は日本語の無声化母音の習得が一般に困難で、文字から学習した人は有声母音にして発音する傾向がある。例：「助ける」[taskeru] > S. [tasu'keru]⁵⁵。

(4) J. 長母音

Hara (1964: 371f)によれば、10 分の 1 秒より長いスペイン語の強勢母音は、日本人の耳には長母音/VH/に聞こえる。よって、JP にとっては S. [V:]と S. [V:] (先述：2. 1. 1) が >J/VH/のように聞こえる⁵⁶。

一方、SP は Jp の /V/ : /VH/の対立を聞き分けることが困難で（「おばさん」:「おばあさん」）、両者を同一視するか、後者を 2 つの母音の連続（後述）と再解釈する。とくに、「短歌」/taNka/ : 「タンカー」/taNkaH/のようなアクセントのない部分の識別が困難である⁵⁷。逆にアクセントのある音節は母音が長音化されるので、たとえば「心」[kokoro]を >S. /kokoro/ [koko:ro]のようにしがちである。Jp ではアクセント母音と非アクセント母音の長さにほとんど違いがないので注意が必要である。

以上をまとめると次のような図になる。



2. 2. 半母音

半母音は、音声学的には「母音類」(vocoid)に属するが、音素論では子音に分類される。両言語において、半母音は母音の前の位置と後の位置で、その音声的实现にかなりの相違があ

⁵⁵ 文字からではなく、音声から（耳経路で）学習した人は、[tas'keru]のように 3 音節にして、[sɯke]の部分で[-ske-]のような子音結合にする。これは後述する日本語のモーラ単位のリズムに反するので、とくに外国人らしさが目立つ発音となる。

⁵⁶ ただし、Jp には/VHN/という連続が、擬音語などを除いては他にない「特別な長音節」（先述：2. 1. 2）であるため、これを回避する。例：S: balcón[bal'ko:n] > J. /barukoN/. また、JP は Sp の下降二重母音/ey/, /ow/を長母音化(>J. /eH/, /oH/)する傾向があるがこれについては後述する(2. 2)。

⁵⁷ 川瀬(1974)の書き取りの調査(対象はメキシコ人とエルサルバドル人)には、「校長先生」/koHcyoHsensei/ > S:/kocosensei/, 「中央線」/cyuHoHsen/ > S:/cyuosen/, 「聞いて」/kiHte/ > /kite/の例がある。

るために、両者を別に扱うことにする⁵⁸。

2.2.1. 上昇二重母音

(1) スペイン語 (S). /y/

スペイン語 (S)の/y/は、語頭や/n,l,s,b,d/の後に形態素の境界をはさんで位置するときは、硬口蓋破裂音[j]となり、母音間では摩擦の弱い[j̟]や、完全な摩擦音[j̠]となる。また、/CyV/という連続では、後続の母音と結びついて、いわゆる「複合核音」(complex peak)⁵⁹を形成する。これらの異音の相補的な分布状態を表示すると、次の図のようになる。

【表 22a】 S. /y/の異音

異音	位置	例
[j]	/#yV/	#Yo (私) [jo]
	/n,l,s,b,d/=yV/	cónyuge (配偶者) ['kon̟yuxe], el yeso (石膏) [eʎjeso]
[j̟ ~ j]	/V. yV/	mayo (五月) ['majo] ~ ['majo]
[j̠]	/C.yV/	piano (ピアノ) ['pjano]

同じ/#yV/の位置でも、ときには[j̠]となったり、また方言の中には[j̠]が現れないものもある。/n-yV/ではほとんど例外なく[j̠]になるが、/l, s, b, d/の後では[j̠]になることが多い。強く調音されると、/VyV/の位置でも[j̠]が現れる。このように S. /y/の各異音は完全な相補分布をなしているのではなく浮動的であるので、/VyV/よりも/#yV/の位置のほうが破擦音になりやすい傾向にある、というほうが正確である。

Sの<子音+半母音+母音> (S. /CyV/) は<硬口蓋子音+母音> (S./C̟V/) と対立する。

patio 「中庭」 /'patyo/ ['pat̟jo] : pacho 「平たい」 /'paco/ ['pat̟jo]

unión 「連合」 /u'nyon/ [u'n̟jon] : uñón 「大きな爪」 /u'ñon/ [u'n̟jon]

dalia 「ダリア」 /'dalya/ ['dal̟ja] : dalla 「鎌」 /'daʎa/ ['dal̟ja]

(2) 日本語 (J) の硬口蓋母音/y/

日本語 (J) の硬口蓋母音/y/は、次の異音の分布を示す。

異音	位置	例
1. [j]	/#yV/	「矢」 [ja]
	/V. yV/	「蚊帳」 [kaja]
2. [j̠]	/CyV/ (C=bilabial)	「病気」 [bjo:k̠i]
3. 先行子音の硬口蓋音化	/CyV/ (C≠bilabial)	「客」 [k̠aku]

⁵⁸ ここで扱う S. [j], S. [w], J. [j], J. [w]を IPA は1979年の改訂以来「接近音」(approximant)と呼んでいる。筆者は後述するように、S. [j], [w]の母音性と J. [j], [w]の子音性を区別するために、前者 (S. [j], [w]) に音節副音の[i̟], [u̟]を用いる。

⁵⁹ Hockett (1955): 72f. 本論文では「複合核」(complex nucleus)を用いる。

接近音[j]と硬口蓋化の音声的差違は顕著である。前者の渡り部は短い上に⁶⁰、音色も開き気味になる。とくに「蚊帳」/kaya/、「御用」/goyoH/、「露」/cuyu/などのように、/VyV/の位置ではさらに開く。

2の/C/は両唇音である。/CyV/の位置では、両唇の聴音と舌の調音が/yV/の部分が独立しているために、両唇の開放後、それに瞬時遅れて舌が[a]の位置をとるので、比較的目立つ渡り音の[j]が観察される⁶¹。

3の位置では調音はすべて舌の運動によって行われ、口蓋化された子音から音節主音母音へ移行するとき、顕著な渡り音は聞こえない。

日本語の<子音+y+V>は<子音+i+V>と以下のように対立する。

「謝意」/syai/ [jai] : 「試合」/siai/ [jai]

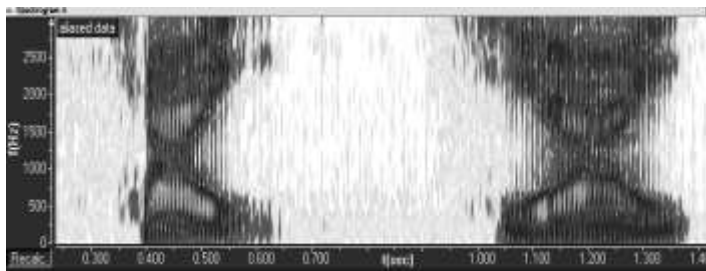
「如意」/nyoi/ [poi] : 「臭い」/pioi/

なお、硬口蓋または口蓋化音は/y/の前の他に/i/の前でも現れる⁶²。例：「道」/mici/ [mitei]、「シジミ」/sizimi/ [fizimi]。

<硬口蓋子音+i>は一般に/Ci/と音素解釈されるので、*/Cyi/は存在しない。

◆J. /syai/と/siaJ/のスペクトログラム

/sya/では/y/が/sy/ [j]に入っているが、/sia/では/i/が独立している。



J. /syai/

/siaJ/

(3) 比較

(a) /y/の異音

はじめに、休止または鼻子音/n/の後、および母音間の位置における両言語の/y/の異音と、その構造化を比較する。S/y/ [j], [j]に対応する日本語音はJ[dz], [z]である(後述)。また、S[j]にはJ[j]が対応する。スペイン語ではすべて/y/に属する異音であるが、日本語では[dz], [z]は音素的に/zy/に、[j]は/y/に属する異音である。J[dz], [z]のそれぞれの位置は、S/y/ [j], [j]の位置

⁶⁰ 服部(1951): 51.

⁶¹ 服部(1951): 51.

⁶² Trubetzkoy (1939, 1969): 129f や Polivanov (1959, 1979): 118f は「シ」などの<硬口蓋音+i>を、「シャ」などの<硬口蓋音+y>と同じ palatalized の系列に入れて音素解釈するが、日本語の形態音素論を考慮するならば、たとえば「シ」は「サスセソ」の系列に入れて、「シャ」「シュ」「シヨ」とは別にすべきである。

と類似する。

【表 22c】 J. /zy/

異音	位置	例
[dz]	/#N. yV/	「条件」/zyoHkeN/ [dzo:keN], 「感情」/kaNzyoH/ [kandzo:]
[z]	//V. yV/	「ドジョウ」/dozyoH/ [dozo:]

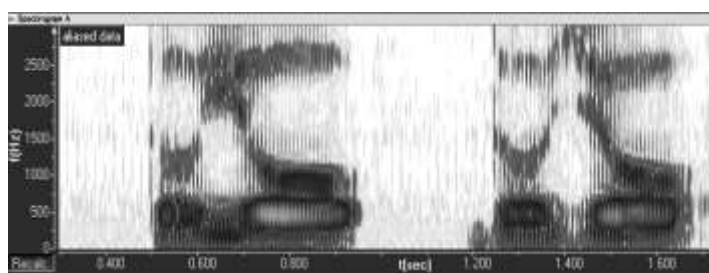
S の 1 音素/y/に属する異音が、J では 2 つの異なった音素形式/zy/と/y/の異音に対応するため、日本語話者(JP)は S. /ya/を>J. /ya/としたり、>J. /zya/としたりして、区別を過剰にする。

例：#Yo (私) > J. [dzo]/zyo/; mayo (5 月) > J. /maHyo/ [ma:jo]~maHzyo/ [ma:zo].

一方スペイン語話者(SP)は、たとえば「山」[jama]：「邪魔」[dzama]の対立や、とくに、母音間の対立である「土曜」[dojo:]：「ドジョウ」[dozo:]の区別を誤る傾向がある。

◆ J. /doyoH/と J. /dozyoH/のスペクトログラフ

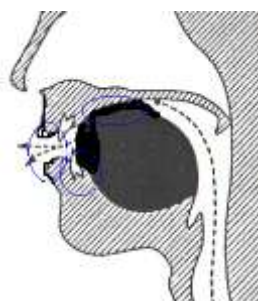
よく似ているが、/doyo/では母音の F1, F2 が連続しているのに対し、/dozyo/では/zy/ [z]の摩擦部が目立つ。



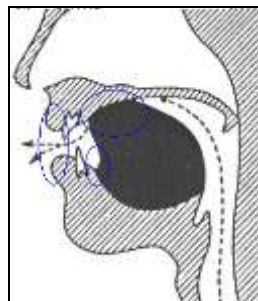
J. /doyoH/

J. /dozyoH/

次に両言語の異音の音声的相違について述べる。次の図で示すように、S[j], [j]の調音点(調音域)は、J[dz], [z]よりも後ろ寄りであり、舌尖は下の門歯の裏面に当てられて、若干の円唇化も観察される。



S. [j]



J. [dz]

母音間では、J[j]が開き気味であるのに対し、S. [j]は閉じ気味であり、摩擦音に近い。発話が強調されると容易に[j]となる。S. [j]と S. [j]は自由変異音である。

日本語では/yi/の連続はないが、スペイン語では *ensayista* (随筆家) [ensa'jista] のような語に起こる。この場合[j]よりも[ji]となりやすく、JP はこれを J. /zi/ [zi] と解釈するので、たとえば、英語の *ear*[iə] : *year*[jiə] の区別のような困難はない。

(b) <子音+y+母音>(/CyV/) の構造

S. /CyV/は/Cy/よりも/yV/の結びつきが強く、/yV/が複合核を形成する (後述)。たとえば、*piano*[piano]を強調するために繰り返すとき、

No te he dicho "plano"; te he dicho "pi-a-no". 「plano と言ったのではない。"pi-a-no"と言ったのだ」

のように、[i]と[a]が分裂して、[i]が独立した母音[i]となることもある。一方、J/CyV/では、/Cy/が一体となって、口蓋化子音あるいは硬口蓋音となっているため、たとえば「京都」[k'o:to]を*[ki. o. to]のように分離することはない。

次の表は、両言語の対応関係を示す。

【表 2. 2e】

J	音声	S
/CyV/	[硬口蓋子音+母音][ÇV]	/ÇV/
	[口蓋化子音+母音][C ^j V] [子音+j+母音][CjV]	/CyV/
/CiV/	[硬口蓋子音+i+母音][CiV]	*

はじめに、S/ÇV/ [ÇV] : /CyV/ [CjV]と J/CyV/ [ÇV]の対応について述べる。日本語には次のような対立がある。

【表 2. 2f】

/CV/	/CyV/
「ぼ」 /po/ [po]	「びよ」 /pyo/ [pjo]
「ぼ」 /bo/ [bo]	「びよ」 /byo/ [bjo]
「も」 /mo/ [mo]	「みよ」 /myo/ [mjo]
「そ」 /so/ [so]	「しよ」 /syo/ [ʃo]
「ぞ」 /zo/ [(d)zo]	「じよ」 /dyo/ [(d)zo]
「の」 /no/ [no]	「によ」 /nyo/ [ɲo]
「ろ」 /ro/ [ro]	「りよ」 /ryo/ [r ^j o]
(「ツオ」 /co/ [tso])	「ちよ」 /cyo/ [tɕo]
「こ」 /ko/ [ko]	「きよ」 /kyo/ [k ^j o]
「ご」 /go/ [go~ŋo]	「ぎよ」 /gyo/ [g ^j o~ŋ ^j o]
「ほ」 /ho/ [ho]	「ひよ」 /hyo/ [ço]

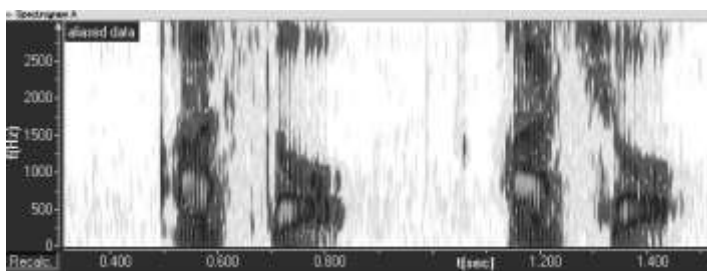
右の列は伝統的に「拗音」(ようおん)と呼ばれる音で、/CyV/の/V/の位置には上のような/o/の他に/a/と/u/の母音が立ちうる。

◆口蓋化のスペクトログラム

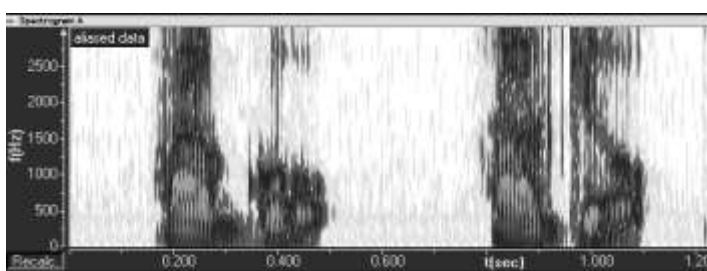
精密に見ると、(i) 唇音、(ii) 硬口蓋音、(iii) 軟口蓋音で口蓋化の様子が異なる。



(i) J. /abo/ /abyo/
(唇音 : /abyo/ [abjo]の[j]の位置で顕著な停止位置が見られる。)



(ii) J. /aso/ /asyo/
(硬口蓋音 : /asyo/ [afo]の[o]は単母音である。)



(iii) J. /ago/ /agyo/
(軟口蓋音 : /agyō/ [ag^ho]に渡り音が見られる。)

一方スペイン語では、非硬口蓋子音音素と対立する硬口蓋子音音素は/c/, /ɲ/, /ʎ/の3子音だけである。よって、J. /cy/, /ny/, /ry/のみがS/c/, /ɲ/, /ʎ/のそれぞれに対応し、他のJ. /py, by, my, sy, zy, ky, gy, hy/はS. /CyV/ [CjV]に対応する。

この事情から、以下の干渉が見られる。JPは、S/ÇV/とS/CyV/の違いの区別が困難である。例 : /ɲ/ : /ny/ *uña* (大きな爪) [u'ɲon] : *unión* (結合) [u'njon]; /ɲ/ : /ly/ *dalla* (大鎌) ['daʎa] : *dalia* (ダリア) ['dalja].

/c/ : /ty/の対立は、よほど保守的な音素体系をもつ日本語話者でないかぎり弁別は可能であ

る⁶³。例： *pacho* (平たい) [patʃo] : *patio* (中庭) [patjo].

一方、SP は J. 「貯金」 /cyokiN/ [teokiN], 「入門」 /nyuHmoN/ をだいたい正確に、S [tʃokin], [juˈmon] と発音することができるが、「病気」 /byoHki/ [bjo:ki]、「極端」 /kyokutaN/ [kʰokutaN] を、[bʲoki], [kʲokuˈtan] のような強い干渉の現れる発音にする。

次に、S. /CyV/ [CᶦV] と J. /CyV/ [ÇV] : /CiV/ [CᶦV] の対応について述べる。日本語には S. /CyV/ [CᶦV] の連続は起こらないが、それに対応するものに J. /CyV/ [ÇV] と J. /CiV/ [CᶦV] の 2 つの形態があり、両者は次のような対立をなす。

【表 22g】

/CyV/	/Ci. V/
「びよ」 /pyo/ [pjo]	「びお」 /pio/ [pio]
「びよ」 /byo/ [bjo]	「びお」 /bio/ [bio]
「みよ」 /myo/ [mjo]	「みお」 /mio/ [mio]
「しよ」 /syo/ [ʃo]	「しお」 /sio/ [ʃio]
「じよ」 /dyo/ [(d)zo]	「じお」 /dio/ [(d)zio]
「によ」 /nyo/ [ɲo]	「にお」 /nio/ [ɲio]
「りよ」 /ryo/ [rʲo]	「りお」 /rio/ [rʲio]
「ちよ」 /cyo/ [tʃo]	「ちお」 /cio/ [tʃio]
「きよ」 /kyo/ [kʰo]	「きお」 /kio/ [kʰio]
「ぎよ」 /gyo/ [gʲo~ŋʲo]	「ぎお」 /gio/ [gʲio~ŋʲio]
「ひよ」 /hyo/ [ço]	「ひお」 /hio/ [çio]

左の列は/CyV/が一つの音節を形成するが、右の列は/Ci/と/V/が分かれて、hiatus を形成する。

さて、S/CyV/ [CᶦV]が、日本人の発音で、J/CyV/ [ÇV]となるか、または J/CiV/ [Cᶦ. V]となるかは以下の4つの条件が働いているようである。

(i) S. /CyV/の/V/の影響。S/CyV/の/V/には、/e, a, o, u/が起こりうるが、JP は、/V/が/u/のとき最も S/Cy/を[Ç]と解釈しやすく、次に/o, a/が続く。最後に、/e/のときは、S/Cye/が J/Ce/となって融合する場合と、J/Cie/となって2音節となる場合があるが、どちらにしても J/CyV/にはならない。例：

viuda (未亡人) /byuda/ [bʲuda] > J. /byuHda/ [bjur:da]

Piura (都市名) /pyura/ [pʲura] > J. /pyuHra/ [pjur:ra]

biología (生物学) /byoloˈxia/[bʲoloˈxia] > J. /byoHrohiHa/ [bjo:roçia]~bio-/ [bio-]

piano (ピアノ) /pyano/ [pʲano] > J. /piaHno/ [pja:no]~pia-/ [pia-]

pieza (断片) /pyeθa/ [pʲeθa] > J. /pieHsa/ [pie:sa]

⁶³ よって、現代日本語の音素体系に「ティ」 /ti/を認めてもよいだろう。例：「パーティー」 /paHtiH/ [pa:ti:].

S. /Cye/ > J. /Ce/となるのは、/C/が軟口蓋子音/k, g, x/の場合である。たとえば、siguieron (彼らは続いた) [si'ɣjeron]/...gye.../は、JP の発音では[sige:ron]となりがちである。よって以下のよな対の区別が困難になる。

quieto (静かな) /'kyeto/ ['kjetɔ] : *queso* (チーズ) /'keso/ ['keso]
rigieron (彼らは支配した) /ri'xyeron/ [ri'xjeron] : *dijeron* (彼らは言った) /di'xeron/
 [di'xeon]

これは、日本語では軟口蓋音が/e/の前でかなり口蓋化しているためである。つまり、[k^je]の[k^j]と[e]の間に別の硬口蓋性の渡り音[j]が入る余裕がなく、また[k^j]と区別される[k^jɰ]という音が存在するのに無理があるためである。よってJP は、S. *quieto*['kjetɔ]を、>J. /kieHto/とするか、または >J. /keHto/とするか、どちらかの方法をとることになり、いずれにしても*/kye.../にはならない。

(ii) アクセントの影響。強勢のある音節よりも、それが無い音節のほうが、S/CyV/ > J/ÇV/の変化が起こりやすい。例：

ciudad (都市) /θyu'dad/ [θjɰ'da(d)] > J/syuHdaH/ [ʃu:da:]
 vs. *ciúatico* (きざな) /syutiko/ [sjɰtiko] > J. /syutiko/ [ʃu:tiko]

(iii) 先行子音の影響。S. /CyV/の/C/が歯音と歯茎音の場合は、/C/が唇音・軟口蓋音に比べて、S/CyV/ > J/ÇV/の変化が起こりやすい。

/C/=歯音・歯茎音の場合。S には/t, d, θ, s, n, l, r, r/という歯音・歯茎音があり、これらに/y/が続くと、JP の発音では容易に口蓋化され、後続する母音とともに1音節となる⁶⁴。

ciudad (都市) /θyu'dad/ [θjɰ'da(d)] > J/syuHdaH/ [ʃu:da:]
siamés (シヤムの) /sya'mes/ [sjɑ'mes] > J. /syaHmeHsu/ [ʃa:me:su]
Niobe (ギリシヤ神話のニオベ神) /'nyobe/ ['njɔβe] > J. /nyoHbe/ [no:be]
murió (彼は死んだ) /mu'ryo/ [mu'rio] > J. /muryoH/ [mur^ɰo:]

また、J の歯音・歯茎子音音素/t, d, c, s, z, n, r/に限り、/Cya, Cyo Cyu/の他に/Cye/も無理なく発音される。ただし、/t, d/は除く。例：「ジェット機」/zyeQtoki/, 「シェパード」/syepaHdo/. このことから、S. /Cye/ > J. /Çe/が起きやすい。

S. *cielo* (天) /θyelo/ [θjelo] > J. /syehro/ [ʃe:ro]

⁶⁴ ただし、保守的な発音では/tyV/, /dyV/の音節がないため、除外される。進歩的な日本語では、外来語、たとえば「プロデューサー」/purodyuHsaH/などの影響によって、/tyV//dyV/の音節が形成されている。このことから、S. *diurno* (昼の) ['diurno]を >J. [d^ɰu:ru^ɰno]とする傾向がある。保守的な発音ではJ. [d^ɰu:ru^ɰno]になるであろうが、現在ではあまり聞かれない干渉である。

/C/= 唇音・軟口蓋音の場合。S/CyV/ > J/ÇV/の変化が起こる可能性が少ない。

viento (風) /byento/ ['b̥jento] > J. [biento]
comió (彼は食べた) /ko'myo/ [ko'mj̥o] > J. [komjo:]
quiosco (売店) /kyosko/ [k̥josko] > J. [kiosuko]

それでも後続の母音が/u/の場合には S/CyV/ > J/ÇV/の変化が起こる可能性がある。

Piura /pyura/ ['pj̥ura] > J. [pj̥u:ra]

(iv) 発話スタイルの影響。発話がぞんざいになればなるほど、S/CyV/ > J/ÇV/の変化が起こりやすい。逆に丁寧な発話では、圧倒的に母音の分立 hiatus (J. /Ci. V/) が目立つ。

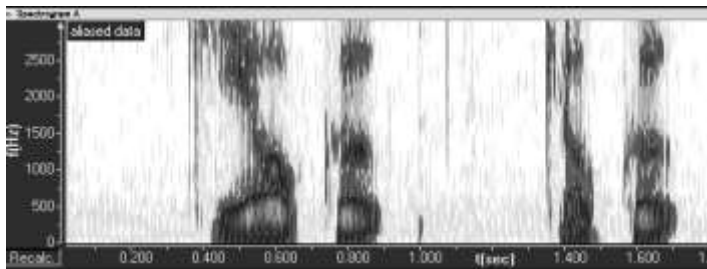
なお、JP は S/CyV/ > J/ÇV/の変化が起こると、その母音を長音化する傾向がある。

SP は日本語の hiatus (J. /Ci. V/) を二重母音にして発音する傾向がある。これは、S が母音の分立 hiatus を極度に嫌う言語であるためである。

J. 「記憶」 /kioku/ [k̥ioku] > S. ['k̥joku]
 J. 「微温」 /bioN/ [b̥ioN] > S. ['b̥jon]
 J. 「気炎」 /kieN/ [k̥ieN] > S. ['k̥jen]

◆J. 「記憶」 /kioku/ と 「曲」 /kyoku/

前者の hiatus の様子がよくわかる。



J. 「記憶」 /kioku/ : 「曲」 /kyoku/

(4) スペイン語の唇軟口蓋半母音音素/w/

スペイン語の唇軟口蓋半母音音素/w/は次の異音を持つ。

位置	異音	例
1. /#wV/, /n. wV/	[w]([g ^w]~[ɣ ^w])	#Huevo (卵) /'webo/ ['w̥ueβo]
2. /V. wV/	[w]([ɣ ^w])	ahuecar (空にする) /awe'kar/ [aw̥ue'kar]
3. /. CwV/	[w̥]	aduana (税関) /adwana/ [ad̥uana]

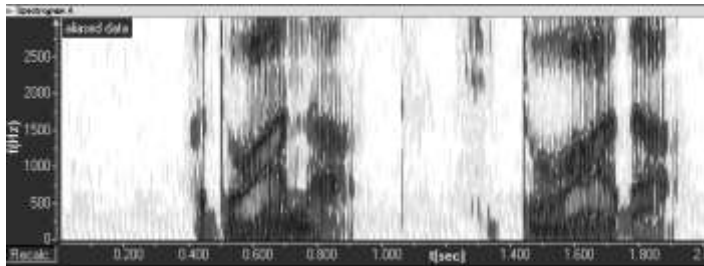
1. [w]は唇軟口蓋半母音である。休止や/n/の後⁶⁵で、[g^w]~[ɣ^w]~[w]が個人や発話のスタイル

⁶⁵/kon. webo/のように、/n/の後に音節境界がある。nuevo/nwebo/ [n̥ueβo]のように、音節境界が

によって交替する。[g^w]は唇音化された後部軟口蓋有声閉鎖音、[ɣ^w]は唇音化された後部軟口蓋有声摩擦音である。2. /V. wV/の位置では[ɣ^w]~[w]の交替があるが、[g^w]は現れない。3. では非成節的[u]だけが現れる。半母音は丁寧な発話では、*situado* (位置して) などの語で成節的なhiatusを形成することがある。そのときuは短時間定位置を保つ。

◆S. /adwana/と S. /situada/のスペクトログラム。

situada の/u/の定位置が観察される。

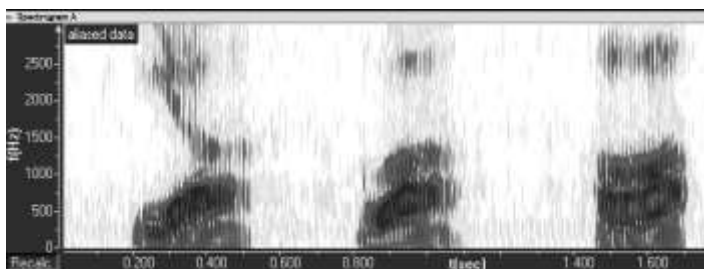


S. /adwana/ : S. /situada/

(5) 日本語の前よりの軟口蓋半母音/w/ [ɰ⁺]はJ. [ɰ⁺]が非成節化した音である⁶⁶。この半母音は、分布が非常に特殊で/a/の前にしか現れない⁶⁷。例：「和」/wa/ [ɰ⁺a].

◆/w/のスペクトログラム

/a/は幾分後寄りになるので、精密に表記すると「和」/wa/は、[ɰa]となる。逆に「矢」/ya/の/a/は前寄りである([ja]). また、「泡」/awa/のような母音間ではさらに開いて発話されるのが普通である。次は、「矢」「和」「泡」のスペクトログラムである。「泡」の/w/が開き気味であることがわかる。以下ではこれらの区別をせず簡略に[ɰa]と示す。



/ya/ /wa/ /awa/

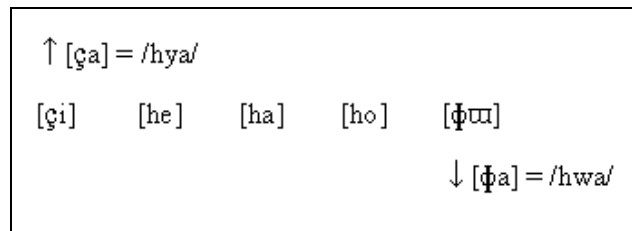
現代日本語では、/w/の前に立ちうる子音として唯一/h/が認められる。これは以下のように

ないときは表の3に分類される。

⁶⁶ 竹林(1976: 33; 1996: 47-48).

⁶⁷ 進歩的な発音では、外来語などの影響によって/wi, we, wo/の音節も生まれている。例：「ウィンター (スポーツ)」/wiNtaH/, 「ハイウェー」/haiweH/, 「(ミネラル) ウォーター」/woHtaH/. しかし、*/wu/は存在しない。

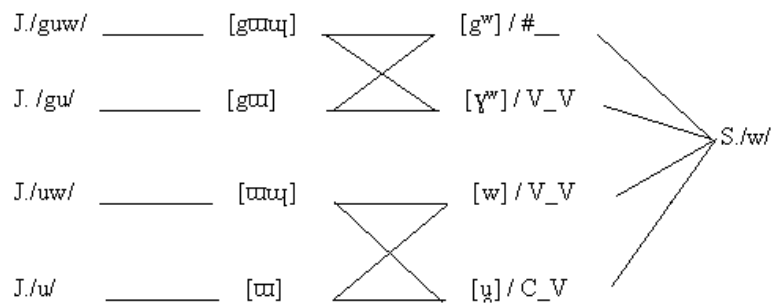
説明できる。日本語の音声史において、[pa]から発達した[ɸa]は、さらに[ha]に変化した⁶⁸、現代語において再び外来語の影響によって[ɸa]が再生し、音素的地位を築いている。たとえば、「ファン」は丁寧な発話では、[ɸan], ぞんざいになると[ɸaN]となる。後者は、「湾」[ɸaN]の[ɸ]が無声化した音であるため、次のような比例式が成立する。「案」[aN] : 「半」[haN] = 「湾」[ɸaN] : 「ファン」[ɸaN]。「案」、「半」、「湾」がそれぞれ/aN/, /haN/, /waN/と解釈されるので、「ファン」を、/hwan/とする分析が合理的である。また、[ɸan]はハ行の「フ」[ɸu]が下の図の↓のように独立した系列である。同様に独立した[ɸa]が、/hya/と解釈されるので、それに平行させれば、[βa]は当然/hwa/となるはずである。



よって筆者は、[ɸa]を/hwa/と解釈し、Jones (1950: 243) のように/h/から独立した *ɸを設定しない⁶⁹。

(6) 比較

S. /w/の諸異音に対応するJの音には、[gɸɸɸ], [gɸ], [ɸɸɸ], [ɸ]が挙げられる。その対応関係は次のようになる。



S. /w/の諸異音に対応するJの音が音素として/guw/, /gu/, /uw/, /u/に対応するので、JPには次のような過大区別をする傾向がある。たとえば、*ahueco*/a'weko/ [a'ɸ^wɸeko] ~ [a'weko]は、>J. /aguweHko/, /agueHko/, /aweHko/, /aueHko/のように、まちまちな反応をする。また子音に続く場合は、S. /ad'wana/ [a'd^wɸana] > J. /adu'waHna/, /adua'na/のように母音が分立する。

音声的には、S. [g^w], [ɸ^w]はJ. [gɸɸɸ]に比べて調音時間が短く、また日本語にはない円唇性と後舌性が目立つ。S. [w]は、J. [ɸ], [ɸɸ]に比べ調音位置が高く後寄りで円唇的である。また、J[ɸ]より調音時間が短い。

⁶⁸ 橋本(1950): 29f.

⁶⁹ この解釈の難点は、J/CwV/の/C/が/h/だけに限られることになる。これは/h/の音声的性質が非常に母音的であることが原因であると思われる。

S. /w/の前に子音がある場合、S. /Cw/は[Cu]となる。これに対して、JP は[CuV]または[CuuV]で対応させる。[CuV]となるのはV が/a/の場合であり、[CuuV]となるのは、V が/a/以外の母音の場合である。これはJに/wa/以外に/wV/がないためである⁷⁰。

guante (手袋) /'gwante/ ['g^wuante] > J. /guwaNte/ [guuante]
cuesta (坂道) /'kwesta/ ['k^westa] > J. /kuesuta/ [kues'ta]

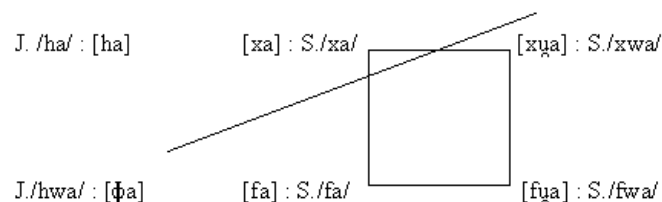
また、唇子音または軟口蓋子音に/wa/, /wo/, とくに/wo/が続く音素連続に対し、JP は/w/を落とす傾向がある。

vacuo (空の) /'bakwo/ ['bak^uo] > J. /baHko/
Nicaragua (ニカラグア) /nika'ragwa/ [nika'ray^wua] > J. /nikaraga/

これは、Jには/hwV/以外の/CwV/がないためであり、かつ、/g, k, x/と/w/はともに軟口蓋で調音されるのでJP は両者をつけて1音にしてしまうためである。よって、JP は以下のようなSの対を区別しにくい。

vacuo (空の) /'bakwo/ ['bak^uo]
Baco (バックラス) /'bako/ ['bako]
contiguo (隣接した) /kon'tigwo/ [kon'ti^yu^o]
contigo (君と) /kon'tigo/ [kon'tiyo]

J. /hwV/にはS. /fV/, /fwV/, /xwV/が対応し、両者は/V/が/a/の場合を例にとれば以下のような関係にある。



すなわち、S. /xa/とJ. /ha/は1対1に対応して(音素的な)問題はないが、一方S. /xwa/, /fa/, /fwa/はすべて > J. /hwa/にまとめられてしまう。よって、JP は斜線の下領域で過小区別の誤りをおかすことになる。JP は次のような最小対語に注意すべきである。

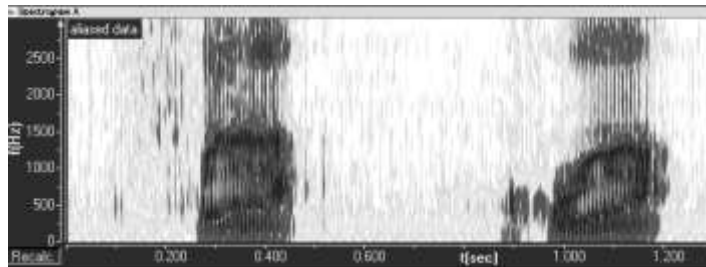
fe (信念) /'fe/ ['fe] : *fue* (...であった) /'fwe/ ['fue]
ferino (凶暴な) /fe'rino/ [fe'rino] : *fuerno* (外部の) /fue'rino/
juego (遊び) /'xwego/ [xueyo] : *fuego* (火) /'fwego/ [fueyo]
a Juan (ファンに) /a'xwan/ [a'xuan] : *afán* (熱心) /a'fan/ [a'fan]

⁷⁰/we/, /wo/, /wi/をもつJ話者は、すべて[CuuV]とする傾向がある。

また、音声的には S. /x/は軟口蓋摩擦音であるのに対し、J. /h/は声門摩擦音であり、S. /f/は唇歯摩擦音であるのに対し、J. [β]は両唇弱摩擦音であることが異なる。

◆S. /fa/ [fa] : S. /xwa/ [xwa]のスペクトログラフ

[fa]には渡り音がないが、[xwa]にはそれが観察される。



S. /fa/ [fa] :

S. /xwa/ [xwa]

2. 2. 2. 下降二重母音と母音連続

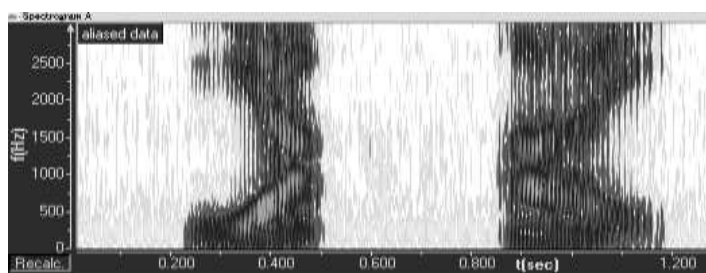
(1) スペイン語の前舌下降二重母音

- /ey/ [e̞] : veinte (20) /'beynte/ ['be̞nte]
- /ay/ [a̞] : baile (踊り) /'bayle/ ['ba̞le]
- /oy/ [o̞] : boina (ベレー帽) /'boyna/ ['bo̞na]
- /uy/ [u̞] : muy (とても) /'muy/ [mu̞]

S の[̞]は英語の boy の半母音と比べて、上昇がかなり高いのが特徴であるが、音節主音の前の半母音と比べれば幾分開き気味になる⁷¹。

◆S. /ya/ [̞ja]; S. /ay/ [̞aj]のスペクトログラフ

上昇二重母音と比べて下降二重母音が開き気味である。



S. /ya/ [̞ja];

S. /ay/ [̞aj]

⁷¹ cf. Navarro Tomás (1918, 1972): 49.

(2) 日本語の前舌下降二重母音

Jの下降二重母音として、/aJ/, /oJ/, /uJ/の3種が認められる⁷²。丁寧に発音されたときは/eJ/ [ej]も現れるが、これは/eH/ [e:]のように長音になりやすい。下降二重母音は、丁寧な発音において、次のように二重母音を形成しない母音連続 (hiatus) と対立する⁷³。

「営利」 /eJri/ [eiri]~/eHri/ [e:ri] : 「絵入り」 /eiri/ [eiri]

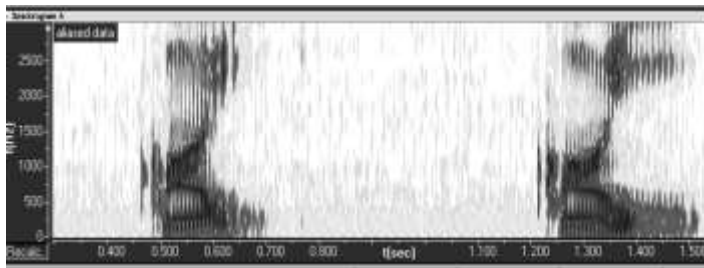
「貝」 /kaJ/ [kaj] : 「下位」 /kai/ [kai]

「鯉」 /koJ/ [koj] : 「故意」 /koi/ [koi]

「杭」 /kuJ/ [kuj] : 「句意」 /kui/ [kui]

/J/は渡り音であるために、定位置にある時間は短い、「蚊」/ka/と「貝」/kaJ/の調音時間を比べると、丁寧な発音では後者は前者の2倍近くになる。これは、モーラ音素/H/と平行する現象なので、/J/もモーラ音素として認められる。

◆J. /koJ/; K. /koi/のスペクトログラム : /J/は渡り音であるが、/koi/の/i/は定位置にある。



J. /koJ/;

/koi/

(3) 比較

S. /Vy/は1音節1モーラであるのに対し、J. /VJ/は1音節ではあるが、2モーラであるため比較的長くなる。例：Cairo (カイロ：地名) /'kayro/ ['kajro] > J. /kaJro/ [kajro]. Sの下降二重母音はアクセントがかかっても長音化しないので、両者の差はより顕著になる。

次は音素的な問題である。Jでは/eJ/ > /eH/となる傾向がある。とくにアクセントのない S. /ey/, たとえば *peinador* (理髪師) /peyna'dor/ [pejnado]は、> J. /peHnadoHr/とする。スペイン語では/ey/と/e/では以下のように対立するので注意しなければならない。

reino (王国) /'reyno/ ['reino] : *reno* (トナカイ) /'reno/ ['reno]

peina (彼は櫛でとかす) /'peyna/ ['peina] : *pena* (罰) /'pena/ ['pena]

(4) スペイン語の円唇後舌下降二重母音

/aw/ [au] : *causa* (原因) /'kawsa/ ['kausa]

⁷² cf. 服部(1951): 185m 柴田(1965), 秋永(1968).

⁷³ これらの対立は普通体やぞんざいな発音では失われてしまう。

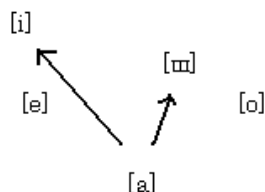
/ew/ [e̞] : *deuda* (借金) /'dewda/ ['de̞da]

/ow/ [o̞] : *bou* (地引き網) /'bow/ ['bo̞]⁷⁴

/y/と同様に、音節主音の前の/w/に比べて幾分開き気味になるが、英語の *how* ['haʊ]などの [o]に比べると、閉じた[u]に近いことがスペイン語の特徴である。

(5) 日本語の母音連続

Jには/J/に対応する */W/という半母音はなく、したがって */aw, ew, ow/のような二重母音もない。これは次の図のように、J. /i/はかなり前舌で高い位置にあって、/o, a, u/から遠いので、そのため、たとえば[a]から[i]に向かえば、たとえ[i]の位置に達しなくても、他の母音と混同されることがない。そこで調音上の経済が働いて、開き気味の半母音[i]が形成されるのであろう。一方、/u/では、[u]の調音位置が中舌ですべての母音に近く、容易にその位置に達してしまうので、調音上の経済が働く余地がないためであろうと考えられる。



S. /aw, ew, ow/に匹敵するのは、次のような母音連続である。

/au/ 「買う」 /kau/ [kau]

/eu/ 「希有」 /keu/ [keu]

/ou/ 「項」 /kou/ [kou]

J. /ou/は、ふつうの発音では/oH/となって長音化されるが、丁寧な発音では以下のように/ou/と/oH/が対立する。

「子牛」 /kousi/ [kouci] : 「講師」 /koHsi/ [ko:ci]

「夜討ち」 /youci/ [joutʃi] : 「幼稚」 /yoHci/ [jo:tʃi]

(6) 比較

S. /Vw/は1音節であるのに対し、J. /Vu/は2音節2モーラであるために、音声的に違いがある。

S. *auto* /'awto/ ['a̞to](判決) : J. /au/ 「アウト」 [a̞uto].

S. /aw/の全体に強勢がかかるが、日本語では/a↓u/となって、アクセントの切れ目が生じ、

⁷⁴ S. /ow/は非常に頻度が低く、Gili Gaya (1966: 119)によれば、それはスペイン語本来のものではなく、カタルーニャ語起源の *bou* や *Dalou*, *Masnou* 等のカタルーニャ地方およびガリシア地方の人名・地名(例: *Sousa*, *Louredo*, *Coutiño*)に見られるだけである。

その上全体的な調音時間が長くなる。音声的には、S. /w/が円唇・後舌母音であるのに対し、J. /u/は非円唇・中舌母音である。J では/ou/ >/oH/の傾向があるため、JP の発音では、とくに非強勢音節の S. /ow/が長音化される⁷⁵。例：Louredo/low'redo/ [lou'redo] > J. /roHreHdo/。

2.3 閉鎖音

2.3.2. 有声閉鎖音

(1) スペイン語の/b, d, g/

母音の前の位置にある S. /b, d, g/の異音にはそれぞれ次のものがある。

/b/	[b]	両唇有声閉鎖音
	[β]	両唇有声摩擦音
/d/	[d]	歯有声閉鎖音
	[d̪]	歯有声摩擦音
/g/	[g]	軟口蓋有声閉鎖音
	[ɣ]	軟口蓋有声摩擦音
	[g ⁺]	後部硬口蓋有声閉鎖音
	[ɣ ⁺]	後部硬口蓋有声摩擦音
	[g ^{-w}]	後部軟口蓋有声閉鎖音
	[ɣ ^{-w}]	後部軟口蓋有声摩擦音

閉鎖音[b], [d], [g], [g⁺], [g^{-w}]は語頭および/n/の後で現れる。[d̪]は/l/の後でも現れる。

#Voy. 「私は行く」 /'boj/ [boj]
 invierno 「冬」 /in'byerno/ [im'βjerno]
 #Dos 「2」 /'dos/ [dos]
 toldo 「日よけ幕」 /'toldo/ [toldo]
 indicar 「示す」 /indi'kar/ [indi'kar]
 #gol 「ゴール」 /'gol/ [gol]
 pongo 「私は置く」 /'pongo/ [pongo]

摩擦音[β], [d̪], [ɣ], [ɣ⁺], [ɣ^{-w}]は上記以外の環境で現れる⁷⁶。

pavo 「七面鳥」 /'pabo/ [paβo]

⁷⁵ この現象は S. /ow/の頻度が限られているために、教育的にはあまり問題にならない。

⁷⁶ スペイン語の歯摩擦音[d̪]は円熟性(mellow)のある音である。一方、英語の歯摩擦音[ð] (father [fa:ðə])は粗擦性(strident)の音で摩擦性が強い。そこで日本人にはスペイン語の[d̪]が「ダ」行音の子音のように聞こえ、英語の[ð]は「ザ」行音の子音のように聞こえる。スペイン語で歯摩擦音[ð]は[θ]が有声化したときに生じる。例：Hazlo. /'aθlo/ [aðlo] 「それをしなさい」。上田 (2011: 15).

acuerdo 「合意」 /'akwerdo/ ['akwɛrdo]

pagar 「払う」 /pa'gar/ [pa'ɣar]

seguir 「続く」 /se'gir/ [se'ɣir]

agua 「水」 /'agwa/ [aɣ^wua]

[g⁺]と[ɣ⁺]は、/i/, /y/の前に現れる後部硬口蓋音である。[g^{-w}]と[ɣ^{-w}]は、/u/, /w/の前に現れる後部軟口蓋円唇化音である。

この他に、/b/と/d/には/u/, /w/の前に現れる円唇化異音[b^w], [β^w];[d^w], [d^w]がある。/o/の前の子音の円唇性は比較的弱い。

スペイン語の/b/, /d/, /g/には閉鎖音と摩擦音の異音がある。頻度から見れば摩擦音の方が優勢であるが、音素的には(構造的には)有声閉鎖音に分類される。これは、S/p, t, kと平行した閉鎖音系列であるため、かりに S/f, θ, s, xと平行させても、音素的にも音声的にも無理が生じるためである。音素的には、/b, d, g/が3種であるのに対し、摩擦音系列/f, θ, s, x/は4種であること、音声的には、/b/の異音[β]と/f/ [f], /d/の異音[d]と/θ/ [θ]、/g/の異音[ɣ]と/x/ [x]はそれぞれ円熟性/粗擦性で弁別されるが、調音点についても少しずつずれが生じる。たとえば、[β]は両唇音であるが、[f]は唇歯音である。(ただし、[ɣ]と[x]の調音点は同じである。) また、/p, t, k/が音節末で弱化されると、それぞれ[β, d, ɣ]に近くなるので、この点からも/b, d, g/は/p, t, k/と系列を共にする。

(2) 日本語の/b, d, g/

日本語には次の有声閉鎖音素がある。

/b/	[b]	両唇有声閉鎖音
	[β]	両唇有声摩擦音
	[b ^j]	両唇有声硬口蓋化閉鎖音
	[β ^j]	両唇有声硬口蓋化摩擦音
/d/	[d]	歯茎有声閉鎖音
/g/	[g]	軟口蓋有声閉鎖音
	[g ⁺]	後部硬口蓋有声閉鎖音
	[g ⁻]	後部軟口蓋有声閉鎖音
	[ŋ]	軟口蓋有声鼻音
	[ŋ ⁺]	後部硬口蓋有声鼻音
	[ŋ ⁻]	後部軟口蓋有声鼻音

[b]は語頭およびN/の後で現れる。例：「便利」/beNri/ [benri]; 「今晚」/koNbaN/ [kombaN]。
[β]は母音間で、ややぞんざいな発話に現れる。「危ない」/abunaJ/ [aβunaɪ]。

/b/にはこれら以外に、/i, y/の前に現れる口蓋化異音[b^j], [β^j]がある。例：「病気」/byoHki/ [b^jo:kⁱ];

/d/は一般に[d]で発音される。「台所」/daidokoro/ [daɪdokoro]。

[g⁺]は語頭（文法的な語頭。単語の始め）で、/e, i, y/の前に現れる。例：「銀座」/giNza/ [g̃ĩndza], 「元気」/geNki/ [g⁺enki].

[g]は語頭で、/o/の前に現れる。例：「5時」/gozi/ [g̃ozi].

[g]は語頭で、上記以外の環境に現れる。例：「外国」/gaJkoku/ [gaik̃oku].

[ŋ⁺]は語中で、/e, i, y/の前に現れる。例：「鍵」/kagi/ [kaŋ⁺i].

[ŋ]は語中で、/o/の前に現れる。例：「籠」/kago/ [kaŋo].

[ŋ]は語中で、上記以外の環境に現れる。例：「かがむ」/kagamu/ [kaŋamu].

すべての音素は/o/の前で弱い円唇性のある異音が現れる。

(3) 比較

(a) S/b/と J/b/. 両言語において摩擦音[β]が現れる環境が類似しているが、日本語では[b]-[β]の分布に個人差があり、[β]を用いない人もいる。一方、スペイン語ではよほど丁寧な発話でない限り、[β]→[b]とはならない。

(b) S/d/と J/d/. スペイン語では[d]と[d̃]が相補的分布をするが、日本語ではほとんど[d]となる。日本語話者は、S[d̃]を J/d/と同一化するので、音素的な干渉は起こらない。

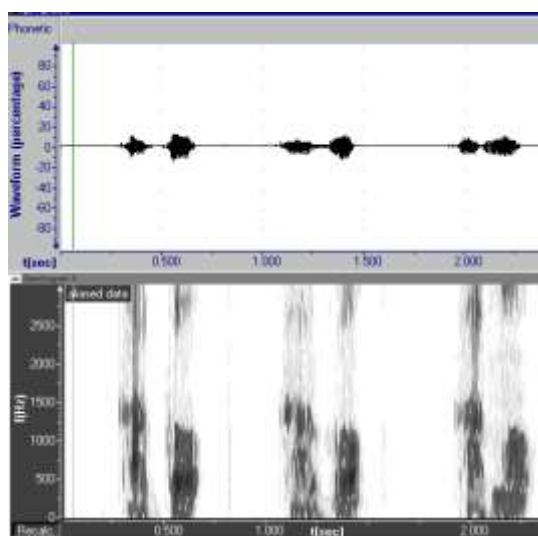
(c) S/g/と J/g/. 調音点について、S/k/と J/k/で述べたことと平行した相違点がある (2. 3. 1. 3)。すなわち、J/g(u) /が S/g(u) /に比べて非常に前よりであること、また、J/g(i) /の口蓋化がスペイン語と比べて著しいことが指摘できる。

(d) 以上の他に、スペイン語の[b^w][β^w], [d^w], [d̃^w], [g^w], [ŋ^w]の円唇性は日本語にないものであり、一方日本語の[b^j], [β^j], [d^j], [g^j]の口蓋性はスペイン語にない。

J[ŋ], [ŋ⁺], [ŋ-]については後述する (2. 6. 3. 2)。

◆J. /g/の異音のスペクトログラフ

/kago/の/g/を閉鎖音[g]、摩擦音[ɣ]、鼻音[ŋ]のスペクトログラフ：前2者の区別がつきにくいwaveformを見ることで摩擦音に波形があることがわかる。鼻音の場合はさらにそれが顕著である。



[kago]

[kayo]

[kaŋo]

2.3.1. 無声閉鎖音

(1) スペイン語の/p, t, k/

スペイン語には以下のような無声閉鎖音がある。右はその異音である。

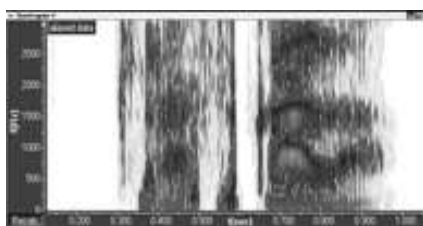
- /p/: 両唇無声閉鎖音 [p], [p^w]
/t/: 歯無声閉鎖音 [t], [t^w]
/k/: 軟口蓋無声閉鎖音 [k⁺], [k], [k^w]

- 例：
peso 「重さ」 /'peso/ ['peso]
prado 「牧場」 /'prado/ ['prado]
plaza 「広場」 /'plaθa/ ['plaθa]
tiza 「チョーク」 /'tiθa/ ['tiθa]
tres 「3」 /'tres/ ['tres]
queso 「チーズ」 /'keso/ ['keso]
crudo 「生の」 /'krudo/ ['krudo]

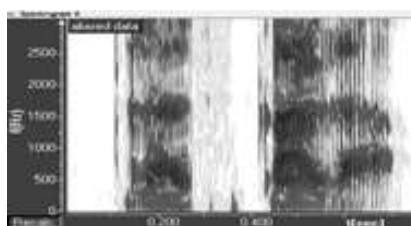
スペイン語に/tl-/の子音結合はないが、メキシコ方言には存在する。例：*Tlascalá* (トラスカラ：メキシコの地名) [tlas'kala]。筆者の観察ではこの場合側面開放 (lateral release) にはならず、[t(a)la...]のように t の後に微かな母音の開放がある。語中の/tl/は両者の間に音節境界がある。例：*atlas* 「地図帳」 [at. las]。

◆側面開放時の摩擦性

側面開放時の[l]の部分の摩擦音性がある。



[t^{l-}] 側面開放



[tl-] 非側面開放

[p^w], [t^w], [k^w]は円唇化のある閉鎖音で、/o/, /u/, /w/の前に現れる。/o/の前でも弱い円唇化が見られる。

- puerco* 「豚」 /'pwerko/ ['p^wuɛrko]
túnel 「トンネル」 /'tunel/ [t^wunel]
cuento 「話」 /'kwento/ [k^wuɛnto]
cola 「尾」 /'kola/ [k^wola]

[k⁺]は/i, y/の前に現れる後部硬口蓋閉鎖音、[k]は e, a, o, r, l/の前に現れる軟口蓋閉鎖音であり、[k]は/u, w/の前に現れる後部軟口蓋閉鎖音である。

químico 「化学者」 /'kimiko/ [k⁺imiko]
quieto 「静かな」 /'kyeto/ [k⁺ieto]
cama 「ベッド」 /'kama/ ['kama]
clima 「天候」 /'klima/ ['klima]
cuna 「揺りかご」 /'kuna/ [k_una]
cuento 「物語」 /'kwento/ [k_uento]

(2) 日本語の/p, t, k/

日本語には次の無声閉鎖音がある。

/p/: 両唇無声閉鎖音[p], [p^j]
/t/: 歯茎無声閉鎖音[t]
/k/: 軟口蓋無声閉鎖音[k⁺], [k], [k]

[p], [t], [k]は/i, y/を除く母音の前に現れる。

「パン」 /paN/ [paN]
「天」 /teN/ [teN]
「缶」 /kaN/ [kaN]

[p^j]と[k^j]は/i/, /y/の前に現れる。

「800」 /haQpyaku/ [happ^jaku]
「曲」 /kyoku/ [k⁺oku]
「聞く」 /kiku/ [k⁺iku]

[k⁺]は後部硬口蓋閉鎖音で口蓋化が著しく、/k/の他の異音に比べかなり前寄りである。[k]は/e/の前に現れる後部硬口蓋閉鎖音で、[k⁺]よりやや後寄りである。例:「今朝」/kesa/ [k⁺esa]。

(3) 比較

両言語の音素体系と異音の分布が比較的類似しているので、音素的な問題（弁別の問題）はない。以下では音声的な差異について述べる。

(a) スペイン語の子音は母音/u/や半母音/w/の前では、顕著な円唇化が起こる。例: *puso* 「彼は置いた」 /'puso/ [p^wuso]. 日本語の/u/は中舌母音[u]であり、また円唇化がないため、このような現象は見られない。例: 「プリン」 /puriN/ [puriN].

(b) 一方、日本語では/i/や/y/の前で子音が口蓋化するが、スペイン語ではこのような口蓋化は起こらない。

(c) S/t/と J/t/. スペイン語では調音点が歯の裏であるのに対し、日本語では前部歯茎である。聴覚的にはほとんど差がない。

(d) S/k/と J/k/の間に、調音点について次に示されるような相違がある。

前 (硬口蓋後部)	後 (軟口蓋)
S. [k ⁺ (i)]-----[k ⁺ (e)]-----[k(a)]-----[k ^{-w} (o)]-----[k ^{-w} (u)]	
J. [k ⁺ (i)]-----[k ⁺ (e)]-----[k(u)]-----[k(a)]-----[k ^{-w} (o)]	

J. [k(u)]が S. [k^{-w}(u)]よりも非常に前寄りであって、[k(a)][k(o)]に対する相対的位置が逆転している。これは、J[u]の中舌性によるものである。また、J[k⁺(i)]がかなり前寄りであることにも注意したい。

しかし、どれも S/k/, J/k/の異音であるため、スペイン語の話者も日本語の話者がそれぞれ日本語またはスペイン語を学習する上で、音素的な干渉は生じない。

2.4 破擦音

2.4.1. スペイン語/c/

スペイン語の破擦音素/c/には以下の異音がある。

- /c/ → [tʃ] 硬口蓋歯茎無声破擦音
- [tʃ^w] 円唇化された硬口蓋歯茎無声破擦音

[tʃ]は/i, y, e, a/の前で現れる。ただし/y/の前では稀である。

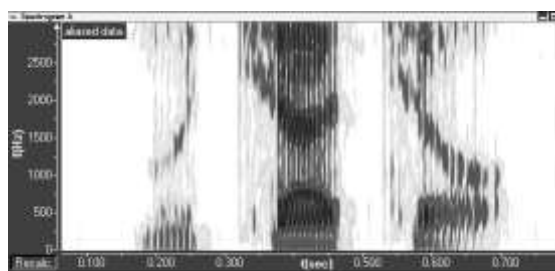
muchacho (男の子) /mu'caco/ [mu'tʃatʃo]
coche (車) /'koce/ ['kotʃe]
Chiapas (メキシコ・チャパス州) /'cyamas/ [tʃi'apas].

[tʃ^w]は/u, o, w/の前で現れる。

chupar (吸う) /cu'par/ [tʃ^wupar]
chueco (歪んだ) /'cweko/ [tʃ^wueko]
mucho (多く) /'muco/ ['mutʃ^wo]

◆破擦音のスペクトログラム

閉鎖音の部分と摩擦音の部分が観察できる。このように調音的には2つの子音の連続と見なせるので、IPAは個別の子音の中に入れず、その他の記号として扱っている。しかし、これらの間に切れ目がないのでここでは1音として見て分析する。



muchacho[mu'tʃatʃo]

2.4.2. 日本語/c/

日本語の破擦音素/c/には以下の異音がある。

- /c/: [ts] 歯茎無声破擦音
 [tɕ] 歯茎硬口蓋無声破擦音

[ts]は/u/の前に現れる。

「勝つ」/kacu/ [katsu].

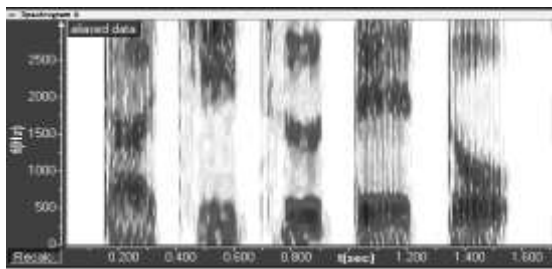
[tɕ]は/i, y/の前に現れる。

「力」/cikara/ [teikara]

「お茶」/ocya/ [otea].

◆J. [tei]と[tɕu]の摩擦部分

後続する母音のフォルマントに近いエネルギーに集中がある。

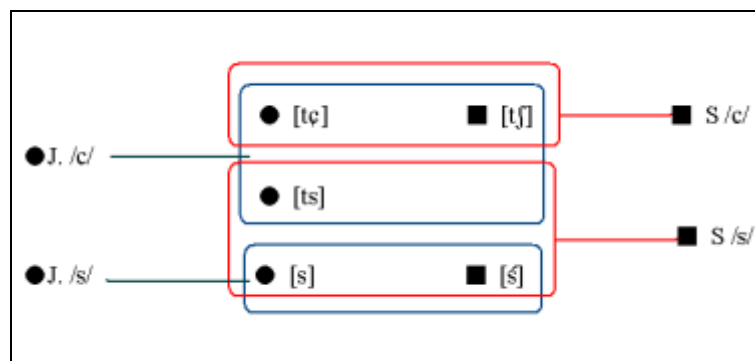


[ta, tei, tsu, te, to]

2.4.3. 比較

(1) 日本語の/cu/ [tsu]

J. /cu/ [tsu]はスペイン語にはなく、スペイン語話者はS. [s]で代用する。



上の図の青い線で囲まれた領域が日本語の/c/と/s/の異音である。日本人はS. [tɕ]をJ. /c/に、S. [s]をJ. [s] /s/に同化させるが、これは音素的な問題にはならない。一方、スペイン語話者は、J. [tɕ]をS. /c/に同化させ、J. [ts], [s]をS. /s/に同化させる傾向がある。前者は音素的な問題

にならないが、後者は J. /c/ : /s/ の対立があるために過小区別となる⁷⁷。

「罪」 /cumi/ [tsumi]

「隅」 /sumi/ [sumi]

S/c/ [tʃ] は調音点が前部硬口蓋であるが、J. [tɕ] の調音点は歯茎硬口蓋であって、いくぶん前寄りである。聴覚的に S. [tʃ] はこもった音色をもつが、J. [tɕ] は「浅い」感じがする。また、S[tʃ] には多少の円唇化があるが、J. [tɕ] は平唇である。

なお、その他の子結合については後述する。

◆スペイン語の[tʃ]と日本語の[tɕ]

スペイン語の[tʃ]と日本語の[tɕ]はとてもよく似た音で聞き分けるのが難しい。竹林 (1996: 50) によれば、[tʃ]は硬口蓋歯茎破擦音 (palato-alveolar affricate) であり、[tɕ]は歯茎硬口蓋破擦音 (alveolo-palatal affricate) である。破擦音の項 (id.: 50) には詳しい調音点の違いが説明されていないが、それぞれに対応する摩擦音の項 (id.: 41-42) によれば、フランス語やドイツ語の [ʃ] は後舌面がもり上がり、円唇性が強く、暗く重い響きを持っている。一方日本語の歯茎硬口蓋摩擦音 [ɕ] (alveolopalatal fricative) は前舌面がもり上がり、唇が円くなることはなく、比較的明るい音色を帯びる。スペイン語に [ʃ] がないが、それに対応する破擦音 [tʃ] と J. [tɕ] に違いは、舌のもり上がりの位置の差が違うようである。筆者が日本語の「チ」を発音してみると、やはり舌の盛り上がりは前舌部になっているようである。S. [tʃ] の調音における後舌面のもり上がりについては Quilis (1993: 290) の X 線映像図が参考になる。円唇化については、たとえば *chico* (男の子) [ˈtʃiko] のように /i/ の前でも起こるかどうかは多数の観察が必要である。

⁷⁷ 一般にスペイン語では閉鎖音+摩擦音という子音連続を回避する傾向があるが、その中で比較的安定しているのが、/kθ/ と /ks/ である。*fricción* (摩擦) /frik'θyon/, *examen* (試験) /ek'samen/。しかし、これらも /k-θ/、/k-s/ のように間に音節の切れ目ができる。たとえば、*etcétera* /et'θetera/ はこの型への類推からしばしば /ek'θetera/ となる。

2.5 摩擦音

2.5.1. スペイン語/f, θ, s, x/

スペイン語には次の摩擦音素がある。

/f/	[f]	唇歯無声摩擦音
/θ/	[θ]	歯間無声摩擦音
/s/	[s]	舌尖歯茎無声摩擦音
/x/	[x]	軟口蓋無声摩擦音
	[x+]	後部硬口蓋無声摩擦音
	[x- ^w]	後部軟口蓋無声摩擦音

falda (スカート) /falda/ ['falda]

cerca (近くに) /θerka/ ['θerka]

sopa (スープ) /sopa/ ['sopa]

bajo (下に) /baxo/ ['baxo]

このほかに、/u, w/の前に現れる円唇化変異音[f^w, θ^w, s^w, x^w]がある。/o/の前では弱い円唇性を持った変異音が現れる。

2.5.2. 日本語/s, z, h/

日本語には次の摩擦音素がある。

/s/	[s]	歯茎無声摩擦音
	[ʃ]	歯茎硬口蓋無声摩擦音
/z/	[z]	歯茎有声摩擦音
	[z]	歯茎硬口蓋有声摩擦音
	[dz]	歯茎有声破擦音
	[dz]	歯茎硬口蓋有声破擦音
/h/	[h]	声門無声摩擦音
	[ɦ]	声門有声化摩擦音
	[ç]	硬口蓋無声摩擦音 ⁷⁸
	[ç ^v]	硬口蓋有声化摩擦音
	[ɸ]	両唇無声摩擦音
	[ɸ ^v]	両唇有声化摩擦音 ⁷⁹

⁷⁸ ドイツ語の Ich-laut よりも摩擦が弱く、また[h(i)]と交替することがある。

[s, z, dz, h, fi, φ, φ^v]は、/e, a, o, u/の前に現れる異音である。例:「差」/sa/ [sa], 「数」/kazu/ [kazu], 「銀座」/giNza/ [gin:dza], 「返事」/heNzi/ [hep:dzi], 「古い」/huruJ/ [φuruɰi]。ただし、[φ, φ^v]は/u, w/の前にのみ現れる。「お風呂」/ohuro/ [oφ^vuro], 「ファン」/hwaN/ [φaN]。

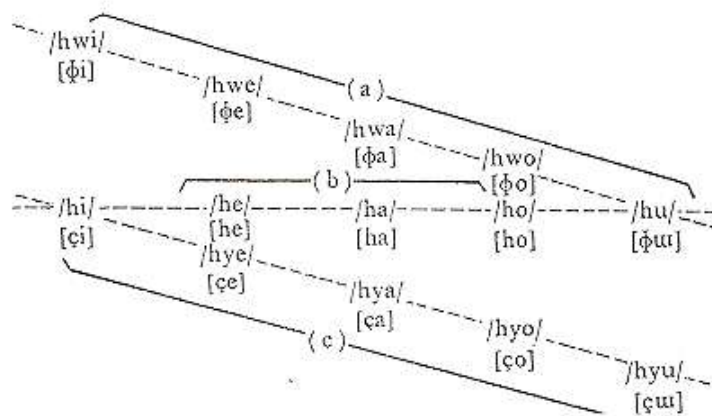
口蓋化された[f, z, dz, ç, ç^v]は、/i, y/の前に現れる異音である。例。「お菓子」/okasi/ [okaɸi], 「どじょう」/dozyoH/ [dozo:], 「勘定」/kaNzyoH/ [kaɸdzo:], 「人」/hito/ [çito], 「会費」/kaJhi/ [kaɸçi]。摩擦音の[z, z]は語中に、破擦音の[dz, dz]は語頭および/N/の後に現れる。

有声化されていない[h, ç, φ]は語頭や、丁寧な発話では語中にも現れる。有声化された[fi, ç^v, φ^v]は、ぞんざいな発話で語中に現れる。これは/N/の後では比較的少ないが、母音の後では頻繁に起こる。

2.5.3 比較

(1) S. /f/ : /x/ と J. /h/

日本語の/h/音素を含むモーラは、以下のように配列できる⁸⁰。



これらのモーラを、(a) /hwi/から/hu/ ([φ]), (b) /he/から/ho/ ([h]), (c) /hi/から/hyu/ ([ç]) の3つに分けて考察する。

(a) S. /fV, fwV, xu, xwV/ と J. /hw, hu/

半母音/w/を含む音節についての比較はすでに2.2.1.で行ったので、ここではS. /fu/, /xu/とJ. /hu/の類似を取り上げる。

S. /f/は唇歯音、S. /x/は軟口蓋音で、両者は調音点の両端にある音であるが⁸¹、それに/u/が続くとS. /fu/は/u/の後舌性のため、日本語話者にはJ. /hu/ [φu]のように聞こえ、また/xu/も/u/の円唇性のためにやはりJ. /hu/ [φu]のように聞こえる。このために、日本語話者はS. /fu/とS. /xu/を混同し、*jugo* (ジュース) ['xuɰo]を*['fuɰo]と発音する誤りをおかす。スペイン語では両

⁷⁹ スペイン語の無声化された[β]、たとえば *substitución* (代用)の-b-と比べて摩擦が弱く、また[h(u)]と交替することもある。

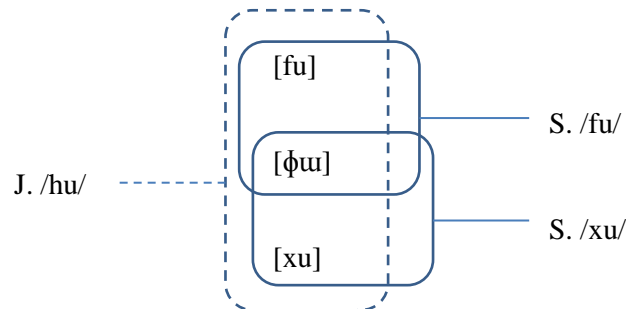
⁸⁰ cf. 上村 (1972: 296).

⁸¹ 両者は「鈍音性」 (graveness) を共有する。

者は以下のように対立する。

fusta (鞭) /'fusta/ ['fusta]
justa (試合) /'xusta/ ['xusta]

一方、スペイン語話者はJ. /hu/ [ɸu]をS. /fu/やS. /xu/と同定し、過大区別をする傾向がある。



(b) S. /x/ [x]とJ. /h/ [h]

/he/から/ho/の日本語の子音は声門摩擦音であるが、これに対応するS. /x/ [x]は軟口蓋で形成される摩擦の強い音である。日本語話者は、しばしばこれをJ. /k/に同化させて聞き誤ることがある。とくに/n. x/の/x/は/k/のように聞こえやすい。日本語話者は以下のような対に注意すべきである。

zanja (溝) /'θanja/ ['θaŋxa]
zanca (鳥の脚) /'θanka/ ['θaŋka]

(c) S. /x/とJ. /h/ ([ç])

先の図の(c)の領域の日本語子音はすべて[ç]となって実現される。これに対するスペイン語音は/xi/ [x⁺i], /xye/ [x⁺je], /xya/ [x⁺ja], /xyo/ [x⁺jo], /xyu/ [x⁺ju]であるが、両者の間には摩擦の強さと調音点に関して次のような差異がある。

J. [ç]は硬口蓋で形成される摩擦が非常に弱い音である。一方、S. [x⁺]は摩擦が非常に強く、日本人の耳にはJ/k/のように聞こえることもある。例。

ojitos (目：愛称) /o'xitos/ [o x⁺itos] > J. /okiHtos/.

調音点については、S. [x⁺]は後部硬口蓋、J[ç]は中部硬口蓋であるため、スペイン語の方がかなり後寄りである⁸²。

⁸² cf. Navarro Tomás (1918: 142. /k, g, x/は下図のように調音点が平行している。*aquí* (ここ) [a⁺k⁺i]と*ají* (トウガラシ) [a⁺x⁺i]は閉鎖音/摩擦音の差で、*seguí* (私は続いた) [se⁺ɣ⁺i]の[ɣ⁺]と*ají*の[x⁺]は、有声 + 円熟性(mellow)/無声 + 粗擦性(strident)の差で弁別されていて、調音点は同じである。

(d) J. /h/の有声化異音

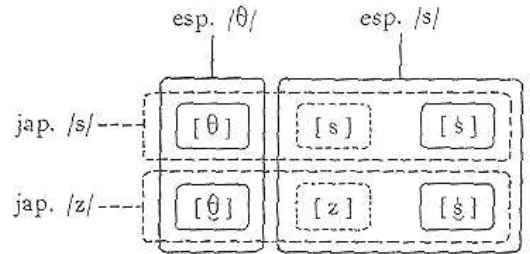
日本語のぞんざいな発話では/h/の有声化異音が現れる⁸³。

- [ɦ] 声門有声化摩擦音
- [çʷ] 硬口蓋有声化摩擦音
- [ϕʷ] 両唇有声化摩擦音

一方、S/x/, S/f/の摩擦性は強く、母音間では有声化されることはない。このため、スペイン語話者には「ご飯」/gohaN/ [gofian]が*/goan/と聞こえ、「会費制」/kaJhiseH/ [kaičʷise:]が*/kayse/と聞こえることがある。

(2) S. /θ/ : /s/と J. /s/ : /z/

スペイン語/θ/ : /s/と 日本語/s/ : /z/は、次の図に示されるような関係にある。



(a) S. /θ/ : /s/と J. /s/

上の図で示したように、日本語話者は S. [θ]も S. [ʃ]も J/s/に同定するため、以下のような最小対の弁別が困難である⁸⁴。

- caza (猟) /'kaθa/ ['kaθa]
- casa (家) /'kasa/ ['kaʃa]
- cocer (煮る) /koθer/ [ko'θer]
- coser (縫う) /ko'ser/ [ko'ʃer]

また、S. [ʃ]は舌先 (apex) と歯茎の間がせばめられ、舌面が凹型になって、少し retroflex のような音色をもつ。一方、日本語の[s]では、舌端 (blade) と歯茎の間で摩擦部が形成され、

	後部軟口蓋	軟口蓋	後部軟口蓋
/k/	[k ⁺]	[k]	[k-]
/g/	[g ⁺ , γ ⁺]	[g, γ]	[g-, γ-]
/x/	[x ⁺]	[x]	[x-]

⁸³ 丸山 (1929b: 51), 服部 (1951: 48). [çʷ](硬口蓋有声化摩擦音)と[ϕʷ](両唇有声化摩擦音)の有声化については述べられていないが、筆者はこれらも観察できると思う。

⁸⁴ 英語を知る日本語話者は E. /θ/で S. /θ/に代用するが、これは円熟性 (mellow) の音であるため、粗擦性の S. /θ/とは異なった音色になる。

舌面は大体凸型である。

日本語話者は S. [ʃ] を J. /sy/ のように解し、*coser* [ko'ʃer] を /kosyeHru/ とすることもある。とくに /__y, i/ の環境における S. [ʃ] は J. [j] と同定されやすい。これは音色の類似性だけでなく、J. /s/ が /i/ の前で口蓋化することも原因になっている。例： *casi* (ほとんど) [kaʃi] > J. [kaʃi].

(b) S. /s/ と J. /s/ : /z/

先の図で示したように、スペイン語話者は J. /s/ : /z/ の区別をせず、両者を S. /s/ に同定する傾向がある。これはスペイン語では [s] と [z] が /s/ の位置的異音をなすためである⁸⁵。よって、スペイン語話者は、日本語の次のような最小対の弁別が困難である。

「試験」 /sikeN/ [ʃiʔken]

「事件」 /zikeN/ [dziken]

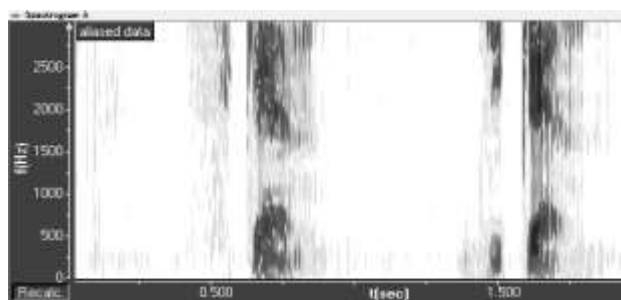
「粕」 /kasu/ [kasu]

「数」 /kazu/ [kazu]

また、スペイン語話者はとくに母音間の J. /zi/ や /zyV/ を S. /yi/ や /yV/ に同定する傾向がある。例： J. 「工場」 /koHzyoH/ [ko:zo:] > S. /koyo/ ['kojo]⁸⁶。

◆無声化のスペクトログラム

/sikeN/ の /i/ が無声化していることがわかる。



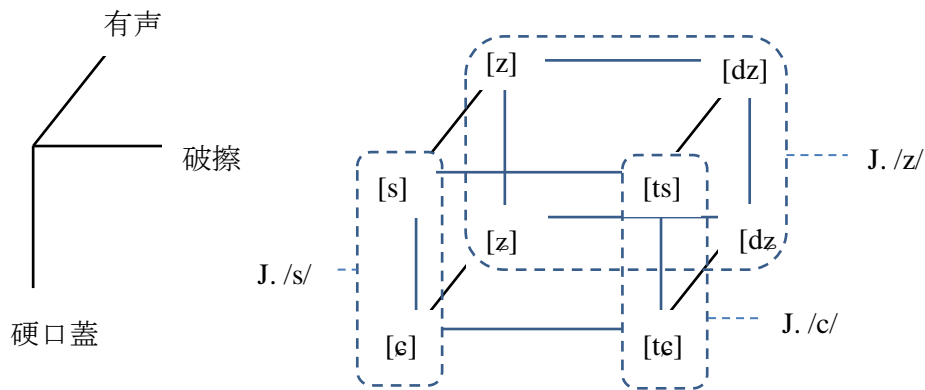
J. /sikeN/ [ʃiʔken] /zikeN/ [dziken]

(c) S. /s/ : /c/ と J. /s/ : /z/ : /c/

日本語の /s/ には [s, ɕ], /z/ には [z, z̥, dz, dz̥], /c/ には [ts, tɕ] の異音があり、これらは次の図に示される音声場を形成する。

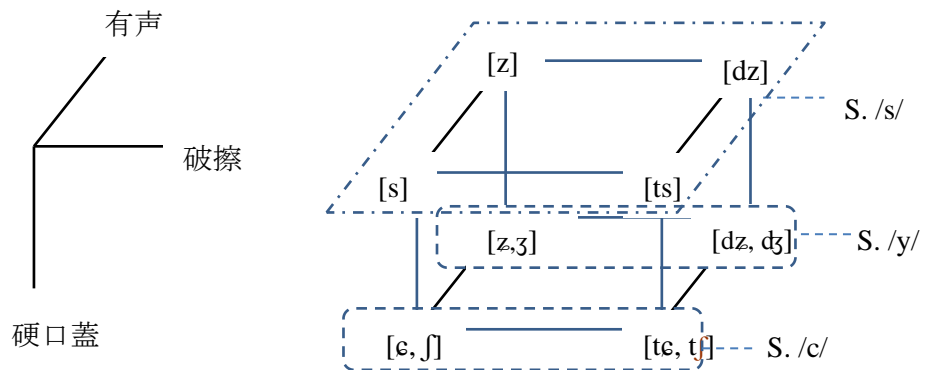
⁸⁵ [z] は音節末で有声子音の前に現れる。例： *mismo* (同じ) /'mismo/ ['mizmo].

⁸⁶ cf. 2. 2. 1 (3)



これらの異音のなかで、スペイン語話者はJ. [ɕ]を S. /c/に同定することがある。例:「歯科」/sika/ [eika] > S. /cika/ [tʃika]. これは、スペイン語に[ɕ]や[ʃ]がないこと、そしてJ. [z], [dʒ]を S. /y/に同定する現象と平行していることなどが原因であると思われる。

以上、スペイン語話者による日本語の歯擦音とその破擦音の扱い方をまとめると次の図のようになる。先の図と比べると、日本語の構造化と著しくかけ異なることがわかる。



2.6. 鼻音

2.6.1. スペイン語/n, n̄, ñ/

スペイン語には次の鼻音素がある。

- /m/ [m]両唇有声鼻子音
- /n/ [n]歯茎有声鼻子音
- /ñ/ [ɲ]硬口蓋有声鼻子音

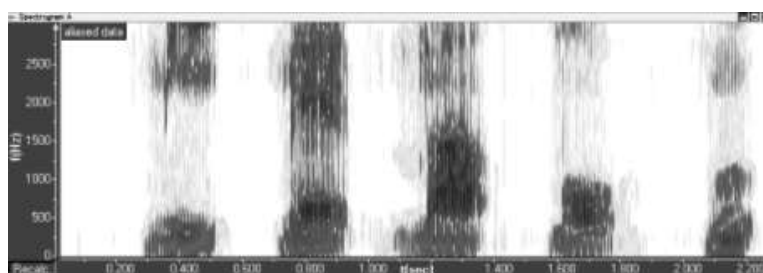
mano (手) /'mano/ ['mano]

pena (罰) /'pena/ ['pena]

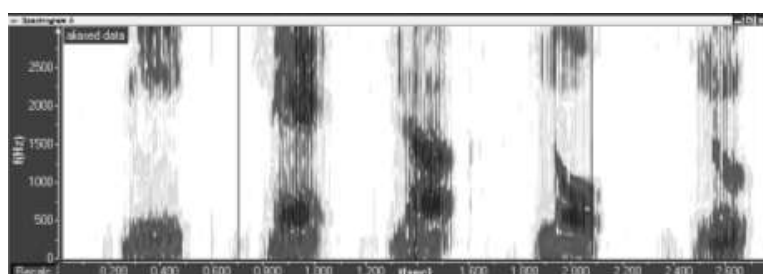
niño (子供) /'niño/ ['niɲo]

この他に、/u, w/の前に現れる円唇化変異音[m^w, n^w, ɲ^w]がある。/o/の前では弱い円唇性を持った変異音が現れる。

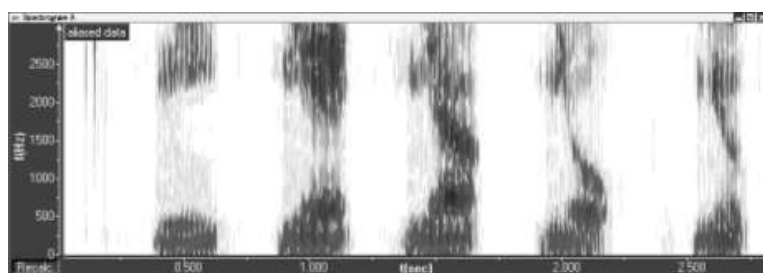
◆鼻音+母音のスペクトログラフ



/mi, me, ma, mo, mu/



/ni, ne, na, no, nu/



/ñi, ñe, ña, ño, ñu/

2.6.2. 日本語/m, n/

日本語には次の摩擦音素がある。

/m/	[m]	両唇有声鼻子音
	[mʲ]	両唇有声口蓋化鼻子音
/n/	[n]	歯茎有声鼻子音
	[ɲ]	硬口蓋有声鼻子音

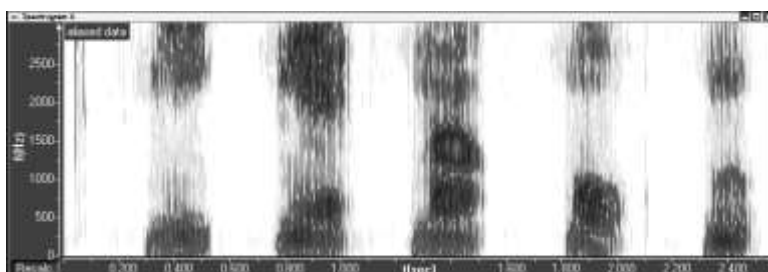
「豆」 /mame/ [mame]

「耳」 /mimi/ [mʲimi]

「布」 /nuno/ [nuno]

「日本」 /jihon/ [jihon]

◆/ŋ/+ 母音のスペクトログラフ



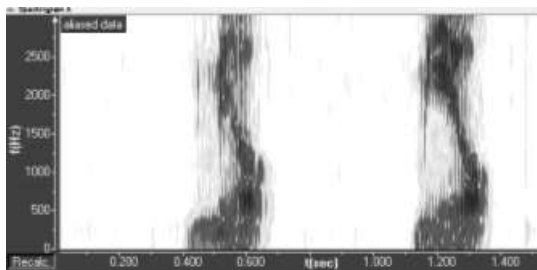
/ŋi, /ŋe, /ŋa, /ŋo, /ŋu/

2.6.3 比較

(1) S. /m/と J. /m/

日本語の口蓋化異音[mʲ]が、スペイン語話者には S. /my/と解釈される。例:「明日」/myoHnici/ [mʲo:ɲitsei] > S. /myonici/ [mɲonitʃi]。これは日本語話者の耳には「ミオニチ」/mionici/と聞こえる。

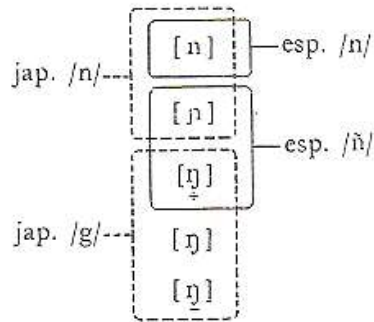
◆J. /myo/と J. /mio/のスペクトログラフ



J. /myo/ J. /mio/

(2) S. /n/, /ɲ/と J. /n/, /g/

S. /n/ [n], /ɲ/ [ɲ], J. n/ [n], [ɲ]および J. /g/の諸異音[nʲ], [ŋ], [ŋʲ]をその調音点の順序に従って並べると以下のようなになる。



この図より以下の2つの問題点が指摘できる。

(a) S. /n/ : /ɲ/ と J. /n/

J. /n/の各異音がスペイン語の/n/の範囲と/ɲ/の範囲に重なっている。S. /ɲ/が/e, a, o, u, w/の前にあるときは、日本語ではJ. /ny/と解釈される音に対応するが、S. /ɲ/が/i/の前にあると、J. /ni/と解される。よって、S. /ni/ [ni]とS. /ɲi/の弁別が困難になる。日本語話者には次のような対の弁別がほとんど不可能である。

teñido (染めて) /te'ɲido/ [te'ɲido] : *tenido* (持って) /te'nido/ [te'nido]

ceñí (私は巻きつけた) /θe'ɲi/ [θe'ɲi] : *cenit* (天頂) /θe'nit/ [θe'nit]

(b) S. /ɲ/ と J. /n/ : /g/

日本語の/g/には、その語中における異音として[ŋ]があり、これは後続の母音により、調音位置が広範囲にわたる。/i/が後続するときは硬口蓋音となり、S. /ɲ/の調音位置に近づくため、/ŋ/がないスペイン語ではJ. [ŋ⁺]はS. /ɲ/に牽引される。このためスペイン語話者はJ. /ni/ [ni]とJ. /gi/ [ŋ⁺i]の弁別が困難であり、たとえば以下のような対を識別することがむずかしい。

「鍵」 /kagi/ [kaŋ⁺i] : 「カニ」 /kani/ [kani]

「木々」 /kigi/ [kiŋ⁺i] : 「木に」 /kini/ [kiji]

2. 7 流音

2. 7. 1. スペイン語の/l, λ, r, r/

スペイン語には次の流音素がある。

/l/	[l]	歯茎有声側面音
/λ/	[λ]	硬口蓋有声側面音 ⁸⁷
/r/	[r]	歯茎有声弾音
/r̄/	[r̄]	歯茎有声顫動音

lana (羊毛) /'lana/ ['lana]

pero (しかし) /pero/ [pero]

perro (犬) /'perro/ ['perro]

calle (通り) /'kaʎe/ ['kaʎe]

この他に/u, w/の前に現れる円唇化変異音[l^w, λ^w, r^w, r̄^w]がある。/o/の前では弱い円唇性を持った変異音が現れる。

2. 7. 2. 日本語の/r/

日本語には流音音素は/r/のみであるが、その異音は次のように様々である。

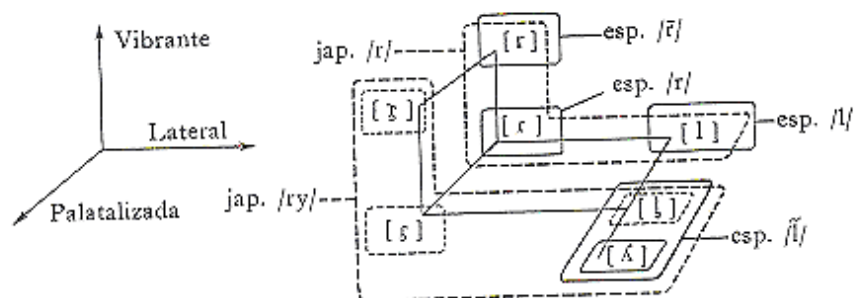
/r/	[l]	歯茎有声側面音
	[r]	歯茎有声弾音
	[ɹ]	有声歯茎接近音

例：「体」 /karada/ [kalada] ~ [karada] ~ [kaɹada]

これらの音は/i/と/y/の前で口蓋化する ([l̄], [r̄], [ɹ̄])。まれに J. /r/を顫動音で発音する人がいる。

2. 7. 3. 比較

両言語の諸異音を同じ音声場に並べて、相互の牽引の様子を示すと次の図のようになる。



⁸⁷ 現代スペイン語の多くの話者は/λ/の音素を持たず、それを/ɣ/に代替させている。

(1) S. /l/ : /k/ と J. /r/ : /ry/

スペイン語には /l/ : /k/ の対立があり、それぞれ J. /r/ と /ry/ に対応する。音声的には S. /k/ [k] は完全な硬口蓋音であるのに対し、J. /ry/ [r̄] は口蓋化音であって、完全な硬口蓋音ではない。S. /k/ では舌先が下の門歯にあてられ、舌面が硬口蓋に広範囲に接触しているのに対し、J. /ry/ では舌先は上の歯茎にあって、舌面は硬口蓋に近づくが S. [k] ほどには接触しない。

「旅行」 /ryokoH/ [r̄'oko:]

このように J. /ry/ [r̄] が S. [l] と S[k] の中間的な音であるために、日本語話者にとって S. /k/ : /ly/ の弁別が難しく、とくに /ki/ : /li/ のような場合が困難である。

Alí (アリ、人名) /a'li/ [a'li] : allí (あそこで) /a'ki/ [a'ki]

(2) S. /l/ : /r/ : /r̄/ と J. /r/

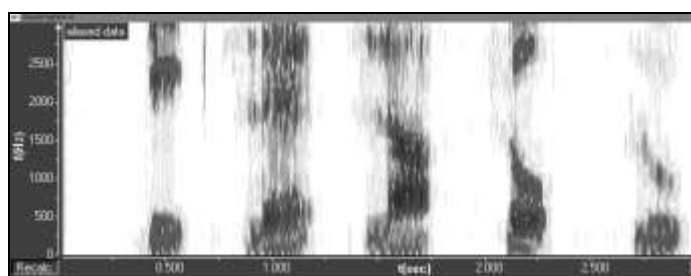
スペイン語では /l/, /r/, /r̄/ の違いによって以下のような最小対が形成される。

pelo (髪) /'pelo/ ['pelo] : pero (しかし) /'pero/ ['pero] : perro (犬) /'perro/ ['perro]

スペイン語の [l], [r], [r̄] は J. /r/ の異音であるため、日本語話者はこれらの識別が困難である。とくに /l/ : /r/ の区別は初歩の学習者を悩ます。/r̄/ は /r/ に比べて調音時間が長いので識別は容易だが、顫動音の習慣がない人には調音の訓練が必要である⁸⁸。

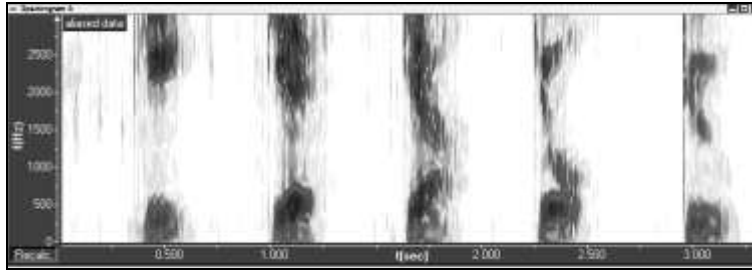
一方、スペイン語話者にとって J. /r/ の各異音はスペイン語の /l/ と /r/ のどちらにも聞こえ、過剰区別を起こす可能性がある。

◆ 流音のスペクトログラフ



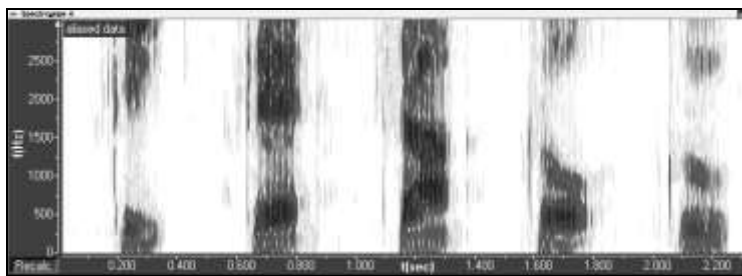
S. /li, le, la, lo, lu/

⁸⁸ Navarro Tomás (1918, 1972, p. 205) によれば cigarro (葉巻) の [r] は 13.6 c. s. disparo (発射) の [r] は 2.5 c. s. である。しかし音素的には fortis / lenis の対立であって、長 / 短の対立ではない。cf. Alarcos Llorach (1959), Allen (1964), Pottier (1972). たとえば Stockwell, Bowen and Silva-Fuenzalida (1956, 1965) のように、[r] を cluster と解釈するのは、スペイン語話者に例外的な重子音を認めることになるので、音素配列から見て困難である。また、/r/ [r] を繰り返して、たとえば perro を [perro] と発音しても、[perro] の正確な発音にならないので、教育的にも有害な表記である。

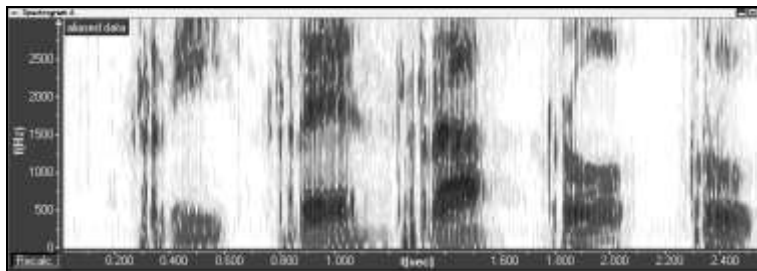


S. /ki, ke, ka, ko, ku/

2つの図は全体的に似ているが、/k/から母音に移行するとき/i/のフォルマントに近い位置から始まるのが違う。一方、/li/と/ki/の形状がよく似ていることにも注意したい。両者が聴覚的にも識別が困難になるのはこの音響的な類似と関連する。

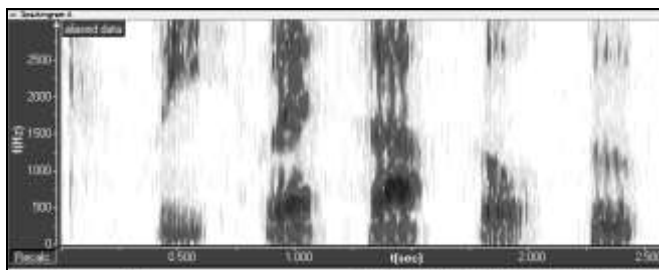


S. /ri, re, ra, ro, ru/



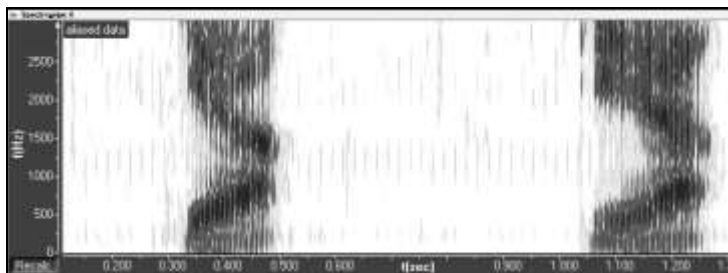
S. /ri, re, ra, ro, ru/

/r/の時間を正確に計ると、2~3 c. s. でスペクトログラムのなかつた時代の Navarro Tomás の観察とほぼ一致す(前ページの注)。/r/はおよそ/r/の 10 倍の調音時間となる。ふるえる回数は3~6回がふつうである。



J. [i, ie, ia, io, iu]

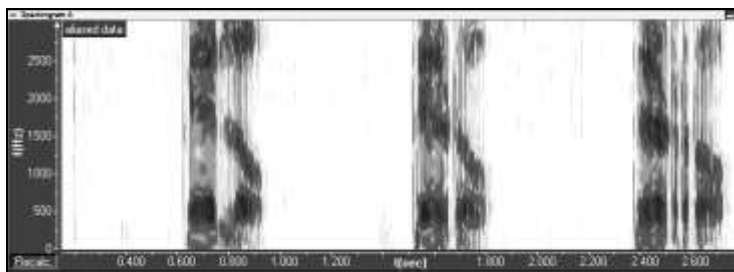
[ɹ]は全体的に母音に近い様子を示している。



S. /ka/

J. /ya/

S. /ka/は子音から母音に直接つながっているが、J. /ya/では[Fia]のように[i]が短いながら保持されている。



S. /pelo/

/pero/

/pero/

S. /l/と/r/にくらべて S. /r/が短いことがわかる。/l/ではボイスバーが続いているが、/r/と/r/ではそれが中断している。

2.8. 音節末子音

両言語どもに開音節型の言語であるため、音節末の子音の分布は限られている。

2.8.1. スペイン語の音節末子音

スペイン語の子音音素のうち、音節末に現れるものは/p~b, t~d, k~g, f, θ, s, x, n, l, r, r/である。

(1) S. /p~b/, /t~d/, /k~g/

スペイン語の閉鎖子音音素/p, b, t, d, k, g/は音節末では、次の子音（無声子音/C⁰/：有声子音/C^v/）に従って以下のような変異音となる。

環境	例語	丁寧体	普通体
/p. C ⁰ /	<i>cápsula</i> (カプセル)	[p]	[ϕ]
/p. C ^v /	該当語なし		
/b. C ⁰ /	<i>objeto</i> (目標)	[β]	[ϕ]
/b. C ^v /	<i>submarino</i> (潜水艦)	[β]	
/t. C ^v /	<i>etcétera</i> (その他)	[t]	[θ]
/t. C ^v /	<i>étnico</i> (民族の)	[t]	[d]
/d. C ⁰ /	<i>adquirir</i> (得る)	[d]	[θ]
/d. C ^v /	<i>admirar</i> (賞嘆する)	[d]	
/k. C ⁰ /	<i>actor</i> (俳優)	[k]	[x]
/k. C ^v /	<i>técnico</i> (技術者)	[k]	[ɣ]
/g. C ⁰ /	<i>zigzag</i> (ジグザグ)	[ɣ]	[x]
/g. C ^v /	<i>signo</i> (印)	[ɣ]	

このように、丁寧な発話では/p/ : /b/, /t/ : /d/, /k/ : /g/の対立が保たれるが、普通の発話になると対立が失われる。以下では、それぞれ最初が丁寧な発話であり、次が普通体の発話である。

cápsula (カプセル) /'kapsula/ ['kapsula] ~ ['kaϕsula]

objeto (目標) /ob'xeto/ [oβ'xeto] ~ [oϕ'xeto]

etcétera (その他) /et'θetera/ [et'θetera] ~ [eθ'θetera]

adquirir (得る) /adki'rir/ [adki'rir] ~ [aθki'rir]

actor (俳優) /ak'tor/ [ak'tor] ~ [ax'tor]

zigzag (ジグザグ) /θig'θag/ [θiy'θay] ~ [θix'θay]

(2) S. /f, θ, s, x/

S. /f, θ, s, x/は音節末で以下のような変異音を示す。これらは無声音であるが、普通体の発話で有声子音の前で有声化する。

biftek (ビーフステーキ) /bif'tek/ [bif'tek]

afgano (アフガニスタン人) /af'gano/ [af'yano] ~ [af'θy'ano]

gazpacho (ガスパーチョ・スープ) /gaθ'paco/ [gaθ'patʃo]
gozne (ちょうつがい) /'goθne/ ['goθne]~['goθ^one]
pescar (釣る) /pes'kar/ [pes'kar]
mismo (同じ) /'mismo/ ['mismo]~['mis^omo]
reloj pequeño (小さな時計) /re'lox pe'keño/ [re'lox pe'keño]
reloj grande (大きな時計) /re'lox 'grande/ [re'lox 'grande]~[re'lox^o 'grande]

なお、/f/と/x/が音節末に現れる頻度は極めて少ない。

[θ] (/θ/) を[d] (/d/) から弁別する特徴は粗擦性 (stridency) である⁸⁹。さらに、S. /f, θ, s, x/ の有声化異音が/b, d, g/の摩擦異音から弁別されるのも粗擦性によるものと考えられる。

(3) S. /n/

音節末の S. /n/は音節境界を隔てて後続する子音の調音点に逆行同化し、以下のような異音となる。

/n/		
[m̃]	両唇・有声・無開放・鼻音	____-/p, b/
[m̃]	唇歯・有声・無開放・鼻音	____-/f/
[ñ]	歯間・有声・無開放・鼻音	____-/θ/
[ñ]	歯・有声・無開放・鼻音	____-/t, d/
[ñ]	歯茎・有声・無開放・鼻音	____-/s, l, r, #/
[ñ]	前部硬口蓋・有声・無開放・鼻音	____-/c, ɲ, ʎ/
[ñ ⁺]	後部硬口蓋・有声・無開放・鼻音	____-/ki, ke, gi, ge, xi, xe/
[ñ]	軟口蓋・有声・無開放・鼻音	____-/ka, ga, xa/
[ñ-]	後部軟口蓋・有声・無開放・鼻音	____-/ko, ku, go, gu, xo, xu, w/

例：

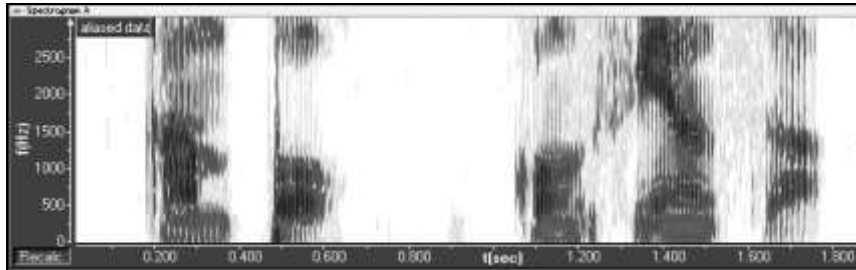
campo (野) /'kanpo/ ['kaṃpo]
confianza (信頼) /kon'fyanθa/ [koṃ⁺'fianθa]
once (11) /'onθe/ ['oṃ.θe]
dónde (どこに) /'donde/ ['doṃde]
cansado (疲れた) /kan'sado/ [kaṃ'sado]
concha (貝) /'konca/ ['koṃtʃa]
conquista (征服) /kon'kista/ [koṃ⁺'kista]
manga (袖) /'manga/ ['maṃga]
ronco (声がしわがれた) /'ronko/ ['roṃ-ko]

このように音節末の/n/の弁別の特徴は鼻音性だけであり、調音位置は非関与的である。鼻

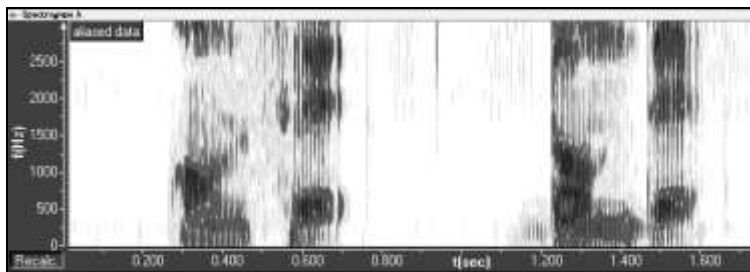
⁸⁹ cf. 原 (1975).

腔への開放があればよいのであって、それが口腔のどの位置で調音されていても弁別には関わりがない。

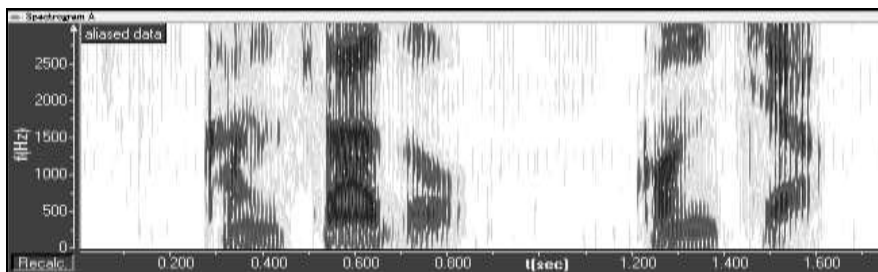
◆S. /n/の異音のスペクトログラフ



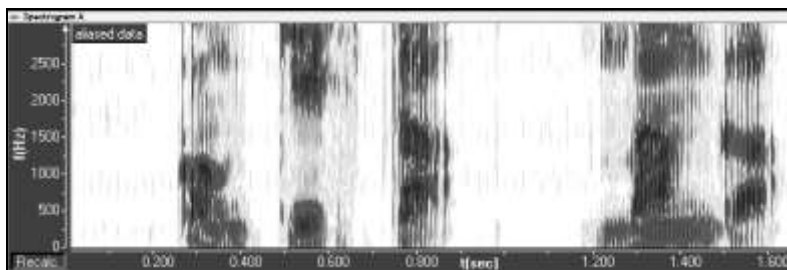
campo/'kanpo/ ['kaṃpo], *confianza*/kon'fyanθa/ [koṃ'fjanθa]



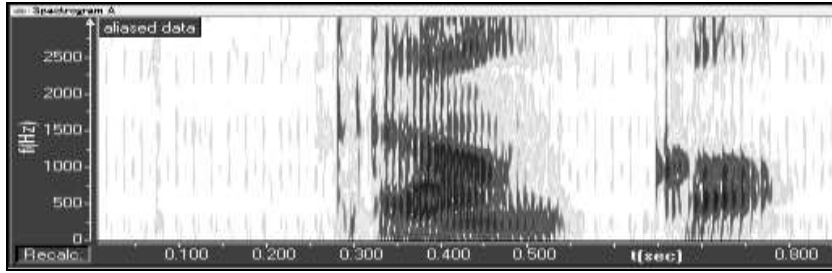
once/'onθe/ ['oṃ.θe], *dónde*/'donde/ ['doṃde]



cansado/kan'sado/ [kaṃ'sado], *concha*/'konca/ ['koṃtʃa]



conquista/kon'kista/ [koṃ⁺kista], *manga*/'manga/ ['maṅga]



ronco /'ronko/ ['roŋ̃-ko]

(4) S. /l/

音節末の S. /l/は音節境界を隔てて後続する子音の調音点に逆行同化し、以下のような異音となる。

/l/		
[l]	歯間・有声・無開放・側面音	_____ -/θ/
[l̥]	歯・有声・無開放・側面音	_____ -/t, d/
[l̪]	歯茎・有声・無開放・側面音	_____ -/p, b, m, f, s, n, r, k, g, x, #/
[ɫ]	前部硬口蓋・有声・無開放・側面音	_____ -/c, ɲ, y/

例：

alzar (上げる) /al'θar/ [al̪̥'θar]

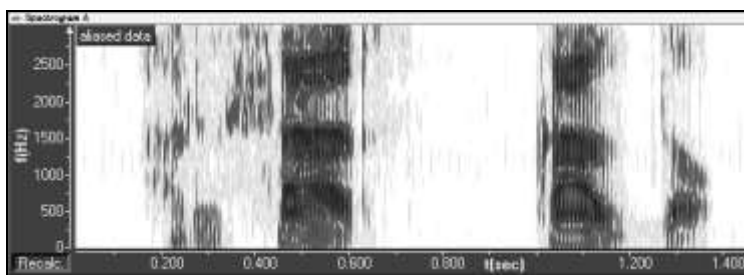
caldo (肉汁) /'kaldo/ ['kal̪̥do]

pulpo (タコ) /'pulpo/ ['pul̪̥po]

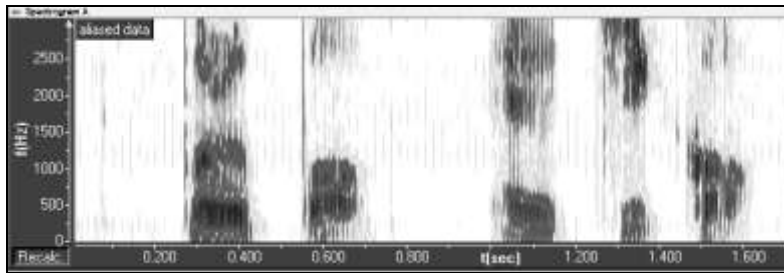
el chico (その子) /el'çiko/ [el̪̥'tʃiko]

このように音節末の/l/の弁別の特徴は側面性だけであり、調音位置は非関与的である。气流が側面から通ればよいのであって、舌先がどこについていようと弁別には関わりがない。ただし、/m/とは異なって、その位置は歯・歯茎・硬口蓋に限られる。

◆S. /l/の異音のスペクトログラフ



alzar /al'θar/ [al̪̥'θar], *caldo* /'kaldo/ ['kal̪̥do]



pulpo/'pulpo/ ['pul̞ˈpo], *el chico*/el'çiko/ [eɫ̞ˈtʃiko].

(5) S. /r/

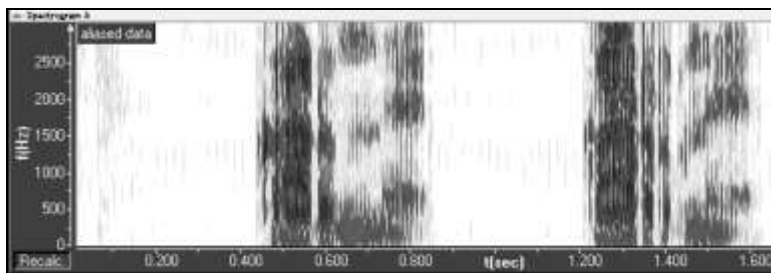
音節末で、[r]と[r̞]が聞かれる。これは方言差、個人差、そしてスタイルの差による。

例：

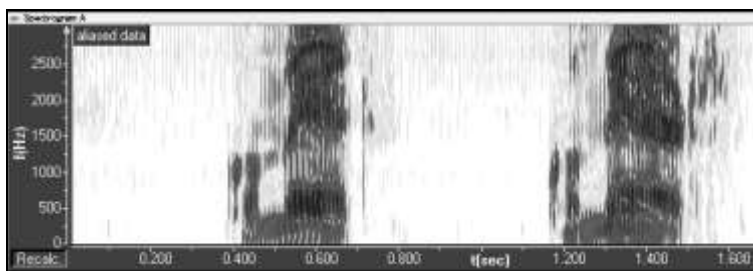
carne (食べる) /'karne/ ['karne] ~ ['karne]

comer (食べる) /ko'mer/ [ko'mer] ~ [ko'mer]

◆S. /r/の異音のスペクトログラフ



S. *carne* /'karne/ ['karne] ~ ['karne]



S. *comer* /ko'mer/ [ko'mer] ~ [ko'mer]

2.8.2. 日本語の音節末子音

日本語では、2 モーラの音節で音節末の位置に現れる音素に/H, J, Q, N/があり、これらのうち音声的に子音 (contoid) のものは/Q/と、/N/の一部の異音である。

(1) J./Q/

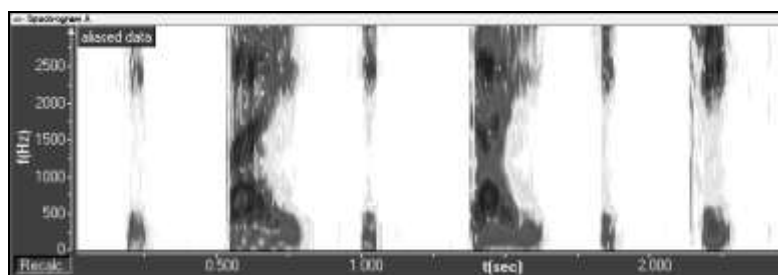
「促音」と呼ばれるモーラ音素/Q/は以下の異音をもつ

J. /Q/		
[p]	両唇・無声・閉鎖音	___ -/p/
[t]	歯茎・無声・閉鎖音	___ -/t, ce, ca, co, cu/
[t]	歯茎硬口蓋・無声・閉鎖音	___ -/ci, cy/
[k+]	後部硬口蓋・無声・閉鎖音	___ -/ki, ke/
[k]	軟口蓋・無声・閉鎖音	___ -/ka, ku/
[k-]	後部軟口蓋・無声・閉鎖音	___ -/ko/
[s]	歯茎・無声・摩擦音	___ -/se, sa, so, su/
[ʃ]	歯茎硬口蓋・無声・閉鎖音	___ -/si, sy/
[h]	声門・無声・閉鎖音	___ -/ha, he, ho/
[ç]	硬口蓋・無声・閉鎖音	___ -/hi/
[ʔ]	声門閉鎖音	___ -/#/

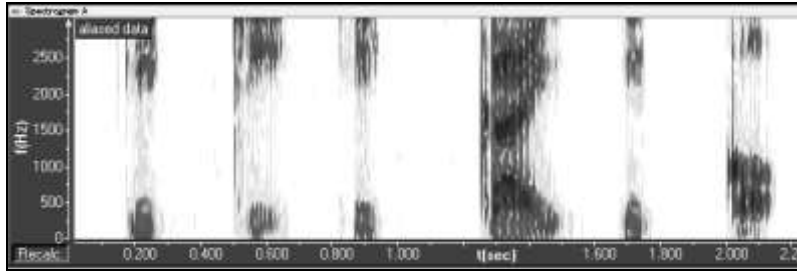
例：

- 「一杯」 /iQpaJ/ [ippai]
- 「一体」 /iQtaJ/ [ittai]
- 「一致」 /iQci/ [it̚tei]
- 「一機」 /iQki/ [ik̚ki]
- 「一回」 /iQkaJ/ [ikkai]
- 「一個」 /iQko/ [ik̚ko]
- 「一心」 /iQsin/ [iʃ̚iN]
- 「一席」 /iQseki/ [isseki]
- 「バツハ」 /baQha/ [bahha]
- 「あっ」 /aQ/ [aʔ]

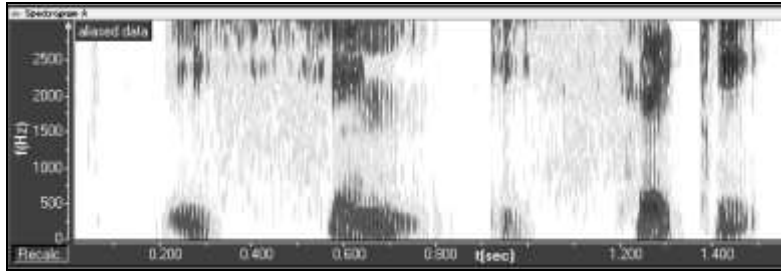
◆J. /Q/の異音のスペクトログラフ



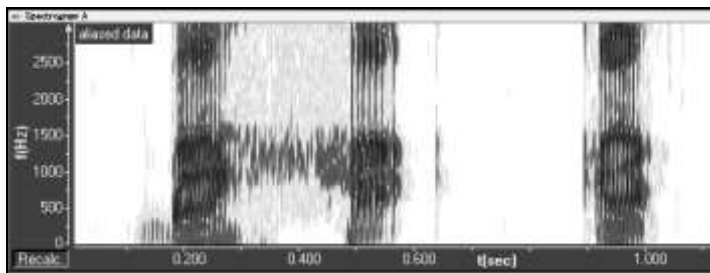
J. iQpaJ/ [ippai] /iQtaJ/ [ittai] /iQci/ [it̚tei]



J. /iQki/ [ik+ki] /iQkaJ/ [ikkai] /iQko/ [ik-ko]



J. /iQsin/ [iʃʃiN] /iQseki/ [isseki]



J. /baQha/ [bahha] /aQ/ [a?]

(2) J. /N/

「撥音」と呼ばれるモーラ音素/N/には以下の異音がある⁹⁰。

J. /N/		
[m]	両唇・有声・鼻子音	___/p,b, m/
[n]	歯茎・有声・鼻子音	___/t, d, z, n, r/
[ɲ]	硬口蓋・有声・鼻子音	___/ci, cy, zi, zy, ni, ny/
[ŋ+]	後部硬口蓋・有声・鼻子音	___/ki, ky, ke, gi, gy, ge/
[ŋ]	軟口蓋・有声・鼻子音	___/ku, ka, gu, ga/
[ŋ-]	後部軟口蓋・有声・鼻子音	___/ko, go/
[ĩ]	高・中舌・有声・鼻母音	___/s/
[ī]	高・前舌・有声・鼻母音	___/i, y, hi/
[ũ]	高・中舌・有声・鼻母音	___/u, hu, w, hw, ho, o/
[ẽ]	中高・前舌・有声・鼻母音	___/e, he/

⁹⁰ cf. 竹林 (1976: 58). 表記上の違いはあるが本質的に変わらない。

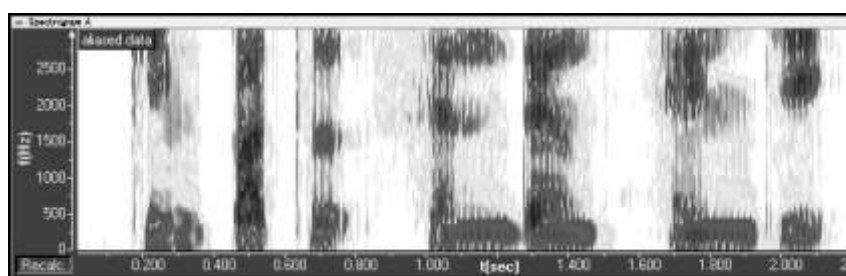
[ẽ]	中高・中舌・有声・鼻母音	___/a, ha/
[N]	口蓋垂・有声・鼻子音	___#

例：

- 「金髪」 /kiNpacu/ [kimpatsu]
- 「宣伝」 /seNdeN/ [sendeN]
- 「返事」 /heNzi/ [hepdzi]
- 「天気」 /teNki/ [teŋ⁺k⁺i]
- 「文具」 /buNgu/ [buŋgu]
- 「銀行」 /giNkoH/ [giŋ-ko:]
- 「検査」 /keNsa/ [kei~sa]
- 「品位」 /hiNi/ [çii~i]
- 「暗雲」 /aNuN/ [auuu~N]
- 「千円」 /seNeN/ [see~eN]
- 「弾圧」 /daNacu/ [daə~atsu]
- 「うどん」 /udoN/ [udon]

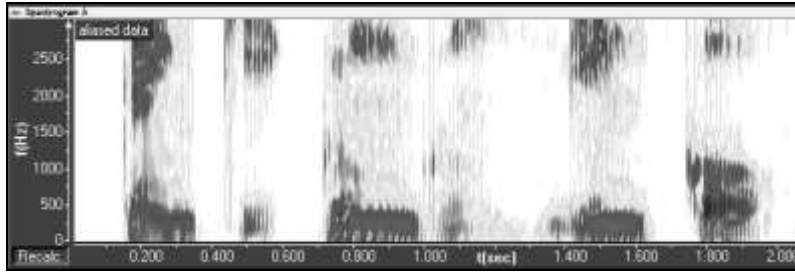
[N]は後舌部が口蓋垂に接触せずに、母音化することもある⁹¹。この場合、前の母音の調音点が進行同化することによって、/N/の鼻母音の音色を変えるようである。また、2つが融合して長めの鼻母音になることもある。このときはフランス語の don [dɔ̃]のように、母音部の全体が鼻音化するのではなく、少し遅れ気味に鼻母音化が始まる。

◆J. /N/の異音のスペクトログラフ

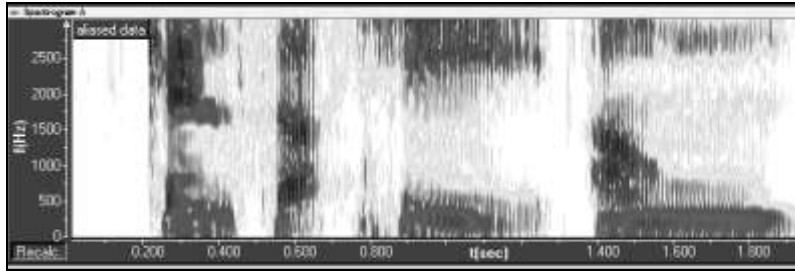


(a) /kiNpacu/ [kimpatsu], /seNdeN/ [sendeN], /heNzi/ [hepdzi]

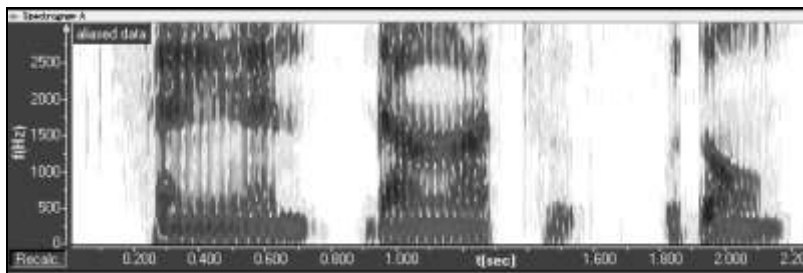
⁹¹ Takebayashi (1976: 31): "(...) the oral closure is often very loose. "



(b) /teNki/ [teŋ˥k˥i], /guNguN/ [guŋguN], /giNkoH/ [giŋ-ko˥]



(c) /keNsa/ [kei˥sa], /hiNi/ [çii˥i], /aNuN/ [au˥uN]



(d) /seNeN/ [see˥eN], /daNacu/ [daə˥atsɯ], /udoN/ [udon]

2.8.3. 比較

(1) S. /p~b, t~d, k~g/ : J. /Q/, /Cu, Co/

音節末の閉鎖子音音素には、スペイン語に/p~b, t~d, k~g/があり、日本語に/Q/がある。スペイン語の場合は、ふつう後続する子音と異なる音素であるが⁹²、日本語の/Q/の場合は、調音点、調音様式、そして無声性が後続子音と同じになる。

日本語の音節が基本的に/CV/型になるため、日本語話者の S. /C₁-C₂/は >J. /C₁u-C₂/のように聞こえる。ただし、S. /C₁/が/t, d/の場合は、>J. /C₁o-C₂/となる。

cápsula /'kapsula/ > J. /kapsura/

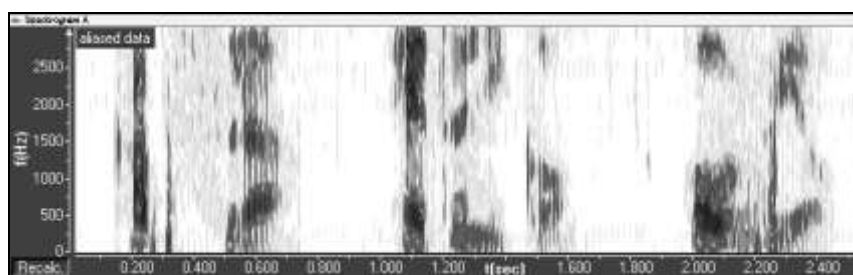
étnico /'etniko/ > J. /etoniko/

スペイン語の音節末子音は摩擦音化する傾向があるため、日本人の耳には/Q/と感じられず、たとえば S. [kaɸsula] > *J. /kaQsura/ というような干渉は聞かれない。しかし、稀に存在するスペイン語の重子音が丁寧な発話で発音されると、日本語話者には/Q/を聞き取りやすい。

⁹² 例外については 3.2.3. で扱う。

obvio (明らかな) /'obbyo/ [oββio] > J. /oQbio/

◆S. 音節末の/p, t, b/のスペクトログラフ



S. /'kapsula

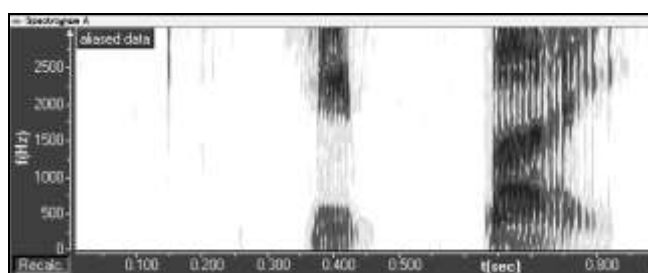
/etniko/

/'obbyo/

一方、スペイン語話者は一般に日本語の重子音/Q-C/を習得することが困難で、モーラ音素/Q/を十分持続させないため、日本語のリズム (後述 4.2.14) を損なう。

「一杯」 /iQpai/ [ippai] > S. /ipay/ [ipai]

◆/Q/のスペクトログラフ



J. /'iQpai/

(2) S. /f, θ, s, x/ : J. /Cu, Co/

音節末のスペイン語摩擦音/s, θ, s, x/は日本語話者の耳にはそれぞれ J. /hu, su, su, ho/に聞こえる。

S. *afgano* /af'gano/ [af'γano] > J. /ahugano/

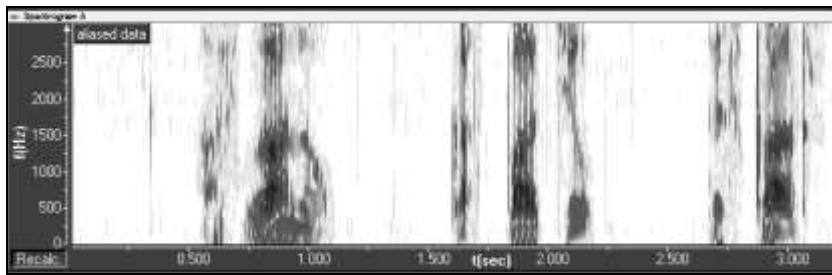
S. *gazpacho* /gaθ'paco/ [gaθ'patʃo] > J. /gasupaHcyo/

S. *pesca* /pes'kar/ [pes'kar] > J. /pesukaHru/

S. /f/ > J. /hu/は、J/h(u) / [ϕ]の調音点が S. [f]に類似しているためである。S. /θ, s/には日本語のニュートラルな母音/u/が付加されて、J. /su/となる。S. /x/ > J. /jo/は後舌軟口蓋摩擦音であるため、その後寄りの調音を J. /o/で代用させるためであると思われる。

J. /su/の母音は無声化する可能性があるため、たとえば *pesca* (漁) ['peska] > J. ['peska]となってポジティブな転移をする。しかし、スペイン語の音節末の[θ], [s]は弱く比較的短いので、日本語の強く長めの[s]とは異なる。

◆S. 音節末の/f, θ, s/のスペクトログラフ



S. /af'gano/ /gaθ'paco/ /pes'kar/

(3) S. /n/ : J. /N/

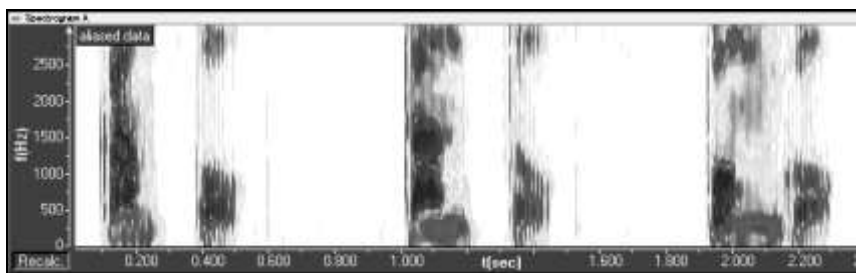
音節末の S. /n./ と J. /N/ は音長と音色に関して比較される。J. /N/ はモーラ音素であるため J. /CV/ とほぼ等しい音長で発音される。一方、スペイン語では /CVn/ が 1 音節となり、この音節が等時的リズムの単位となるため (後述 4. 2.)、音節末の /n/ は J. /N/ と比べて短い。

次に音色については、S. /n./ が子音性を比較的よく保つのに対して、J/N/ の異音には音声的に母音のことが多い。

S. /n. C/ の /C/ が /p, b, t, d, l, r, c, ʎ, y, k, g/ の場合は、日本語でも調音点が逆行同化するために問題は起こらない。

- S. *campo* (野) /'kampo/ [kampo] > J. /kaNpo/ [kampo]
- S. *tanto* (そんなに) /'tanto/ ['tanto] > J. /taNto/ [tanto]
- S. *pongo* (私は置く) /'pongo/ ['pongo] > J. /poNgo/ [pongo]

◆S. 音節末の/n/のスペクトログラフ

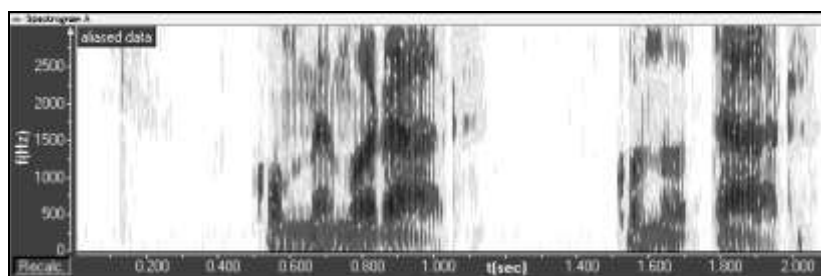


S. /'kampo/ /'tanto/ /'pongo/

後続する /C/ が /m, n/ の場合は、/n/ がそれと融合し、丁寧な発音では、それぞれ幾分長めの [m:, n:] となる。普通の話し方では、完全に融合して単一の鼻子音と同じ長さになる。

- conmemorar* (記念する) /konmemo'rar/ [kom:emo'rar] ~ [komemo'rar]
- connotar* (暗示する) /konno'tar/ [kon:o'tar] ~ [kono'tar]

◆S. /nm, nn/のスペクトログラフ



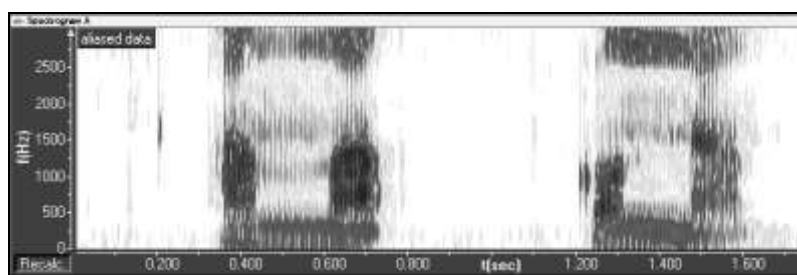
S. /konmemo'rar/ /konno'tar/

一方、日本語 J. /N/では後続の鼻子音と融合することはない。

「按摩」 /aNma/ [am:.ma]

「困難」 /koNnan/ [kon:.naN]

◆J. /Nm, Nn/のスペクトログラフ



J. /aNma/ /koNnan/

このために、日本語話者は S. *conmemorar* を /koNmemoraHru/ [kom:memora:ru] とし、逆にスペイン語話者は「困難」を /konan/ ['konan] とする傾向がある。

S. /C/が、/f, θ, s, x/の場合には、それぞれの調音点が逆行同化した鼻子音となる。

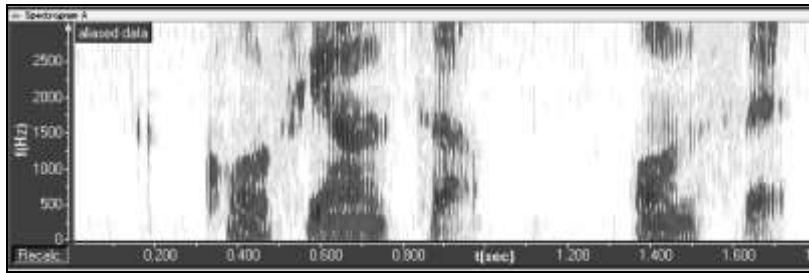
confianza /kon'fyanθa/ [komfjanθa]

once /'onθe/ ['onθe]

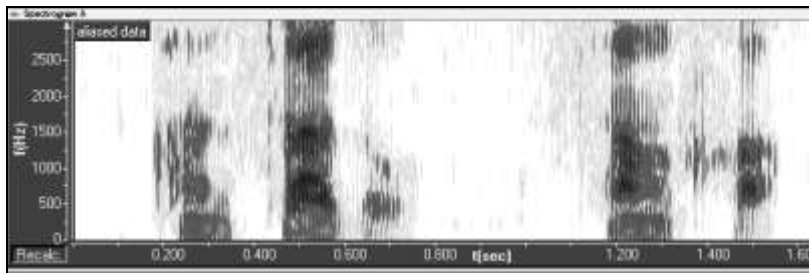
cansado /kan'sado/ [kan'sado]

zanja /'θanxa/ ['θaŋxa]

◆S. /nf, ns/のスペクトログラフ



S. /kon'fyanθa/ /'onθe/



S. /kan'sado/ /'θanxa/

一方、S. /f, θ, s, x/に対する日本語の摩擦音は[ɸ(w), s(w), s(w), h(o)]であり、これらに先行する/N/の異音は、それぞれ[w̃, ĩ, ĩ, ũ]という鼻母音である。このため、日本語話者の話すスペイン語には次のような干渉がある。

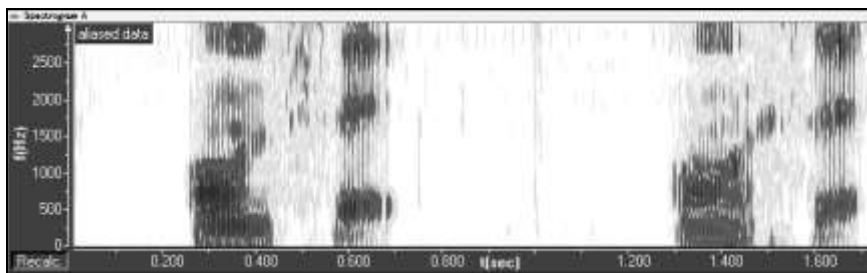
confianza /konfjanθa/ [komfj̃anθa] > J. /koNhwiansa/ [koũɸiaĩsa]

once /'onθe/ ['onθe] > J. /oNse/ [oĩse]

cansado /kan'sado/ [kan'sado] > J. /kaNsaHdo/ [kaĩsa:do]

zanja /'θanxa/ ['θanxa] > J. /saNha/ [saũha]

◆S. /nθ/ : J. /Ns/のスペクトログラフ



S. /'onθe/ > J. /oNse/

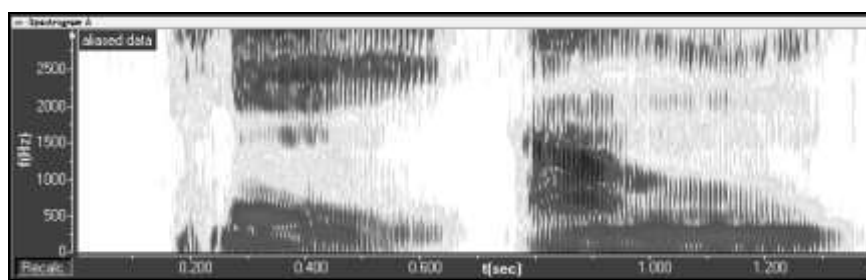
スペイン語には*/n-V/という連続はなく、ふつうは-nV/となる⁹³。一方、日本語には/N-V /がある。

⁹³ ハイフン(-) は音節の境界を示す。

「品位」 /hiNi/ [çiĩi]
「暗雲」 /aNuN/ [aũuN]
「千円」 /seNeN/ [seẽeN]
「弾圧」 /daNacu/ [daə̃atsu]

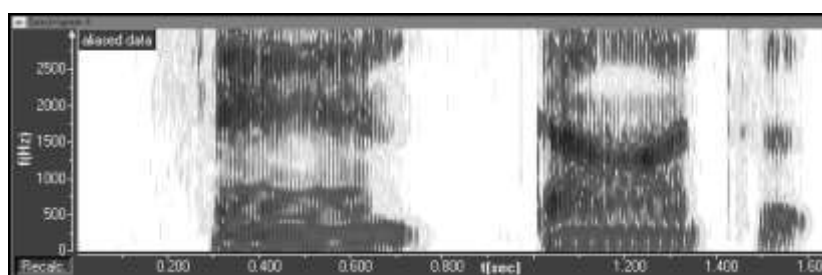
このような発音はスペイン語話者には困難で、それぞれ > S. /'xini/, /'anun/, /'senen/, /a'natsu/ のようになりやすい⁹⁴。

◆J. /N/+母音のスペクトログラフ



J. /hiNi/

/aNuN/



J. /seNeN/

/daNacu/

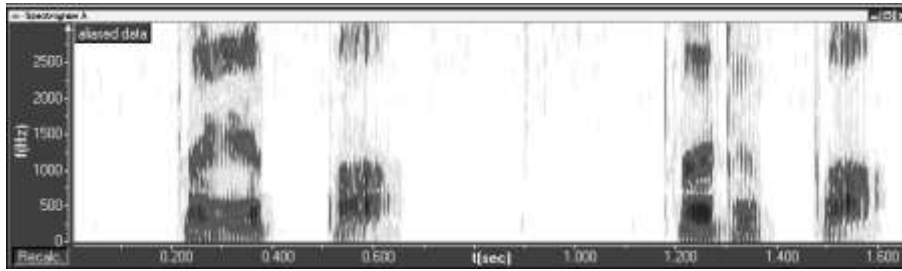
(4) S. /l/ : J. /ru/

S. /l/は後続する子音の調音点によって逆行同化されるが、日本語の/ru/ではすべての場合に、中立的な/u/が付加されて、/r/の調音点は歯茎のままである。このため、日本語話者によるスペイン語の発話には、以下の干渉が聞かれる。

alzar /al'θar/ [al.'θar] > J. /arusaHru/ [arusa:ru]
caldo /'kaldo/ ['kal.do] > J. /karudo/ [karudo]
pulpo /'pulpo/ [pulpo] > J. /purupo/ [puɾupu]
el chico /el'çiko/ [el'çiko] > J. [erutei:ko]

⁹⁴ これにはローマ字による「綴り字発音」(spelling pronunciation)も影響していると思われる。

◆S. /p/ : J. /rup/のスペクトログラフ



S. /pulpo/ [pulpo]

J. /purupo/ [purupo]

(5) J. /Q/

日本語話者によるスペイン語の発話には、J. /Q/がよく聞かれる⁹⁵。後述 (3.3.1) のように、スペイン語は重子音を嫌ってこれを回避する傾向があるので、/Q/の挿入は「日本人学生の悪癖」⁹⁶と見なされる。J. /Q/が起こる条件は微妙であるが、おおよそ次のようなものがあると思われる。

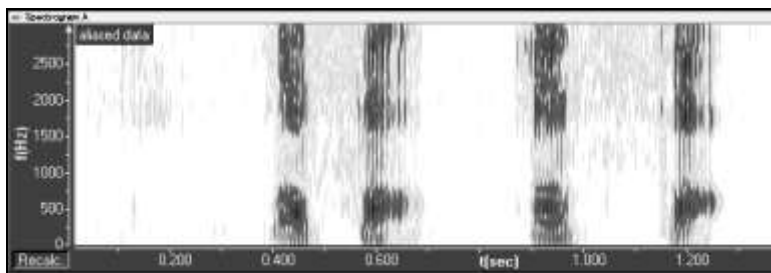
(a) 強勢

日本語話者は、スペイン語の強勢音節の後の子音を長音化させて、これを J. /Q/にする傾向がある。これは、スペイン語の子音が強勢音節の後で長めに発音されるためである⁹⁷。とくに、後から3番目に強勢のある語 (esdrújula) に、J. /Q/が現れやすい。

ése (それ) /'ese/ ['ese] > J. /eQse/ [esse]

afectísimo (親愛なる) /afek'tisimo/ [afek'tisimo] > J. /ahwekutiQsimo/

◆S. /s/ : J. /Qs/のスペクトログラフ



S. /'ese/ ['ese]

> J. /eQse/ [esse]

⁹⁵ cf. 原 (1963: 371).

⁹⁶ cf. 原 (1968: 61. とくに東京語では、「今度から」→「今度っから」や「白くて」→「白くって」のように/Q/を入れる傾向が強いので注意が必要である。

⁹⁷ cf. Navarro Tomás (1918: 389).

(b) 子音の音長

実験音声学の資料によると⁹⁸、スペイン語の強勢音節の後の子音の長さには、次のような序列がある。

1. /r, c/ (最長)
2. /f, θ, s, x/
3. /p, t, k/
4. /ɲ, ʎ/
5. /m, n, l/
6. /b, d, g/
7. /r/ (最短)

日本人によるスペイン語の発話には、1と2の/c, f, θ, s, x/の前に J./Q/が現れやすい⁹⁹。S./r/は有声音であるため、J./Q/は現れない¹⁰⁰。

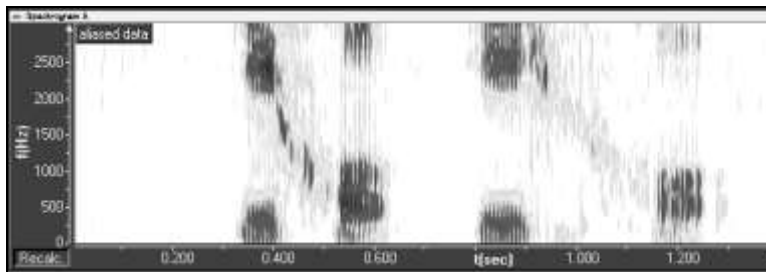
bufo (道化師) /'bufo/ ['bufo] > J. /buQhwo/

hice (私は...した) /'iθe/ ['iθe] > J. /iQse/

cosa (物) /'kosa/ ['kosa] > J. /'koQsa/

hijo (息子) /'ixo/ ['ixo] > J. /iQho/

◆S./x/ : J./Qh/のスペクトログラム



S. /ix/ ['ixo] > J. /iQho/

ときには、先の音長の3.にあたる無声閉鎖音/p, t, k/の前にも J./Q/が現れる。日本語の閉鎖音/p, t, k/にとって重要なのは、その破裂性 (plosiveness) であって¹⁰¹、瞬間的なものである。

⁹⁸ cf. Navarro Tomás (1918: 391).

⁹⁹ S./c/の前に J./Q/が現れるのは稀であるが、lechero (牛乳屋) [le'tero] を J. /reQcyeHro/とする例が観察された。

¹⁰⁰ J./Q/は無声閉鎖音と無声摩擦音の前にのみ現れる。外来語の「バッグ」、「ベッド」なども /baQku/, /beQto/となる傾向がある。一方、「バッハ」、「ゴッホ」などのように同じ外来語でも当該の子音が無声音であれば比較的安定して /baQha/, /goQho/のように発音される。

¹⁰¹ cf. 金田一 (1954, 1967: 159 以下)。

よって、閉鎖部がわずかでも引き延ばされるとそれを/Q/と解し、J./Q. C/となるのであろう¹⁰²。

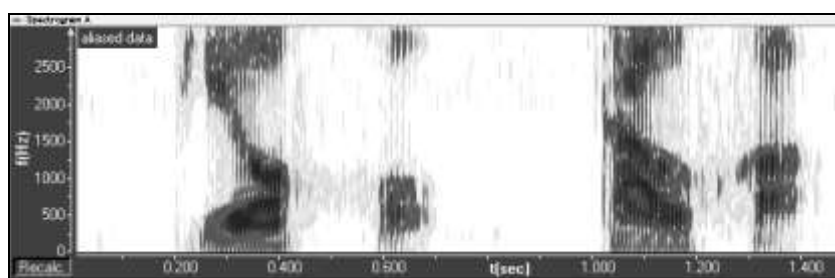
(c) 母音の強さ

上昇二重母音では調音のエネルギーが増加していくのに対し、下降二重母音では逆に減少していく。前者では J./Q/が現れるが、後者にはそれが現れない。

piojo (シラミ) /'pyoxo/ [p̞ioxo] > J. /pioQho/

tauja (象眼細工) /'tawxa/ > J. /tauha/

◆S./awx/のスペクトログラフ



S. /'pyoxo/

/'tawxa/

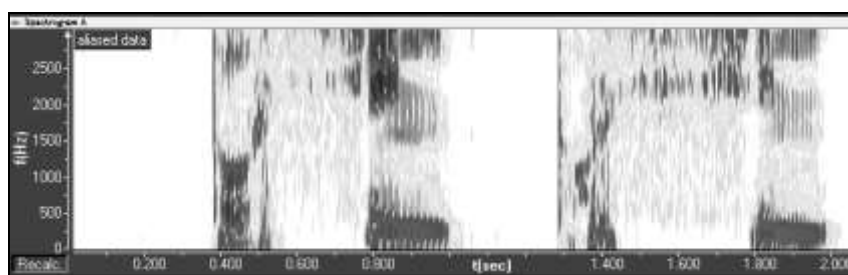
(d) 語境界

J./Q/は語境界の前には現れにくい。たとえば、「突進」と「と私信」は音学的に類似しているにもかかわらず、後者には/Q/は感じられない。これには[ʃ:]の部分に調音のエネルギーの増加と減少があるためであると思われる。

「突進」 /toQsiN/ [toʃʃiN]

「と私信」 /to=sisiN/ [toʃ:ʃiN]

◆J./Qs/, /sis/のスペクトログラフ



J. /toQsiN/

/to=sisiN/

この性質により、スペイン語に移入されて、*Vas solo.* (君は一人で行く) では J./Q/が現れな

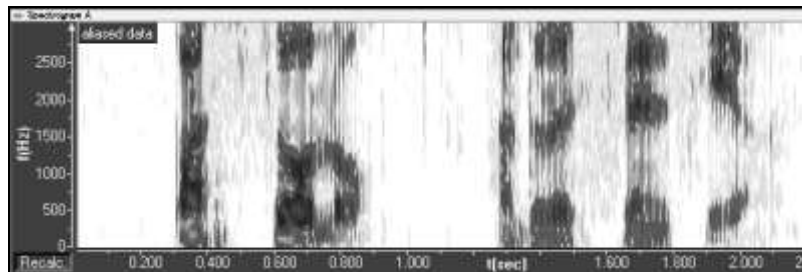
¹⁰² 人名の *Becquer* (*Gustavo Adolfo* ~) は普通['beker] と発音されるが、丁寧な発話では幾分[k]が長音化されるので、日本語話者には/beQkeru/のように聞こえる。これには綴り字発音 (spelling pronunciation) の可能性もあると思う。

いが、 *adolescencia* (青年期) では/Q/が現れることになる¹⁰³。

Vas solo. (君は一人で行く) /'bas='solo/ [bas'solo] > J. /basusoro/

adolescencia (青年期) /adoles'θensya/ [adolesθensj̃a] > J. /adoreQsensia/

◆S. /ss/, /θs/のスペクトログラフ



S. /'bas='solo/

/adoles'θensya/

¹⁰³ これには形態論的な考慮が作用したものと考えられる。耳経路では、たとえば、*Vas solo.* を聞かせてそれを書いてもらおうと「バツソーロ」/baQsoHro/となることが多い。

3. 音の結合

これまではスペイン語と日本語の音素を個別に比較してきた。しかし、個々に取り出しては見失われがちな音の結合による諸現象があり、これらについても両言語の比較が可能である¹⁰⁴。ここでも比較のための共通の単位を音節とする¹⁰⁵。

スペイン語の最大規模の音節構造は/C₁LSVSC₂C₃/である。C₁は閉鎖子音および/f/、Lは流音、Sは半母音、Vは母音、C₂は/p, b, t, d, k, g, n, l, r, θ/、C₃は/s/を示す。この中で、/SVS/は音節の核 (nucleus) を形成し、他の子音(結合) から分離できる。/V/を単純核とよび、/SV/, /VS/, /SVS/を複合核とよぶ。

日本語の最大規模の音節構造は/CyVM₁M₂/である。/Cy/は硬口蓋子音または口蓋化子音を形成するため、スペイン語のように/yV/で複合核を形成するとは考えられない。M₁はモーラ音素/Q, N/で、/VM₁/が日本語の複合核にあたる。

以下では音節構造に基づいて対照分析を進めていく。最初に母音、次に半母音、子音の分析を行う。半母音と子音の分析については母音の前の位置にあるものを先に行い、次に後の位置にあるものに移る。比較のための枠組みは次のような抽象化された音節で、両言語に共通である¹⁰⁶。

C-	V	C+
頭子音	母音	尾子音

3.1. 音節の核

3.1.1. スペイン語の核

スペイン語の音節の構造は次のようになる。

C-3	C-2	C-1	V	C+1	C+2	C+3
/p, t, k/					/p~b/	
/b, d, g/	/r/				/t~d/	/s/
/f/	/l/		/i/		/k~g/	
---		/y/	/e/	/y/	---	
/c/		/w/	/a/	/w/	/n/	
/θ, s, x/			/o/		/l/	
/m, n, ñ/			/u/		/r/	
/ç, r, ʎ/					/θ/	

¹⁰⁴ cf. Heffener (1950: 163ff).

¹⁰⁵ O'Connor-Trim (1953)と Haugen (1956)は、音素配列論 (phonotactics) の単位として音節の有用性を論じている。

¹⁰⁶ cf. 城田(1971: 16-18).

スペイン語の音節には必ず5音素の中の1音素が存在し、それに先行する子音音素、C-3, C-2, C-1 と、後続する子音音素 C+1, C+2, C+3 がある。C-3 は2組に別れ、1つは次に流音 /r/, /l/ を従えるもの (/p, t, k, b, d, g, f/) であり、他は流音が続かないもの (/c, θ, s, x, m, n, ñ, r, l/) である。C+2 は、/s/ を後続させるものと (/p, b, t, d, k, g/)、させないもの (n, l, r, θ) に分類される。

スペイン語では二重母音が発達しているので母音と母音の結合がなめらかである。スペイン語の核には次のものがある。

単純核/V/: *piso* (階), *peso* (重さ), *pan* (パン)

複合核-1/SV/: *viento* (風), *abuelo* (祖母)¹⁰⁷

複合核-2/VS/: *casa* (原因), *voy* (私は行く)

複合核-3/SVS/: *limpiaís* (君たちは掃除をする)

一般に等しい母音が結合すると両者は融合し、異なる母音が結合すると二重母音を形成する傾向がある。このことから、母音と母音の結合がなめらかであるという性質がわかる。

(1) 等しい母音の結合

(a) 弱勢母音+弱勢母音の場合：単一の弱勢母音になる。

Nunca atiende. (けっして相手をしない) ['nuŋka a'tiende] > ['nuŋka 'tiende]

(b) 弱勢母音+強勢母音の場合：単一の強勢母音になる。長さは通常 of 強勢母音と同じである。

Ya sé el tema. (私はもうテーマを知っている) ['ja 'se el 'tema] > ['ja 'sel 'tema]

(c) 弱勢母音+強勢母音の場合：幾分長めの強勢母音になる。

¿A dónde entras? (どこに入るの) [a 'donde 'entras] > [a 'don'dentras]

(d) 弱勢母音+強勢母音の場合：長い強勢母音になる。

Ya han venido. (もう彼らは来た) ['ja 'am be'nido] > ['ja:mbe'nido]

上の(c), (d) の場合でも強勢の短かい母音になることもある。長母音が現れるのは丁寧な発話である¹⁰⁸。

(2) 異なる母音の結合

(a) 両者の調音点が等しいか、後続母音のほうが低い場合。

(i) 先行母音が弱勢の場合：上昇二重母音となる。

¹⁰⁷ S. /yi/ は、*rayito* (< *rayo* (光線) + *ito* (縮小辞)) 語幹に接尾辞がつくときに限られる。

¹⁰⁸ *Quilis* (1964) では長母音と短母音の起こる確率 (%) を示しているが、ここではそれを単純化して示した。

tu inocencia (君の無知) [tu ino'thenθja] > [t̥ino'thenθja]

mi amigo (私の友人) [mi a'miyo] > [m̥ja'miyo]

te amo (私は君を愛する) [te 'amo] > [t̥e amo]

(ii) 先行母音に強勢がある場合：母音が分立する(hiatus)。

Comí un pastel. (私はケーキを食べた) [ko'mi 'um pas'tel] > [ko'mi. 'umpas'tel]

Compré otro. (私はもう一つ買った) [kom'pre 'otro] > [kom'pre. otro]

(b) 後続母音の調音点がより高い場合

(i) 後続母音が弱勢の場合：下降二重母音になる。

café y té (コーヒーと茶) [ka'fe i 'te] > [ka'fej'te]

Lo hiciste (君はそれをした) [lo i'θiste] > [loj'θiste]

la oportunidad (定冠詞+機会) [la oportuni'da(d)] > [lao por tuni'da(d)]

(ii) 後続母音が強勢の場合：母音が分立する(hiatus)。

Lo hice (私はそれをした) [lo iθe] > [lo. 'iθe]

このようにスペイン語では母音連続の相対的に狭い母音 (/a/に対して、/i, u, e, o/, /a, e, o/に対して/i, u/) に強勢のない限り、分立 (hiatus) を避ける傾向がある。さらに、丁寧でない普通体の発話では、以下の条件を満たすとき先行母音が後続母音に融合してしまうこともある。

(a) 先行母音が後続母音よりも開口度が大きいこと

(b) 先行母音に強勢がないこと

(c) 先行母音と後続母音の調音点が共に前舌または後舌であること。ただし、/a/は前舌または後舌のどちらにも属する。

上の条件を満たす *casa humilde* (貧しい家) はぞんざいな発音で ['kasa u'milde] > ['kasu'milde] のように変化する。これに対して、(a) の条件を満たさない *Lo ataca.* (それを攻撃する)、(b) の条件を満たさない *Está ocupado.* (彼は忙しい)、(c) の条件を満たさない *lo importante* (重要なこと) ではそのような融合は起こらない¹⁰⁹。

casa humilde ['kasa u'milde] > ['kasu'milde]

Lo ataca. [lo a'taka] > *[la'taka]

Está ocupado. [es'ta oku'pado] > *[es'toku'pado]

lo importante [lo impor'tante] > *[limpor'tante]

¹⁰⁹ cf. Contreras (1969: 62. スペイン語の母音連続については Bowen (1956-57), Quilis (1964, 1965).

3.1.2. 日本語の核

日本語の音素的音節の構造は、次のようになる¹¹⁰。/w/の分布は限られ、#(休止)、または/h/の後にのみ現れる。/C-2 = (C-1) = V = C+1/、または/C-2 = (C-1) = V = C+2/を「長音節」と呼び、/C-2 = (C-1) = V = C+1=C+2/を「特別長音節」と呼ぶことにする。

長音節の例：「甲」/koH/、「紺」/koN/

特別長音節の例：「ピョーン(と飛ぶ)」/:yoHN/、「カーツ(となる)」/kaHQ/。

C-2	C-1	V	C+1	C+2
/p, t, k/		/i/		
/b, d, g/		/e/		
/c/	/y/	/a/		/Q/
/s, h/	/w/	/o/	/H/	/N/
/z/		/u/		
/m, n/				
/r/				

日本語の核には次がある。

- (1) 単純核/V/：「雨」/ame/、「粉」/kona/
- (2) 単純核/VH/：「東京」/toHkyoH;/VJ/「会」/kaJ/

複合核と母音連続(2音節を形成するもの)は以下のように対立している¹¹¹。

- 「ハート」/haHto/ [ha:to]：「齒跡」/haato/ [haato]
「カレーだ」/kareHda/ [kare:da]：「枯れ枝」/kareeda/ [kareeda]
「C」/siH/ [ʃi:]：「恣意」/sii/ [ʃii]
「高二」/koHni/ [ko:ni]：「小鬼」/kooni/ [kooni]
「数理」/suHri/ [su:ri]：「酢売り」/suuri/ [suuuri]
「敗者」/hasya/ [haiʃa]：「齒医者」/haisya/ [haiʃa]
「鯉」/koJ/ [koj]：「故意」/koi/ [koi]

日本語の母音の連続では、ふつう「やわらかな声立て」(gradual beginning) がなされるが、とくに丁寧な発話では「かたい声立て」(clear beginning) となり、弱い声門閉鎖音が現れる¹¹²。この弱い声門閉鎖音はとくに意味の切れ目に起こりやすい¹¹³。

「青い家」/aoi ie/ [aoi?ie]：「出会い」/deai/ [deai]

¹¹⁰ 柴田(1965: 41)を参照。以下の例も引用した。

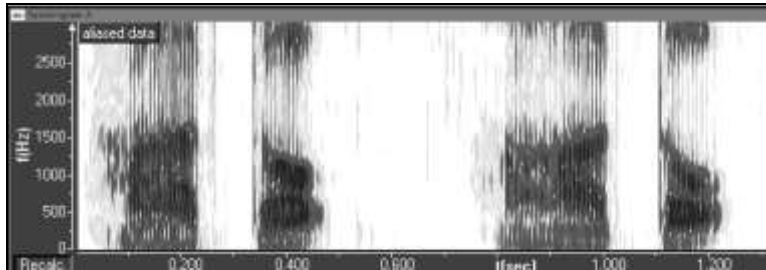
¹¹¹ 普通体やぞんざいな発話ではこれらの対立は失われやすい。

¹¹² ドイツ語の Acht などの母音の前にある声門閉鎖音ほどには強くない。

¹¹³ cf. Bloch (1950; 1975: 141).

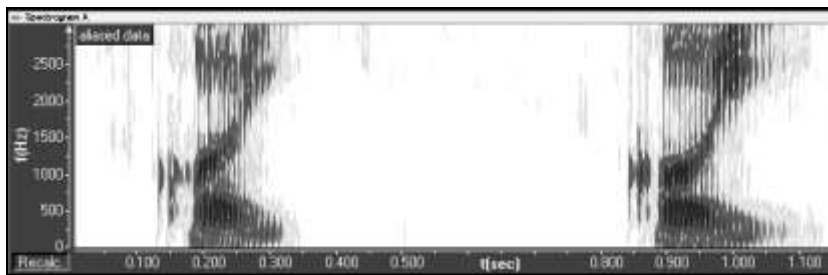
このように日本語では母音連続/VV/が/VH/や/VJ/と音素的に対立する。音声的にも二重母音化したり、融合したりせず、その個々の母音は十分な時間をかけて調音される。

◆J. /aH/のスペクトログラフ



J. /haHto/ : /haato/

◆J. /oJ/のスペクトログラフ



J. /koJ/ : /koi/

3.1.3. 比較

スペイン語の二重母音化や融合の現象と日本語の母音分立の性格は対照的である。日本語では母音が連続すると両者は音節を異にする。

「目へ」 /me e/ [me. e]

「春を」 /haru o/ [haru. o]

一方、スペイン語では両者は1音節になる傾向がある。

nunca atiende/nunka atyende/ [nʊnka'tiende]

mi amigo/mi amigo/ [miːamiyo]

このような日本語の特徴をスペイン語の発音に持ち込むと以下のような干渉が起こす。

S. *alcohol* (アルコール) [al'kol] > J. /arukooru/ [arukooru]

日本人の発話には、とくに語の境界で弱い声門閉鎖音を挿入しやすいので注意しなければならない。

Via a Ana. (私はアナを見た) ['bi'ana] > J. /biaana/ [bia ʔana]

一方、スペイン語話者はJ./VH/:/VV/や J./VJ/:/Vi/などの対立を識別するのが困難である。また、日本語の母音連続を単母音化したり、二重母音化したりすることがある。

3.2. 子音結合

3.2.1. スペイン語の子音結合

スペイン語には以下の子音結合がある。

(1) S. /CL(S)V/: 音節核の前の2子音結合

音節核の前の2子音の結合は閉鎖音および/f/と流音の組み合わせとなる。/tl-/、/dl-/はない¹¹⁴。

$$- \begin{pmatrix} p \\ t \\ k \\ b \\ d \\ g \\ f \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} l \\ r \end{pmatrix} + (S) V$$

例：

plano (平らな) /'plano/
clavo (釘) /'klabo/
blando (柔らかな) /'blando/
gloria (栄光) /'glorya/
flor (花) /'flor/
prado (牧場) /'prado/
tres (3) /'tres/
crudo (生の) /'krudo/
brazo (腕) /'braθo/
drama (ドラマ) /'drama/
grave (重い) /'grabe/
fruta (果物) /'fruta/

¹¹⁴/tl-/は *Tlaxcala* (メキシコの都市名) /tɫas'kala/など、メキシコ方言に存在する。cf. Lope Blanch (1969). 一般のスペイン語の *atlas* は/'a-tɫas/ではなく、/'at-las/のように音節が分かれ、/t/は弱化する。

(2) S./ (V)C₁C₂/音節核の後の2子音結合

音節核の後で2子音が結合するときは、最初の音素 (C₁) は閉鎖音素 (/p~b/, /t~d/, /k~g/)、/n/, /l/, /r/であり、次の音素 (C₂) は/s/となる。

$$V + \begin{pmatrix} p \sim b \\ t \sim d \\ k \sim g \\ n \\ l \\ r \end{pmatrix} + s -$$

例：

abstracto (抽象的な) /abs'trakto/
adscrito (指定された) /ads'trito/
extenso (広範囲の) /eks'tenso/
construcción (建築) /konstruk'thyon/
vals (ワルツ) /'bals/
perspectiva (展望) /perspek'tiba/

3.2.2. 日本語の子音結合

日本語の子音結合は音節核の前の/Cy(V)/のみである。

$$\begin{pmatrix} p, t, k \\ b, d, g \\ s, z, h \\ m, n, r \end{pmatrix} + y (V)$$

例：

「ピューピュー」(擬音語) /pyuHpyuH/
「京都」 /kyoHto/
「調子」 /cyoHsi/
「病気」 /byoHki/
「行儀」 /gyoHgi/
「正直」 /syoHziki/
「定規」 /zyoHgi/
「拍子」 /hyoHsi/
「妙案」 /myoHan/
「如実」 /nyozicu/
「料理」 /ryoHri/

3.2.3. 比較

日本語には S. /CL/に対応する音素連続がないために、日本語話者は/u/を挿入させて > J. /CuL/とする傾向がある。

例：

S. *plano* /'plano/ > J. /puraHno/

S. *fruta* /'fruta/ > J. /huruHta/

ただし、日本語には */tu, du/がないために、/t, d/+r/の結合には母音/o/が挿入される。

S. *tres* /tres/ > J. /toresu/

S. *drama* /'drama/ > J. /doraHma/

このことから、日本語話者は次のようなスペイン語の最小対を区別することが困難である。

copla (民謡) /'kopla/: *cópula* (連結) /'kopula/

tríbulo ((植物)アザミ) : *turíbulo* (香炉) /tu'ribulo/

criar (育てる) /'kryar/: *curial* (弁理士) /ku'ryal/

singlar (航行する) /sin'glar/: *singular* (単一の) /singu'lar/

reglar (調整する) /re'glar/: *regular* (規則的な) /regu'lar/

また、スペイン語では閉鎖子音 +r/の結合では、C と/r/の間に母音的要素が入り、それが後続母音の音色に近づく傾向がある¹¹⁵。

tres (3) /tres/ [t^eres]

gracias (ありがとう) /'graθyas/ [g^araθjas]

これは、日本語話者の耳にはしばしば、/teresu/, /garasiasu/のように聞こえる。しかし、S. /CLV/と S. /CVLV/には次のような対立があるので注意しなければならない。

prado (牧場) /'prado/: *parado* (止まった) /pa'rado/

comprar (買う) /kon'prat/: *comparar* (比べる) /konpa'rar/

また、S. /C₂C₃-/に対応する形式が日本語にないため、>J. /C₂uC₃u-/に置き換えられる。ここでも C₂, C₃ が歯閉鎖音素/t, d/である場合は挿入される母音が/o/になる。

abstracto /abs'trakto/ > J. /abusutorakuto/

adscrito /adskrito/ > J. /adosukuriHto/

ただし、C₂が S. /n/の場合は、それが日本語の/N/に対応するため、母音が挿入されることはない。

¹¹⁵ cf. Malmberg (1948; 1965: 31 y sigs). Fernández (1963).

construcción /konstruk'tθyon/ > J. /koNsutorukusioN/

このように日本語話者の発音では、スペイン語の 1 音節内の子音結合がすべて音節化され、その結果スペイン語の音節単位のリズムをくずして、間延びした発音になる¹¹⁶。

日本語の子音結合/Cy(V) /に対応するスペイン語の形式と、その相違から生じるスペイン語話者の日本語の干渉については、2. 2. 1. で述べた。

¹¹⁶ リズムについては cf. 4. 2. 14.

3.3. 音節境界

3.3.1. スペイン語の音節境界

スペイン語には、/V-V/, /V-C/, /C-C/という音節境界のタイプがある。この中で/V-V/は母音分立 (hiatus) を示すもので、これについては3.1で扱った。/V-C/はスペイン語が開音節型の言語であるために、最も普通の音節境界の現れ方である。/V-/にも、-/C/にもそれぞれすべての母音音素と子音音素が現れる。

/C₁-C₂/の構成は次のようになる。

$$\begin{array}{c}
 C_1 \\
 \left(\begin{array}{c}
 p \sim b \\
 t \sim d \\
 k \sim g \\
 n \\
 l \\
 r \\
 f \\
 \theta \\
 s
 \end{array} \right) \\
 \dots + \quad \quad \quad - \quad \quad \quad C_2 \quad \dots
 \end{array}$$

例：

- abnegación* (自己放棄) /abnega'θyon/
- adjetivo* (形容詞) /adx'e'tibo/
- técnico* (技師) /'tekniko/
- cansado* (疲れた) /kan'sado/
- calcio* (カルシウム) /'kalθyo/
- carne* (肉) /'karne/
- naftalina* (ナフタリン) /nafta'lina/
- juzgar* (判定する) /xuθ'gar/
- mismo* (同じ) /'mismo/

同一子音の連続には以下のものがある。これらは語内において稀であるが、語境界には比較的よく起こる¹¹⁷。

- /d-d/ *libertad de* ... (...の自由) /liber'tad de/
- /n-n/ *son nombres* (数である) /'son 'nombres/
- /l-l/ *el lado* (側面) /el 'lado/
- /θ-θ/ *diez zorros* (10匹のキツネ) /dyeθ 'θoros/

¹¹⁷ その他の同一子音の結合、たとえば/b-b/obvio (明らかな) は稀である。

/s-s/ *los sobrinos* (甥たち) /los so'brinos/

また、音素的には異なる子音であるが、音声的に同一子音になる場合もある。

/n-m/ *con mamá* (ママと) /kon ma'ma/ [konna'ma]

/l-ʎ/ *el llano* (平原) /el 'ʎano/ [eʎ'ʎano]

/r-r/ *hablar ruso* (ロシア語を話す) /habla'ruso/¹¹⁸

これらの同一子音の連続は丁寧な発話では重子音となるが、普通体ではいくぶん長めに発音され、ぞんざいになると単子音とほとんど差がないものになる。たとえば、次のような対が対立するのは丁寧な発話である¹¹⁹。

el oro (金) /el 'oro/ [e'loro]

el loro (オウム) /el 'loro/ [el 'loro] > [e'loro]

son hombres (男たちである) /son onbres/ ['son 'nombres]

son nombres (名前である) /son nonbres/ ['son 'nombres] > ['so'nombres]

vi dejada (捨てられているのを見た) /'bide'xada/ ['bi de'xada]

vid dejada (捨てられたブドウ蔓) /'bid de'xada/ ['bid de'xada] > ['bide'xada]

de llano (平原の) /de 'ʎano/ [de 'ʎano]

del llano (その平原の) /del 'ʎano/ [del 'ʎano]

más aves (もっと多くの鳥) /'mas 'abes/ ['ma'saβes]

más sabes (君はもっと知っている) /'mas 'saves/ ['mas'saβes] > ['ma'saβes]

このように語末の子音と、次に続く語頭の同一子音は融合する傾向がある。また、語末の子音と、次に続く母音は同一の音節になる傾向がある。

3.3.2. 日本語の音節境界

日本語の音節境界には以下のような子音結合が起こる。

$$+ \left[\begin{array}{c} /Q/ \\ /N/ \end{array} \right] - C \quad (+ V)$$

J. /Q-C/と J. /N-C/は単なる長子音ではなく、子音結合の前半部の/Q/, /N/が丁寧な発話では1モーラ分の長さで調音され、その間調音のエネルギーの増加と減衰がある。この正確な等時性 (isochronism) は普通体やぞんざい体ではくずれるが、それでもそれを保とうとする傾向がある。日本語話者の耳は、ぞんざいな発話であってもこのモーラの等時性を印象的に感じる

¹¹⁸ 厳密には同一子音の連続ではないが、融合の仕方が類似するのでここに分類する。

¹¹⁹ cf. Navarro Tomás (1918; 1972: 175 y sigs. ; Quilis (1964), Lorenzo (1972), Dalbor (1969: 147 y sigs.

ようである¹²⁰。

3.3.3. 比較

スペイン語では重子音を嫌い、単子音化する傾向があるのに対し、日本語では/Q/や/N/のモーラ音素の働きで重子音が多く現れる。しかも、これらの重子音の前半部は一般の音節 J./CV/と同じ長さで発音されようとするため、とくにその重子音性が強調される。この点は日本語話者の話すスペイン語に大きな干渉となって現れ、なめらかであるはずのスペイン語の発話に/Q/や/N/のモーラ音素を挿入させてごつごつした印象を持たせてしまう。

例：

Entre ellos había una comunidad de intereses. (彼らは利害を共通にしていた)

S. [en'treɫos a'βia 'una komuni'dade̞nte'reses]

>J. [entre 'eɫos a'βia 'una komuni'dadd de inte'resses]

このように、日本語話者は、スペイン語の語末子音と後続語の語頭の同一子音を融合することが困難である。また、語末の子音と、次に続く母音は同一の音節にすることも困難であり、それぞれ区切って発音する傾向がある。

一方、スペイン語話者は、J/Q/や/N/の等時性を習得するのが困難である¹²¹

S./C₁-C₂/の結合は日本語話者にはむずかしく、>J./C₁u-C₂/のように母音を挿入させる。

S. *abnegación* /abnega'θyon/ > J. /abunegasioN/

S. *técnico* /'tekniko/ > J. /tekuniko/

ただし、C₁ が/t, d/の場合は母音/o/が挿入される。

S. *adjetivo* /adxe'tibo/ > J. /adohetiHbo/

また、C₁ が/n/の場合は、J./N/に同定される。

S. *cansado* /kan'sado/ > J. /kaNsaHdo/

よって、日本語話者には次のようなスペイン語の(準)最小対を弁別することが難しい。

saldar (決算する) /sal'dar/: *saludar* (挨拶する) /salu'dar/

astillar (粉々にする) /asti'ɫar/: *asutillar* (微妙にする) /asti'lar/

また、日本語話者には音節境界にある S./l-r/や S./r-l/の発音が難しい。

¹²⁰ その他、J./V-V/の結合と/C-V/の結合については、それぞれ、3.1.2 と 2.8.2 を参照されたい。

¹²¹ cf. 2.8.3 (2), 2.8.3. (3).

el rico (金持ち) [el'riko]

Carlos (カルロス : 人名) ['karlos]

そして、音素的な問題となる S. /l-r/ : /r-l/ : /r/ の弁別も困難である。これは、S. /r/ : /r/ を長さの対立としてとらえているため¹²²、S. /r/ よりも長いこれらの 3 種の音素形式の弁別ができなくなるためである。

例 (1): S. /l-r/ : /r/

del rumbo (方角の) /del'runbo/: *derrumbo* (私はくずす) /de'runbo/

el radio (半径) /el'radyo/: *errado* (誤った) /e'rado/

例 (2): S. /r-l/ : /r/

Carlos ((人名)カルロス) /'karlos/: *carros* (車(pl.)) /'karos/

perla (真珠) /'perla/: *perra* (雌犬) /'pera/

charlo (私はしゃべる) /'carlo/: *charro* (田舎の) /'caro/

burlo (私はあざける) /'burlo/: *burro* (ロバ) /'buro/

¹²² cf. 2. 7. 3. (2).

4. アクセント・イントネーション・リズム

本章では、アクセントとイントネーション(構造言語学の用語では「超分節的」suprasegmental要素)について、両言語の記述と対照分析を行う。

4.1. アクセント

発話内のある特定の音節を、その強さ (intensity)、高さ (pitch)、長さ (duration)、きこえ (sonority) などによって、他の音節より際だたせる手段の総称を「アクセント」(accent) と呼ぶ¹²³。スペイン語では、これらの手段のうち基本的に強さが用いられ、日本語では高さの変化が用いられる。

4.1.1. アクセントの基本的性質

(1) スペイン語

スペイン語では強勢の配置により、以下のような対立が生じる。

/SS'S/ *terminó* (彼は終えた) /termi'no/

/S'SS/ *termino* (私は終える) /ter'mino/

/SSS/ *término* (終わり) /'termino/

/S'SSS/ *comételo* (それをしろ) /ko'metelo/

/'SSSS/ *cómetelo* (それを食べてしまえ) /'kometelo/

さて、スペイン語の音声的実体について、先にそれが基本的に音の「強さ」によるものであると述べたが、これには次のような留保が必要である。Quilis (1971) は、スペイン語のアクセントの音声的特徴を明らかにするために、以下の実験を行った。

5人の被験者に、*estímulo* (刺激)、*estimulo* (私は刺激する)、*estimuló* (彼は刺激した) のようなアクセントの対立がある語を7組用意して発音させ、これを音響学的に分析し、その結果を、(a) 基本周波数 (Hz)、(b) 母音の長さ (c. s.)、(c) 強さ (amplitude)、(d) 強さの領域 (mm²) に分けて表示した。各語を、(1) 孤立させて、(2) *Digo la palabra* _____. (私は____という語を言う) という環境、(3) *Digo la palabra* _____ *otra vez*. (私は____という語を再び言う) という環境の中で交替させる。その結果、(a~d) の各指数がアクセントのある母音の位置で一致しないことが多く、たとえば、(1) 孤立させた *estímulo*, *estimulo*, *estimuló* における各指数は以下のような¹²⁴。

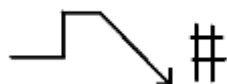
¹²³ 石橋編 (1973), s. v. Accent.

¹²⁴ Informante-1, art. cit., p. 63.

/es'timulo/				/esti'mulo/				/estimu'lo/			
*	í	u	o	*	i	ú	o	*	i	u	ó
(a) Hz	243	202	162	(a) Hz	202	202	162	(a) Hz	202	202	202
(b) c. s.	8.8	4.8	5.6	(b) c. s.	5.6	9.2	8.0	(b) c. s.	6.4	5.6	9.6
(c) db	36	12	6	(c) db	30	20	10	(c) db	28	16	23
(d) mm ²	238	40	25	(d) mm ²	108	180	30	(d) mm ²	125	75	209

このようにして、アクセントのある母音について、(a) ~ (d) の各指数がそれぞれ最大になる場合を合計すると、スペイン語のアクセントの知覚において最も重要な指数は (a) の基本周波数、すなわち「高さ」(pitch) であり、次に (b) の長さであって、(c) (d) の強さで関係する指数は比較的重要でないという結論になる。

Quilis の実験結果が示すように、音の超分節的要素である強さ、高さ、長さは発話全体の中で関係し合うが、それらを分析するならば高さは音調に、強さはアクセントに帰属させるべきであろう。筆者はこの場合の高さの変化を、末尾やその他の音調の環境によるものを考え、アクセントそのものの音声的性質ではないと考える。たとえば、*estímulo* の /i/ が高いのは次のような音調の環境において /i/ に音調の山の部分が被さったために、他よりも高い指数を示すようになったのであり、アクセント自体の属性によるものではない。



このことは、たとえば、*Digo la palabra _____ otra vez.* の環境にある、*cántara* (壺)、*cantara* (*cantar* : 歌う subj. 1singl, 3singl), *cantará* (<*cantar*: fut. 3singl) の各数値を比べるとさらに明らかになる¹²⁵。

/'kantara/				/kan'tara/				/kanta'ra/			
*	á	a	a	*	a	á	a	*	a	a	á
(a) Hz	243	263	263	(a) Hz	182	263	243	(a) Hz	202	202	263
(b) c. s.	8.8	6.4	8.0	(b) c. s.	6.4	11.2	5.6	(b) c. s.	6.4	8.0	9.6
(c) db	24	31	22	(c) db	25	35	25	(c) db	35	28	24
(d) mm ²	216	208	176	(d) mm ²	154	310	126	(d) mm ²	189	196	216

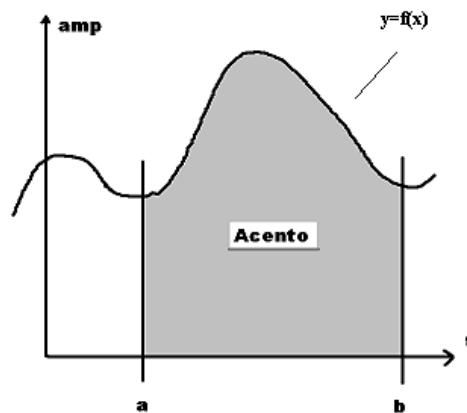
これを見ると、*cántara* の例では高さの指数である (a) Hz がアクセントの位置に対応していないことがわかる。これは、先の図で示した末尾の音調が *cántara* に被さっていないためである。さらに、*Digo la palabra _____.* の環境における、/soplo/と/so'plo/は次の表のように、Quilis (art. cit. : 66) の数値と比べて Hz が全体的に低く、また、/so'plo/においては Hz に関してアクセントの差は現れていない。これもやはり末尾音調のためであって、スペイン語の最終音節

¹²⁵ Informante-1, art. cit. , p. 66.

のピッチが下がる傾向があるからである (cf. 4. 2. 4)。

/'soplo/			/so'plo/		
*	ó	o	*	o	ó
(a) Hz	202	162	(a) Hz	202	202
(b) c. s.	9. 2	9. 6	(b) c. s.	4. 8	8
(c) db	28	28	(c) db	27	29
(d) mm ²	286	150	(d) mm ²	121	174

筆者は、スペイン語のアクセントの音声的実体を、音の強さ (amp) とその持続時間 (t) の関数であると考え。図で示すと、以下の線分に囲まれる面積である。



当然のことではあるが、この **Acento** の値は音調その他の条件によって乱される場合があるので絶対的な定義にはならない¹²⁶。また、末尾部を除いては一般に強勢音節は高くなる傾向があり、さらに対比や強調を示す場合は、ピッチに上昇がより顕著になるため (cf. 4. 2. 1)、それも無視できない。しかし、先に述べた理由から大部分のピッチ (高さ) の要素はイントネーションの問題として扱うべきである。

(2) 日本語

日本語のアクセントの音声的性質は、基本的にピッチであって、強さや長さの要素はあまり重要ではない。「強さ」については、語頭と核が幾分強められることはあるが、基本的にこれがピッチのパタンを崩すことは少ない。また、「長さ」についてはすでに/H/音素として分節音素の機能を果たしているので、このことが再び超分節的に用いられるのを妨げている。また、それが逆に作用して、日本語のアクセントの機能を「強さ」になりにくくしている、と思われる。すなわち、強さアクセントには通常その余剰的特徴として¹²⁷、「長さ」を持

¹²⁶ Quilis (1971) の調査では 105 例中、17 例ある。

¹²⁷ 「余剰的」(redundant) というのは誤解を与えやすい表現である。先述のようにスペイン語のアクセントの長さの要素は決して余分なものではなく、それを除くならば、アクセントは多くの場合認識できなくなる。よって筆者はこれを「補強的特徴」と呼びたいくらいであるが、本論文では慣例に従うことにする。

っているからである。

Daniels (1954, 1964: 59-60) は、「[日本語のアクセントの区別の] 根本要素は、口中、口辺、主として舌の或る筋肉の緊張化 (intensification) にある」と述べ、ピッチでは区別できないはずの「ささやき」(whisper) の状態でのアクセントの区別を挙げ、これを「『声帯には無関係の、舌の或る筋肉の緊張化』の有無による区別である」と述べている。

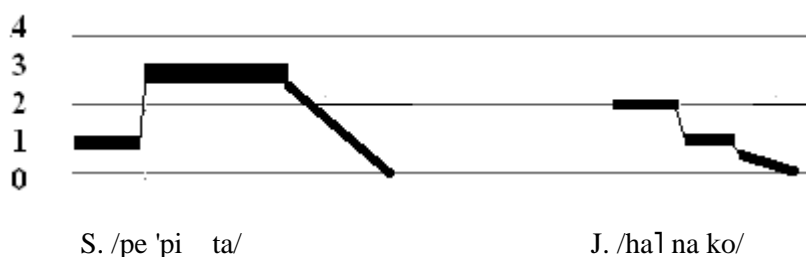
興味深い観察であるが、それによって日本語のアクセントを「舌の筋肉の緊張化」と見なすことはできないし、まして「声帯には無関係」とは言えないだろう。筆者は、ささやきの状態でのアクセントは別扱いにして、ささやきの場合には、通常ピッチで区別される音節のアクセントの有無が強さによって代償される、と考える。これは、ささやきの状態で「雨」/a~~me~~/ と「飴」/ame~~me~~/を区別する際に極度に力を入れて発音させなければならない事実によって説明される。

(3) 比較

スペイン語のアクセントの音声的性質が基本的な「強さ」と余剰的な「長さ」であるのに対し、日本語のアクセントの性質は「高さ」である。このことは対照音声学的に見て重要な点であって、後述するイントネーションの問題とも関連する。

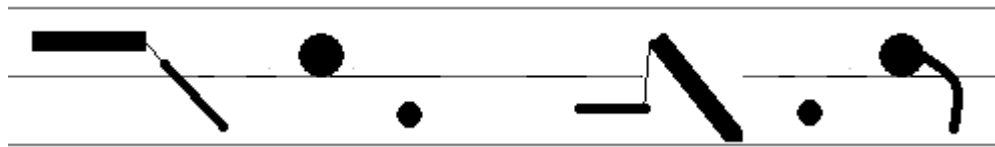
	スペイン語のアクセント	日本語のアクセント
強さ	○	×
長さ	△	×
高さ	×	○

比較を可能にするために、次のような同一の基準に基づく単純化した図式を使う。



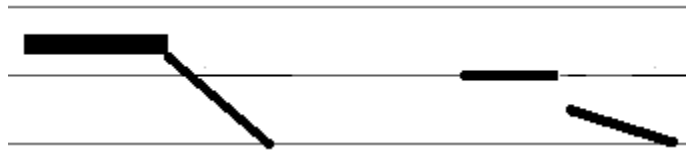
上の図の横線は音の相対的な高さを示す。便宜的に最低のレベルを 0 とし、最高点を 4 とし、その間を等分に 3, 2, 1 を設定する。線分の長さを音節の調音時間の相対的長さに比例させ、線分の太さでその強さを示す。連続した発話の音節は細い線で結び休止は空白にする。

これは、O'Connor-Arnold (1961, 1964) の英語の分析や Stirling(1935) のスペイン語の分析に用いられている表記法を参考にした。彼らのものは次のようにストレスとピッチしか表せないので、ここではさらに長さと言の連続も示せるように線分を使うことにする。



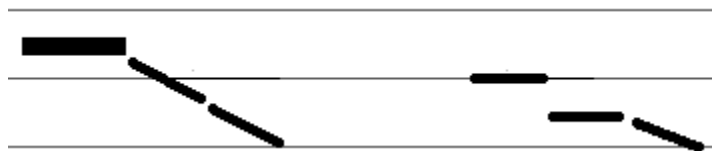
/pablo/ (Ueda) (Stirling)

/ma'drid/ (Ueda) (Stirling)



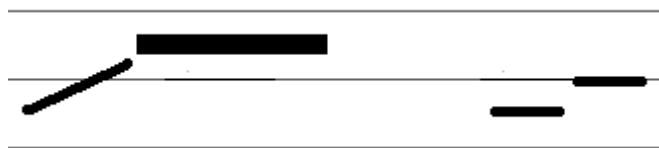
S. /ka sa/ (家)

J. /ka sa/ (傘)¹²⁸



S. /a ni mo/ (活力)

J. /a ni mo/ (兄も)



S. /a ki/ (ここ)

J. /a ki/ (空)

スペイン語でアクセントが 1 つだけの音素的句では、音声的な強さと高さが一致する。そのため、両言語話者の間に、干渉による音素的な問題は起こらないが、以下のような音声的差異を指摘できる。

スペイン語のアクセント音節は日本語のそれと比べて強く、長く、高いピッチで発話される。スペイン語では強勢音節と弱勢音節の強さの差が大きく、とくに休止の直前の弱勢音節の弱化が目立つ¹²⁹。また、強勢音節は弱勢音節の 2~3 倍の長さを持ち¹³⁰、これは日本人の耳には、J. / (C)VH/ に聞こえる。高さについては音調の問題になるが、最終強勢音節が音調の核(後述: 4. 2. 4) になるため、かなり高く発話される。

印象的にいうならば、スペイン語は韻律的にダイナミックであるのに対し、日本語はシンプルで単調である(monótono)である。

¹²⁸ ボールドはピッチが高いことを示す。

¹²⁹ ただし、2. 1. 1 (3) で述べたように、英語などと比べると弱化の程度は少ない。

¹³⁰ cf. 2. 1. 1 (4).

4.1.2. アクセントの基本的位置

(1) スペイン語

スペイン語において最も基本的なアクセントの位置は、語末から数えて 2 番目の音節である¹³¹。ここで「基本的」と呼ぶのは次の理由による。

- (1) 特定の子音で終わる語を除き大多数の語がこの型である。
- (2) 外国語、とくに日本語など正字法でアクセントが付されていない言語がスペイン語に同化されるとき、多くの語がこの型になる。例。Yokohama > S. /yoko'xama/
- (3) 本来強勢のかからない語(弱勢語)が、特定の場合にアクセントを受けることになるとこの型になる¹³²。例：¿Qué has escrito aquí? - He escrito: "durante"[du'rante].

(2) 日本語

東京語のアクセントは以下のような型の体系を持つ¹³³。

平板型	ヒガ	トリガ	サクラガ	トモダチガ	ニホンガミガ	ムラサキイロガ
尾高型	*	ハナガ	オコトガ	イモートガ	オショージャツガ	ジューチガツガ
中高型	*	*	ココロガ	ミズウミガ	ニワカアメガ	アイアイガサガ
	*	*	*	ウグイスガ	ハルガスマガ	タタミオモテガ
	*	*	*	*	オナイドシガ	コナオシロイガ
	*	*	*	*	*	オマワリサンガ
頭高型	ヒガ	アメガ	イノチガ	ユーモリガ	オツキサマガ	ダイジングウガ

このように高いピッチ(下線で示した)と低いピッチの配列が非常に拘束されているために、日本語のアクセントには音節の連続を一つにまとめる働きがある。服部 (1954, 1960: 240ff; 1973) はこの特徴を考慮して、「(1) 核¹³⁴があるか無いか、(2) 有る場合にはどのモーラにあるか」、という弁別的特徴を有する「アクセント素」(prosodeme) を考える。たとえば、「心」は/ooT]o/といったアクセント素を有することになり、n 個のモーラのある語には n+1 個のアクセント素の可能性がある。

例：

「心」 /ooT]o/

「鶯」 /ooT]oo/

「桜」 /ooo/

¹³¹ Real Academia Española (1973, p. 67) はこれを"paroxitonismo"と呼ぶ。

¹³² id. p. 67.

¹³³ 金田一 (1958: 12-13. それぞれの語を漢字で表記すると次のようになる。平板型：日、鳥、桜、友達、日本髪、紫色。尾高型：花、男、妹、お正月、十一月。中高型：心、湖、俄雨、相合い傘；鶯、春霞、豊表；同い年、粉白粉；お巡りさん。頭高型：火、雨、命、蝙蝠、お月様、大神宮。尾高型、中高型、頭高型を合わせて起伏式とよぶ。これに対して、平板式は平板型だけである。

¹³⁴ 「核」とは次に「低」を伴う「高」をいう。cf. 服部 (1954; 1960: 251.

一方、emic な単位であるはずのアクセント素の数が非常に多く、その種類の無限性にも問題がある。たとえば、金田一 (1957) によれば、「坊ちゃん坊ちゃんする」といった語の例があげられている。金田一が提唱する/高/や /低/の「調素」(toneme) の考え方を導入すれば、単位の数としては2つであり経済的である。しかし、/高/と/低/に切り離してしまうと、その配列の規則性は見失われてしまう。

例：

「心」/低高低/
 「鶯」/低高低低/
 「桜」/低高高/

このように両者の説には一長一短がある。そこで、第三の立場として「アクセント核」そのもの(/l/)を emic な単位として認めたい¹³⁵。これは単位の数としては1つであり、その配置が弁別的機能を果たす。また、金田一の弱点である記述の冗長さ(redundancy)も解決される。以下の記述で日本語の音素的アクセントに言及するときはすべてこのアクセント核を示す。

例：

「心」/koko^lro/
 「鶯」/ugu^lisu/
 「桜」/saku^lra/

モーラ音素/H, J, N, Qにはアクセントのかからない性質がある。たとえば、「電話」/deNwa/ + 「機」/ki/という結合には、漢語の結合法則¹³⁶によって、/deNwa^lki/のように、前の語の最後の拍にアクセントが置かれる。ところが、「飛行」/hiko^H/ + 「機」/ki/は、*/hiko^H^lki/となるべきだが、前部の語の最後の拍が長音素(/H/)であるために、1つ前の拍に移動して、/hiko^lHki/となる。同様に、「進水式」、「日本海」、「11歳」も次のように法則通りにはならない。

「飛行機」 */hiko^H^lki/ cf. 「電話機」 /denwa^lki/→/hiko^lHki/
 「進水式」 */si^Nsu^J^lsiki/ cf. 「除幕式」 /zyumaku^lsiki/→/si^Nsu^Jsiki/
 「日本海」 */niho^N^lkaJ/ cf. 「東シナ海」 /higasisina^lkaJ/→/niho^lNkaJ/
 「11歳」 */zyu^Hi^Q^lsaJ/ cf. 「16歳」 /zyu^Hroku^lsaJ/→/zyu^Hi^QsaJ/

このように、/CV^lM/と/CVM^l/の対立がないために、アクセントの置かれる単位はモーラではなく、音節であると考えのほうが妥当である¹³⁷。そこで、長音節(モーラ音素で終わる音節)と短音節(/CV/)に配置されるアクセントの型を表すと、以下のようになる。

¹³⁵ 古くは宮田 (1928, 1929) の唱えた説がある。

¹³⁶ 秋永 (1958: 43).

¹³⁷ McCawley (1968), 早田 (1974, 1975).

		短音節	長音節
1 音節	/S/	/hi/ (日)	/saN/ (三)
	/S1/	/hi1/ (火)	/sa1N/ (産)
2 音節	/SS/	/usi/ (牛)	/kumoN/ (苦悶)
	/SS1/	/uma1/ (馬)	/suki1H/ (スキー)
	/S1S/	/so1ra/ (空)	/so1Hsa/ (操作)
3 音節	/SSS/	/kataci/ (形)	/kakumeH/ (革命)
	/SSS1/	/otoko1/ (男)	/berugi1H/ (ベルギー)
	/SS1S/	/koko1ro/ (心)	/depa1Hto/ (デパート)
	/S1SS/	/i1noci/ (命)	/ko1Hmori/ (蝙蝠)

これらの型はすべて同質ではなく、その頻度や生産性 (productivity) に差があることが指摘されている。秋永 (1958: 6) によれば、

- (1) 1 拍語...平板型は頭高型にくらべやや少数。漢語や日常用いられない語彙、新造語はほとんど頭高型になる。
- (2) 2 拍語...平板型は外来語にほとんど見られない。尾高型は漢語では非常に少なく、外来語には見られない。漢語、外来語、日常用いられない語、新造語はほとんどが頭高型である。
- (3) 3 拍語...平板型は所属語彙が多く、優に半数を占める。漢語、外来語は平板型か、頭高型である。
- (4) 4 拍語...平板型は所属語彙が多く、半数を占める。中高型 (/MM1MM/) は比較的多いが、平板型に転向する語も多少ある。
- (5) 5 拍語...平板型は中高型に続く有力な型である。中高型 (/MMM1MM/) は所属語彙がきわめて多く、半数近くを占め、現在も他の型から移入している。
- (6) 6 拍語...中高型 (/MMMM1MM/) が所属語彙の過半数を占め、他の型からも移入中である。

このような状態を考慮に入れれば、日本語のアクセントの基本的な配列は、/(...)S1MM/型であると考えられる¹³⁸。

(3) 比較

日本語の基本アクセント位置が/(...)S1MM/であるため、スペイン語で/SSS/でないアクセント位置のパタンもこの型にしようとする傾向がある。

例：

jabalí (イノシシ) /xaba'li/ > J. /ha1bari/

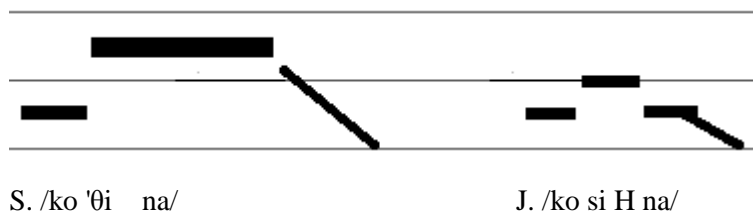
Cuéntamelo. (私にそれを話して) /'kwentamelo/ > J. /kueNta1mero/

¹³⁸ S は音節を示し、長音節と短音節を含む。M はモーラ音素を示す。

一方、S. /(...)SS/の語では、Jに/H/が現れ、/CVH/にアクセントが置かれるため音素的な問題とはならない。

cocina (台所) /ko'θina/ > J. /kosiHna/
señorita (お嬢さん) /sepo'rita/ > J. /senyoriHta/

音声的には、J. /CVH/は下図のようにピッチが変化するが、スペイン語ではほぼ一定に保たれるので、注意しなければならない。



また、S. /(...)SSS/型の語では、以下のような有利な転移をする、

S. *lmite* /'limite/ (限界) > J. /riHmite/
 S. /me'kaniko/ (機械技師) > J. /mekalniko/

これまでの例では、すべての音節が/CV/型であったが、S. /CVC/型の音節が日本語に転移されると、J. /CVCV/型になるため、以下のように1音節増えた後に、日本語のアクセントパターンに組み込まれることにある。

S. *español* /espa'ɲol/ (スペイン語) > J. /espanyoHru/
 S. *Roberto* /ro'berto/ (ロベルト(人名)) > J. /robeHruto/
 S. *olímpico* /o'linpiko/ (オリンピックの) > J. /oriHnpiko/

S. /CCV/型の音節についても同様にすべて/CVCV/型にして転移される。

S. *cobre* /'kobre/ (銅) > J. /koHbure/
 S. *tráfico* /trafiko/ (交通) > J. /toraHhwiko/

さらに、本来母音のないところに母音を挿入させて、その上、そこにアクセントを置くこともある。

S. *Creo que sí.* /'kreo ke 'si/ > J. /kuH'reo ke siH/

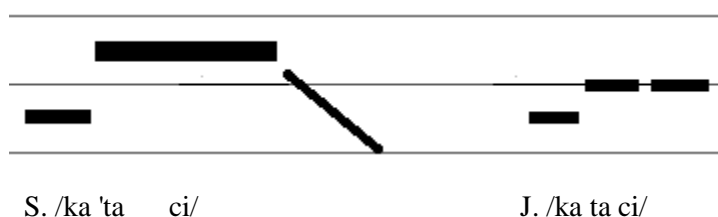
音節末のCが/n/の場合はJ. /N/となる。

S. *campo* /'kanpo/ (野) > J. /kaHNpo/
 S. *acento* /a'θento/ (アクセント) > J. /aseHNto/

一方、スペイン語話者は、日本語のアクセント・パターンをすべて無視し、S の基本アクセント位置である/(...)'SS/に合わせる傾向がある。

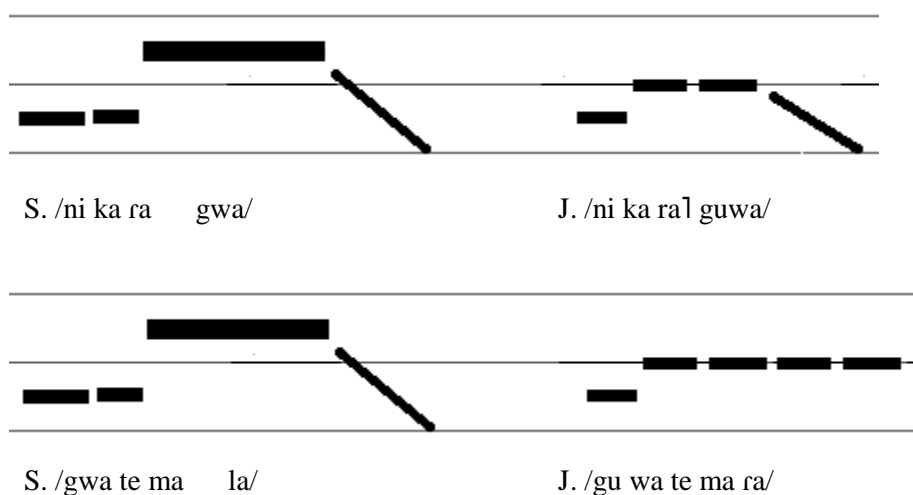
- J. 「形」 /kataci/ > S. /ka'taci/
- J. 「男」 /otokoɽ/ > S. /o'toko/
- J. 「心」 /kokoɽro/ > S. /ko'koro/
- J. 「命」 /iɽnoci/ > S. /i'noci/

音声的に見るならば、両者には以下のような差がある。



音素解釈の上では、両言語ともに強勢 (/') とアクセント核 (/ɽ/) の位置による対立が考えられるが、その音声的な実現を見ると以下のような違いがある。音声的な実体の比較はすでに扱ったので、ここではアクセントの音声的な連続の形状について比較する。

スペイン語の強勢は、他の弱勢音節から卓立して現れ突出的であるのに対し、日本語のアクセントは核およびそれに先行する音節が台地状の形を示している¹³⁹。

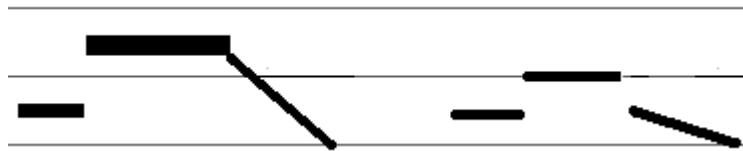


日本語話者はスペイン語の強勢に先行する音節を高く続ける傾向があり、とくにスペイン語の長く弱勢が続く語の発音にそれが顕著に見られる。

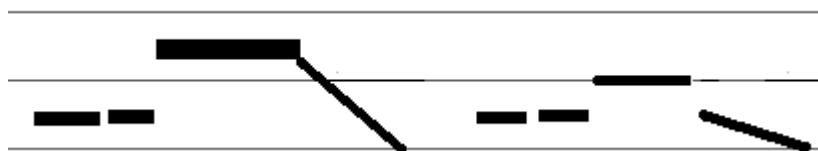
¹³⁹ ただし、音調の自然な下降がある。cf. 後述 4.2.3.



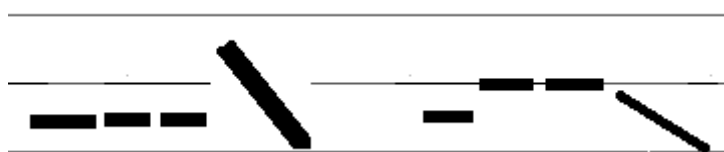
S. /'kon pro/ > J. /ko_lN pu ro/



S. /lo 'kon pro/ > J. /ro ko_lN pu ro/



S. /te lo 'kon pro/ > J. /te ro ko_lN pu ro/



S. /te lo kon 'pro/ > J. /te ro ko_N pu ro_H/

また、日本語話者は2つの強勢の間を平板化させる傾向がある。

例：



S. /'mu ca 'a gwa/ > J. /mu H cya a gu wa/



S. /se pa 'ra da 'men te/ > J. /se pa ra H da me N te/

日本語の頭高型を除くアクセントパターンでは第1拍目が低く、第2拍目が高くなる。この

性質をスペイン語に移し替えると、以下のような対の弁別ができなくなる。

aprobado (是認された) /apro'bado/

ha probado (彼は試してみた) /'apro'bado/

escrito (書かれた) /es'krito/

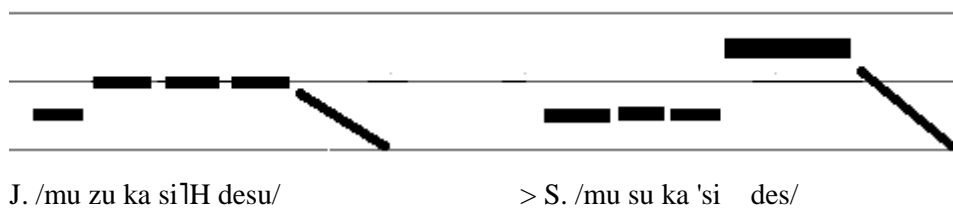
he escrito (私は書いた) /es'krito/

また、日本語にはスペイン語の定冠詞、接続詞、前置詞、関係代名詞などの弱勢語に相当するものがないので、日本語話者はこれらにもアクセントをつける傾向がある。とくに弱勢語が続く次のような例では、弱勢のままにするのが困難である。

Voy a recetarle un calmante para que se le alivie el dolor. (痛みが軽くなるように鎮痛剤を処方して差し上げましょう)

Clara está ya perfectamente, de lo que me alegro mucho. (クララはもうすっかり元気で、私はそれがとてもうれしい)¹⁴⁰.

一方、スペイン語話者による日本語の発話には、以下のような干渉が見られる。

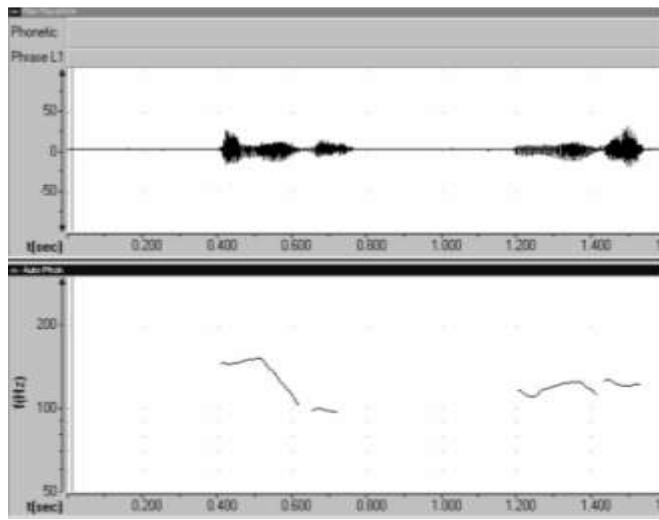


語頭の上昇位置が異なること、アクセント音節の卓立、末尾の音調の傾きなどが違う。

最後に、語頭の音節の性質が両言語において違うことも指摘しておきたい。スペイン語では語頭の弱勢音節が比較的長く強く、ときには高く発音される傾向にあるが、日本語のそれはスペイン語と比べてかなり弱く、語頭が低くはじまる語ではとくに弱い。日本語話者が話すスペイン語の初めの部分が聞き取れにくいのはこの影響が大きいものと思われる。

¹⁴⁰ 岡田 (1967: 52).

◆日本語のアクセントの wave form と auto pitch



1. 「雨だ」 /a^l me da#/ 2. 「飴だ」 /a me da#/

4.2. イントネーション

Hockett (1950: 65)は、「英語や中国語、またおそらくあらゆる言語において、話し手は同時に2つの情報を伝達する。すなわち一つは音調で、もう一つは母音、子音、その他から構成される。音調はいわば残余のものに対して、一種の並行的な解釈となり、それがないと、われわれには後者の意味が不明になることがある」と述べている。

音調を形態的に見るならば、それは直接構成素分析(immediate constituent analysis)において、発話全体の直接構成素、すなわち発話から最初に抽出される要素である¹⁴¹。

しかし、分節音素やアクセントが言語的情報を担う機能が大きいのに対し、音調は話者の特徴や感情的要素の比重が大きいため、客観的な分析が困難である。また、離散的(discrete)な単位も見だしにくく、そのため音声と音素のレベルを明確に区別しにくい。さらに方言差が大きいことも付け加えておきたい。

これまでになされてきたスペイン語の音調の研究¹⁴²、とくにその構造主義的解釈は、表示が明快である一方、音調の本来の性質である微細なニュアンスを捨象しているようである¹⁴³。確かに言語的要素(恣意的要素)と表情的要素(有縁的要素)を区別して分析を進めるほうが作業上有利であるが、前者の分析結果をもってそれが言語の音調の姿であるとは言えないであろう。筆者は言語的な音調の型の上に表情的要素が被さって、その全体の姿が音調である、と考える。

しかし、対照音声学の見地から見ると、言語的要素の型の方が重要である。それは、表情的要素は個人の癖であったり、文体的であったり、その他多くの要因に左右されているからである¹⁴⁴。これらについては諸言語において共通の現象が観察されることも多い。

よって、以下では音調の言語的な面を記述し、両言語の比較を行う。ここで用いられる表記は離散的な「超分節音素」ではなく、現実の音調曲線を単純化した、いわば近似的な簡略表記である。発話は *matte-of-fact speech* である。

4.2.1. 高さのレベル

(1) スペイン語

スペイン語の高低のレベルには5段階認められ、それらは以下のような現れ方を示す¹⁴⁵。

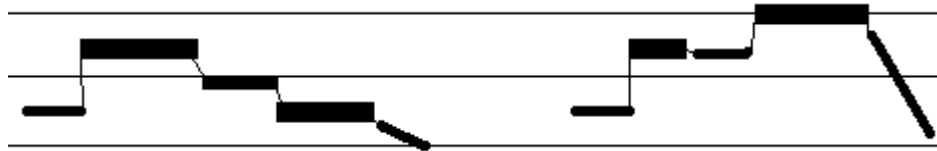
¹⁴¹ Hockett (1958, 1962: 159ff).

¹⁴² cf. Kvavick-Olsen (1974).

¹⁴³ cf. Anthony (1948), Bowen (1956), Stockwell, Bowen and Silva-Fuenzalida (1956), Bowen and Stockwell (1960), Matluck (1965), Stockwell and Bowen (1965), Mills (1969), Gregores-Suárez (1971), Quilis (1975).

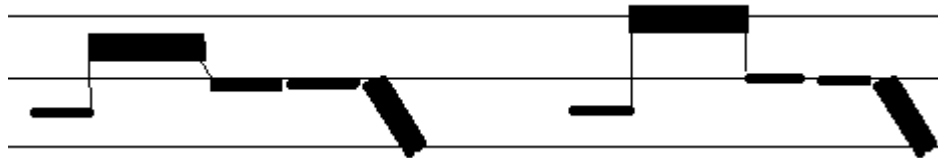
¹⁴⁴ 金田一 (1967: 78ff).

¹⁴⁵ これは、アメリカ構造主義音素論でいう「高さ音素」(pitch phoneme)ではなく、phoneticなものである。cf. Trager-Smith (1957, 1958: 46ff).



(1a) /te 'bas ma 'ɲa na/
Te vas mañana.

(1b) /te 'bas ma "ɲa na/
Te vas **mañana**.



(2a) /ma 'ɲa na te 'bas/
Mañana te vas.

(2b) /ma "ɲa na te 'bas/
Mañana te vas.

(1a)は普通の音調で、発話のどの部分にも強調は加わっていない。/te/のレベルが1であり、/ba/になると急に上昇して3へ移動し、以下/ña/まで自然なゆるやかな下降がある。/ña/の強勢音節のレベルは/bas/のレベルと比べて著しく低い。これを1で表す。最終音節の/na/は、下降調末尾/↓#/の前では、0のレベルまで比較的急に下がる。/ma/の自然下降と/na/の末尾の下降とは、音声的にも言語的価値においても異なるので、前者は水平線とし、後者は斜線として区別する。

(1b)は、*mañana* に強調 (emphasis) が置かれた場合である。(a)と比べると、/"ña/の強勢音節が極度に高くなるので、これをレベル4で表す¹⁴⁶。/na/の下降は急激であるが、時間的には(1a)の/na/とそれほど変わらない。視覚的に長く見えるが音調は斜面の長さではなく、時間軸に降ろした水平の長さが示すものとする。

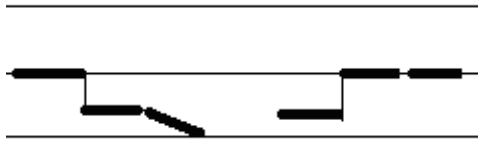


(2a)は、(1a)の音調と基本的に変わらないが、/bas/の音節中に下降があることが異なる。これを太い斜線で示した。(2b)は、*mañana* に強調が置かれた場合で、(2a)と同様に、/"ña/は4のレベルまで上昇する。

(2) 日本語

日本語ではピッチがアクセントとして用いられるため、音調はそのピッチパターンを変えることができず、その分布に制限がある。

¹⁴⁶ 音素表記中の/"は強調を示す。



(1a)/a| me da#/ (1b)/a me da#/ // (1a)「雨だ」:(1b)「飴だ」



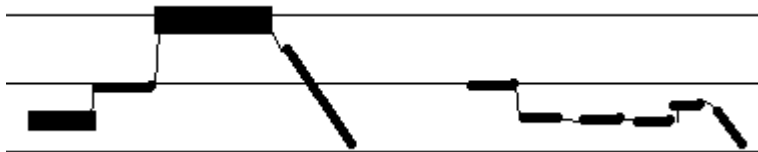
(2) /a me zya na J yo| "a| me da yo#/ // 「飴じゃないよ、**雨**だよ」

(1a), (1b)はもともと普通の音調で、(1a)は頭高型の句、(1b)は平板型の句の音調である。(1a)の末尾が0のレベルまで下降するのに対し、(1b)は幾分下がるが、0にまで到らず、少し pending な印象を与える。

(2)の前半部は、中間のレベルで平板で続き、後半部は強調の音調を示している。(1d 強調では高さのレベルの変化もちろんあるが、強さの要素が重要なので、これを太線で示した。高さの変化は1段階だけである。

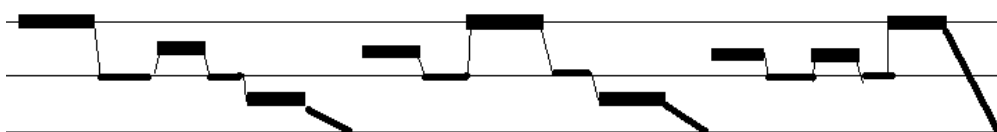
(3) 比較

スペイン語のピッチレベルは5段階、日本語のピッチレベルは4段階で示せる。日本語はスペイン語と比べて高さの起伏に乏しい。これは単にレベルの総数の差ばかりでなく、レベル間の移動幅も大きく異なるのでより対照的になる。たとえば、S. /'ɲa/と/'ɲa/を比べると、レベルの差が3段階あるのに対し、J. /a|/と/'a|/の差は1段階で示せるほど小さい。また末尾の下降についても、Sでは大きいですが、Jでは1段下がる程度である。たとえば、感嘆文でも以下のように違う。



S. /'ke bo "ni to#/ J. /ki| re H da "na| H#/
 ¡Qué bonito! (きれいだなあ!)

次の例が示すように、Sでは強調のためにレベル4を比較的自由に使えるのに対し、Jではピッチの上昇は休止の前に集中しやすい。



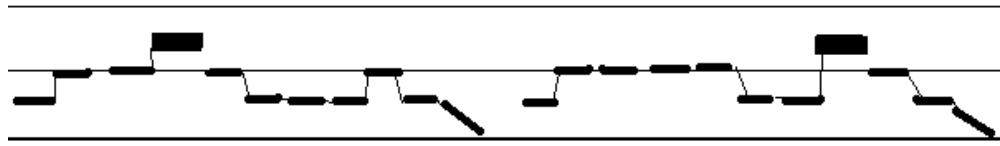
S. /'xwan pe 'go a 'pe pe/ /'xwan pe "go a 'pe pe/ /'xwan pe 'go a "pe pe/

Juan pegó a Pepe.

Juan pegó a Pepe

Juan pegó a Pepe

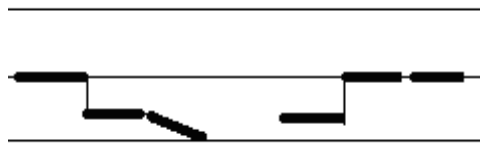
(フアンがペドロをぶった。フアンがペドロをぶった。フアンがペドロをぶった。)



/マ サ オ "ガ| タ| ローヲブ|ッタ#//マ サ オ ガ タ ロ| ー"ヲ|ブ|ッタ#/

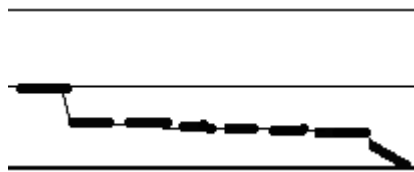
よって、日本語話者にとってピッチを用いてスペイン語の文中の強調を置くべき音節に音調の中心を移動させることが難しい。

日本語の音調は、頭高でない限り、第1モーラから第2モーラにかけて上昇があり、その後はアクセント核の位置までゆるやかな下降のあるほぼ台地状のパターンを形成する。頭高のときは語頭が明瞭であるが、その後はすべて低い音調となる。どちらにしても語尾の音調が低く続くので、語尾が不明瞭となる傾向がある。次は頭高型と平板型の続く例である。



/サ|カタ| マサオ/

それを文中に入れると概略次のようになる。



/サ|カタ マサオ デス#/

丁寧な発話では休止(//)がよく現れ、ピッチの上昇も明瞭になるが、連続して発話されたと上の図のように語頭が高く後は下降を続けるという形状になる。

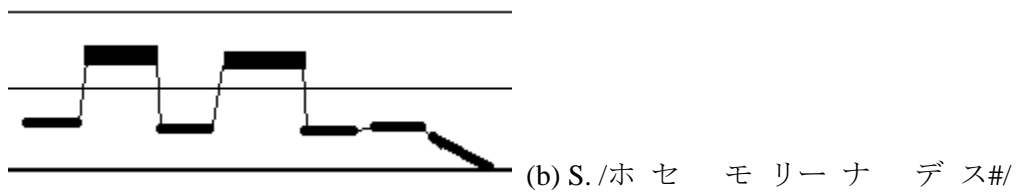
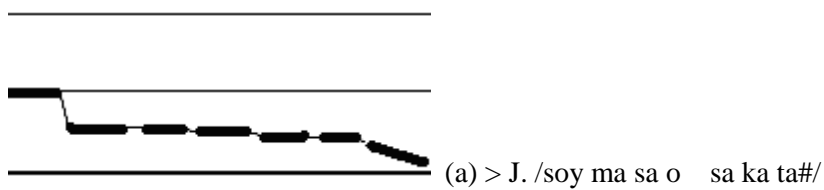
一方スペイン語では次のようになる。



S. /soy xo 'se mo 'li na#/ *Soy José Molina.* (私はホセ・モリーナです)

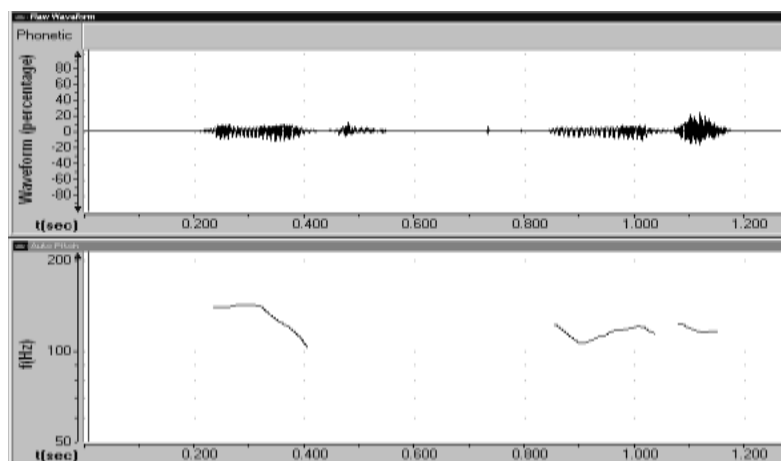
スペイン語では重要な/xo'se mo'lina/の部分にピッチに上昇があるが、日本語の例ではそれが文頭で現れている。このようにそれぞれの言語で特有の音調パタンの性格に応じた語の配置やピッチの上昇で情報が十分に伝わるが、これを一方の言語から他の言語に移すと以下の

ような干渉を起こす。



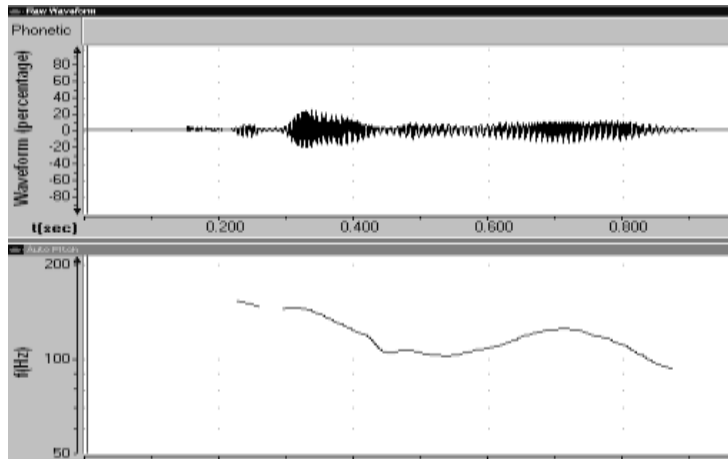
(a)は日本語の干渉が強いスペイン語の音調である。この音調パターンでは、相手に自分の名前が伝わらず、自己紹介にならない。一方、(b)では、スペイン語の音調パターンの干渉が強く、日本語話者にはとても誇張された表現に聞こえる。

◆両言語のイントネーションの wave form と auto pitch

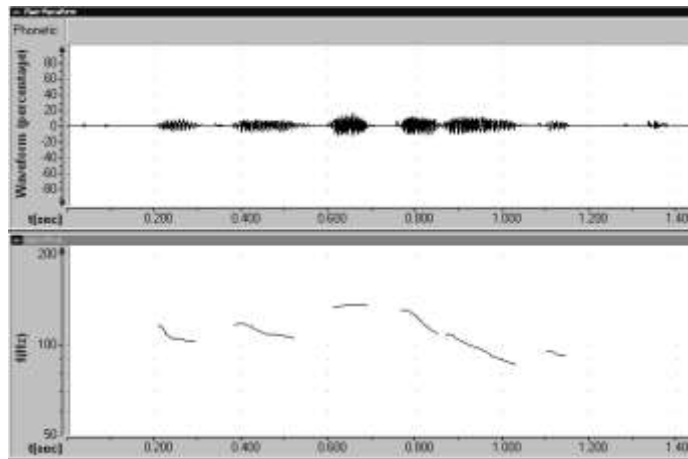


J. /almeda/ 「雨だ」

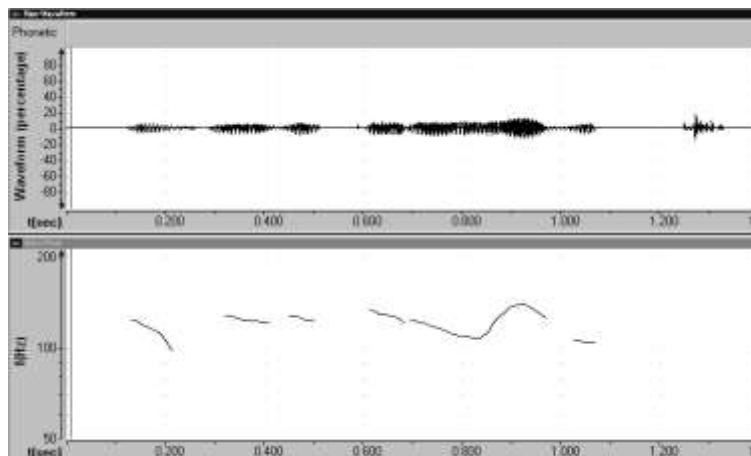
/amedá/ 「飴だ」



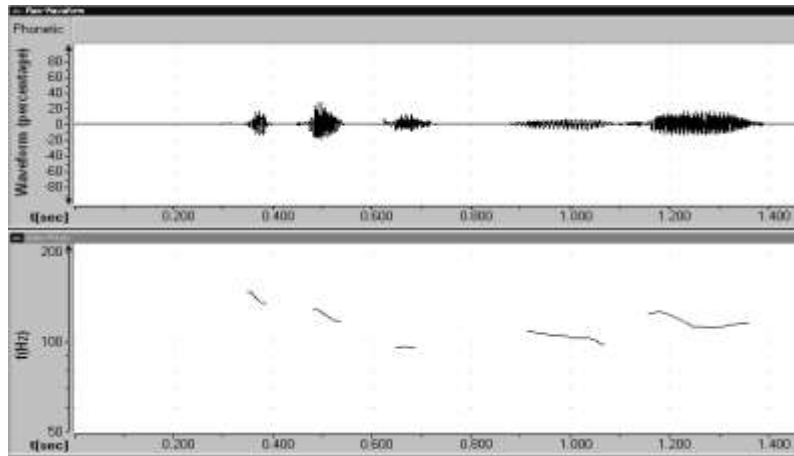
J. /ki re H da "na l H#/ 「きれいだなあ」



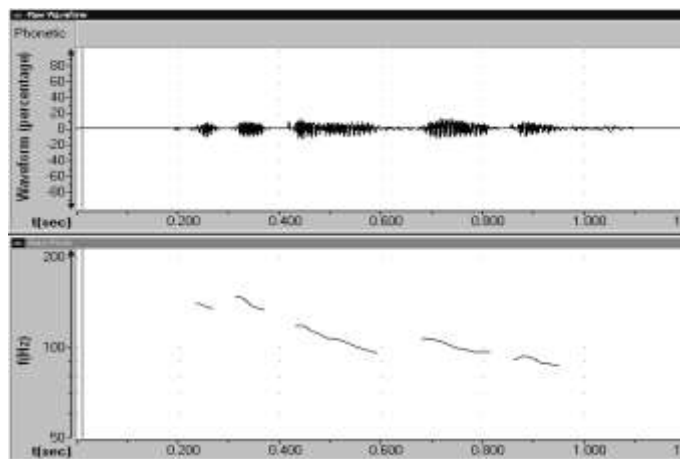
/マ サ オ "ガ | タ | ローヲ ブ | ッタ # /



/マ サ オ ガ タ ロー"ヲ ブ | ッタ # /



/サカタ| マサオ/



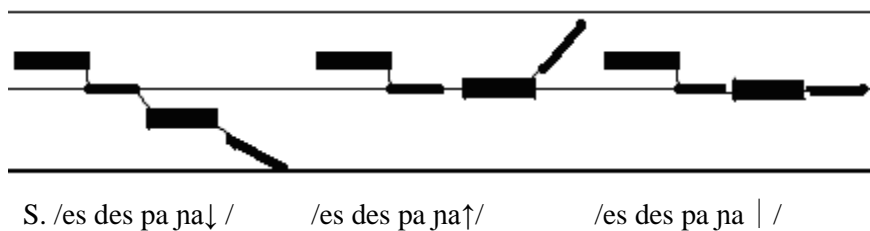
/サカタ マサオ デス/

4.2.2. 末尾のイントネーション

(1) スペイン語

終止 (/#/) で終わる発話を「音韻的文」(phonological sentence) と呼び、一時休止 (//) で終わる発話を「音韻的句」(phonological phrase) と呼ぶことにする。以下では、音韻的句1つからなる音韻的文について考察する。

スペイン語の末尾には、大略↓、↑、|/の3種の休止が認められ、それぞれ以下のように実現する¹⁴⁷。



¹⁴⁷ それぞれ、*Es de España.* (彼はスペイン出身です) // ¿*Es de España?* (彼はスペイン出身ですか?) *Es de España...* (彼はスペイン出身ですが...).

(a) 下降

次の図はスペイン語の下降音調の典型的な型を示すもので、最終強勢音節が下がる¹⁴⁸。最終強勢音節を「音調の核」と呼ぶ。強勢音節が2つ以上ある句において音調の核の高さが下がる。

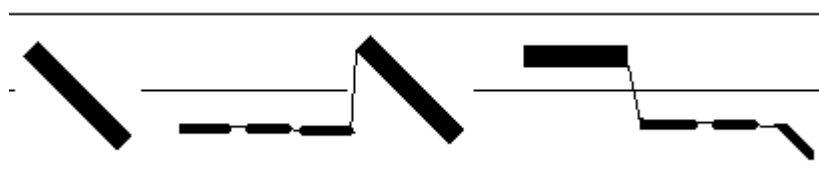


/la 'so paes 'ta 'bue na/

/o 'centa tay 'θin ko/

La sopa está buena. (このスープはおいしい) // 80 y 5 (80 と 5).

強勢が1つしかない発話では次のようになる。



/'pan#/

/kons ti tu 'θyon#/

/'kwen ta me lo#/

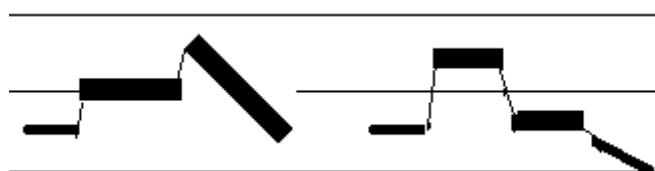
pan (パン)

constitución (憲法)

Cuéntamelo. (私にそれを話して)

よって、強勢音節が1つだけある発話と、2つ以上ある発話の音調パターンは次のように異なる。

¹⁴⁸ cf. Bolinger (1960, 1966: 43; Stockwell and Bowen (1965: 28; Matluck (1965: 18; Henriquez Ureña (1971: 207. しかし、方言差もある。英語では、音調の核のピッチが高くなるので、スペイン語とは逆のパターンになる。



He went home.

Comí mu cho. (私はたくさん食べた。)

構造言語学的解釈では、前者は/1231↓/、後者は/1211↓/となる。cf. Bowen and Stockwell (1960: 11ff.

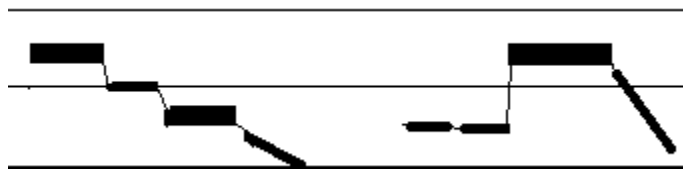


/o 'cen tay 'nwe be↓/

80 y 5 (80 と 5)

/o cen tay 'nwe be↓/

85.



/'ko mo 'kye res↓/

¿Cómo quieres? (どうしたらいい?) // Como quieres (君の好きなような).

/ko mo 'kye ras↓/

(b) 上昇

一般疑問文に用いられる型。音調の核は1のレベルまで下がらず、中位の2に留まる。最終音節は4のレベルまで上昇する。



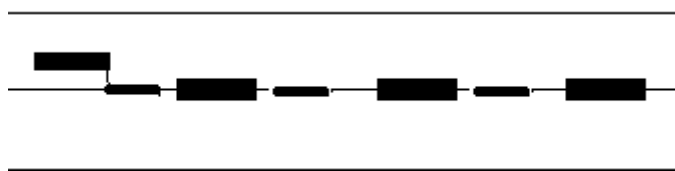
S. /a be 'ni do an 'to nyo↑ 'bi no 'pe pe↑ pe pe↑ 'pan↑/

¿Ha venido Antonio? (アントニオは来た?) // ¿Vino Pepe? (ペペは来た?)

// ¿Pedro? (ペドロ?) // ¿Pan? (パン?)

(c) 平坦

発話が一時中断されるときに用いられる型。(1)の下降末尾と似ているが、最後が下降しないで、平坦で終わる。



/'bi no 'pe dro#/

/'pe dro#/

/'pan#/

Vino Pedro...(ペドロは来たけれど...) // Pedro...(ペドロ...) // Pan...(パン...).

(2) 日本語

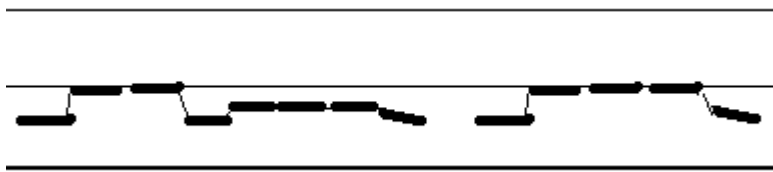
日本語でも休止の前に、/↓↑|/という3種の末尾イントネーションがある。



/テレビヲ ミタ↓//テレビヲ ミタ↑//テレビハ ミタ ケレド | /

(a) 下降

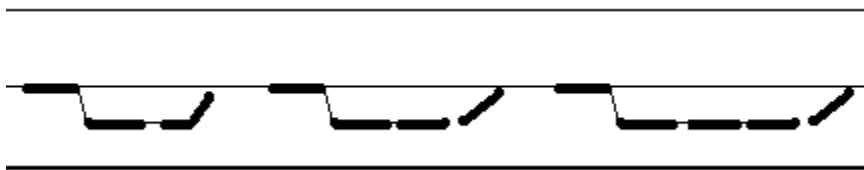
ほとんど自然な下降に近いが、最終音節が下がるため、文の終結が感じられる。しかし、次のような平板部の句ではこの下降が目立たなくなる。



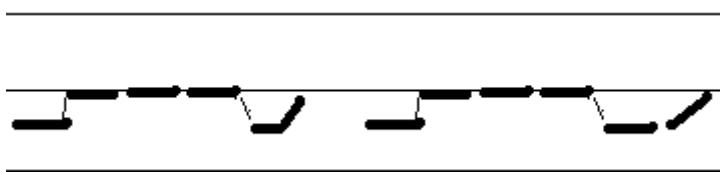
/アレハ | ガッコーダ↓/ /キタムキダ↓/

(b) 上昇

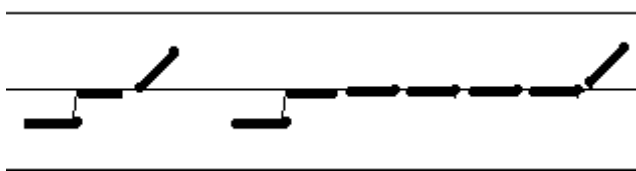
最終音節が上向きになるが、頭高・中高型と平板型では次のように異なったパターンになる。



(i-1) /ハナコ↑ (i-2) ハナコノ↑ (i-3) ハナコノヲ↑



(ii-1) /コレタベル↑/ (ii-2) /コレタベルノ↑/



(iii-1) /マサヨ↑/ (iii-2) /キミノトモダチ↑/

(i)は、頭高型の句に上昇の末尾イントネーションがついた型で、(i-1)では、最終モーラの前半が低く、後半から上昇する。これは「ハナコ↑」というような発話で、「コ」全体が高くなるのではない。(i-2)では、助詞の「ノ」で上昇があり、(i-1)のように最終モーラ(「ノ」)の

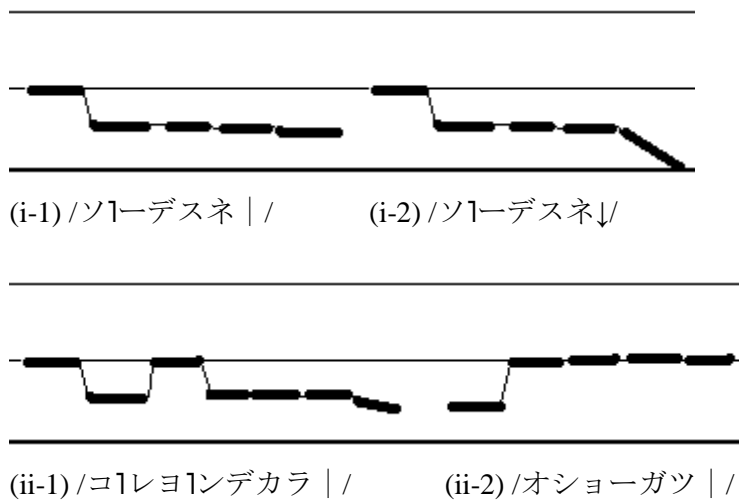
内部で変化することはない。かりに(i-1)のような上昇をすると、(i-3)の意味のようにとらえられる可能性がある。

(ii-1)は中高型の上昇末尾イントネーションで、(ii-2)と類似したパターンを示す。

(iii-1)はアクセント核がないため、尾高型の上昇末尾イントネーションで、(i-1)や(ii-1)と異なり、モーラ内部の上昇で始まることはない。また、レベル2から1段上がるため、3になることも(i), (ii)と異なる。

(c) 平坦

これは頭高型と中高型では自然下降で終わるイントネーションである。一方、尾高型では、末尾部の若干の長音化を除いては、(a)の下降末尾イントネーションとほとんど差がない。



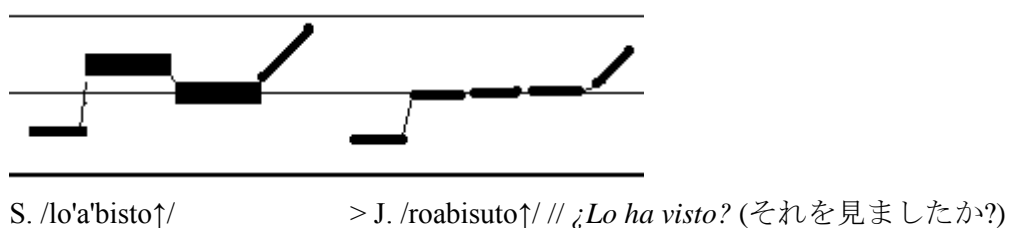
(i-1)は相手の質問を受けて、考えるとき間をとる場合である。「ネ」は長くなる傾向がある。
 (i-2)は相槌をうつときの発話で、下降末尾イントネーションとなる。

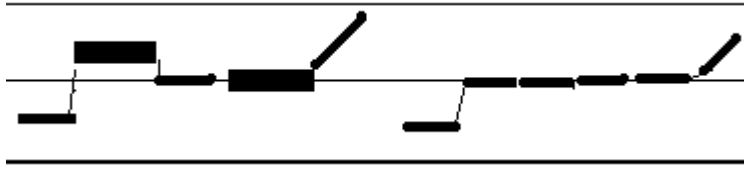
(ii-1)は中高型の発話で、末尾付近は自然な下降になる。(ii-2)は平板型で、最終モーラの延長を除けば下降末尾イントネーション(a)とほとんど変わらない。

(3) 比較

両言語の末尾部を比較すると、スペイン語話者では音調の核(最終強勢音節)から最終音節までの高さの変化が重要であるのに対し、日本語では主に最終モーラの高さの変化だけが重要である。

とくに上昇末尾イントネーションの形態が著しく異なるため、日本人の発話には以下のような干渉が見られる。

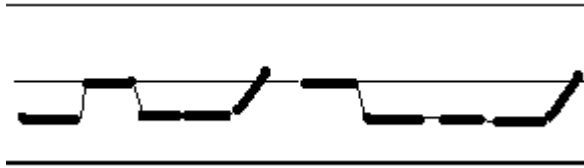




S. /e'sakta'mente↑/

> J. /esakutameNte↑/ *Exactamente.* (確かに)

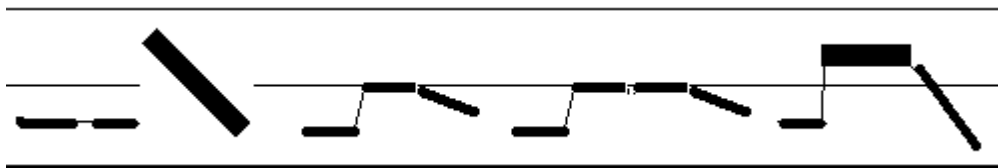
これらは、日本語の上昇末尾の上昇部が次のように最終モーラに集中しやすいことが原因であろう¹⁴⁹。



/ミマシタカ↑/

/ドコデスカ↑/

また、日本語の /↓/ と /↑/ は、音声的な差が比較的少なく、両者ともスペイン語の /↓/ に類似している。これは、とくに平板型の句において目立つ傾向である。日本語話者の話すスペイン語は末尾の下降幅が小さいので、ときには平坦末尾イントネーションのようにとられることがある。



1. S. /se a ka bo↓/

2. J. /オワリ↓/

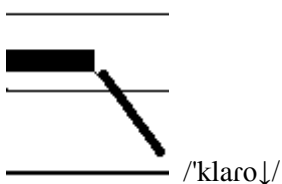
3.> J. /se a ka bo↓/

4.>S. /オワリ↓/

上の図の 1. S に 2. J のような型が適用されると 3.>J のようになる。逆に、スペイン語話者の発話には 3. J. に S. 1. のような型が適用され、4. >S. のように、日本語話者にとってはぶっきらぼうな印象を与える発話になる¹⁵⁰。

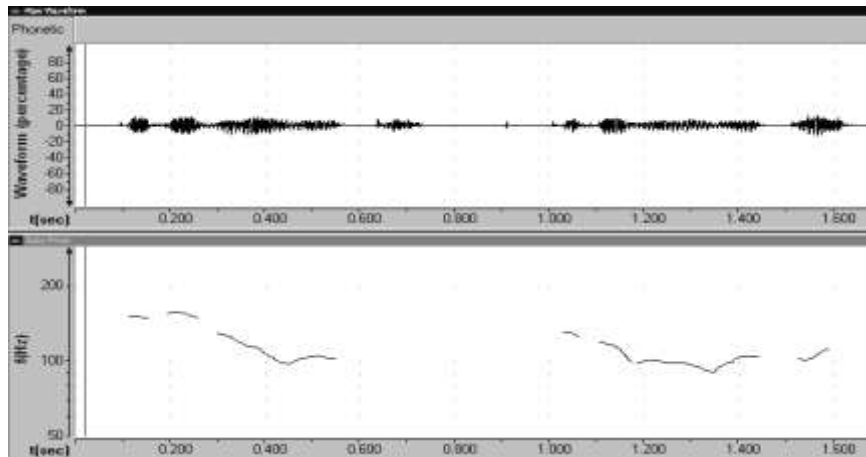
¹⁴⁹ cf. 川上 (1963).

¹⁵⁰ 日本語話者の耳には、スペイン語の *¡Claro!* の「もちろんです」(同意)とか「そうですね」(相槌)という意味の音調がとても強く響き、「当たり前だ!」と言われているような印象を受ける。スペイン語の基本的な音調パターンを知っていれば、このような誤解はないはずである。



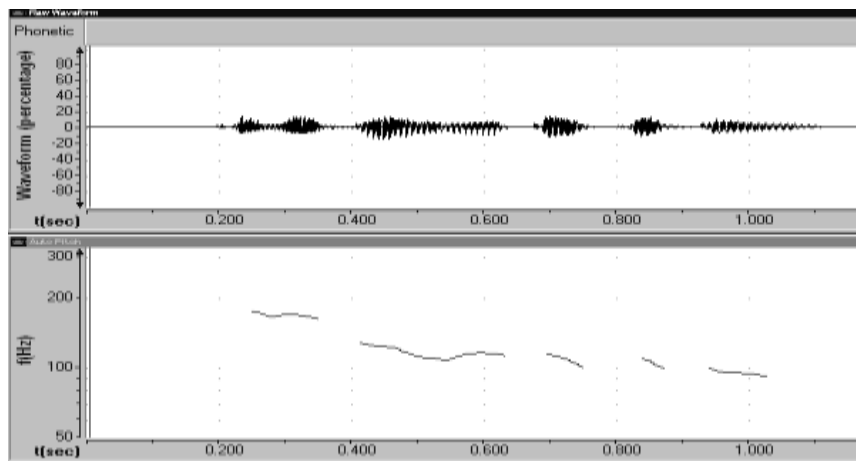
/'klaro↓/

◆wave form と auto pitch

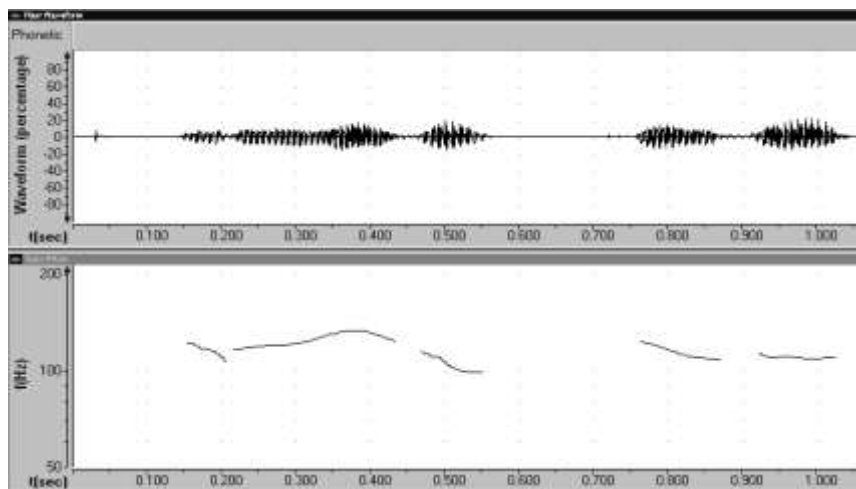


/テレビヲ ミタ↓

/テレビヲ ミタ↑

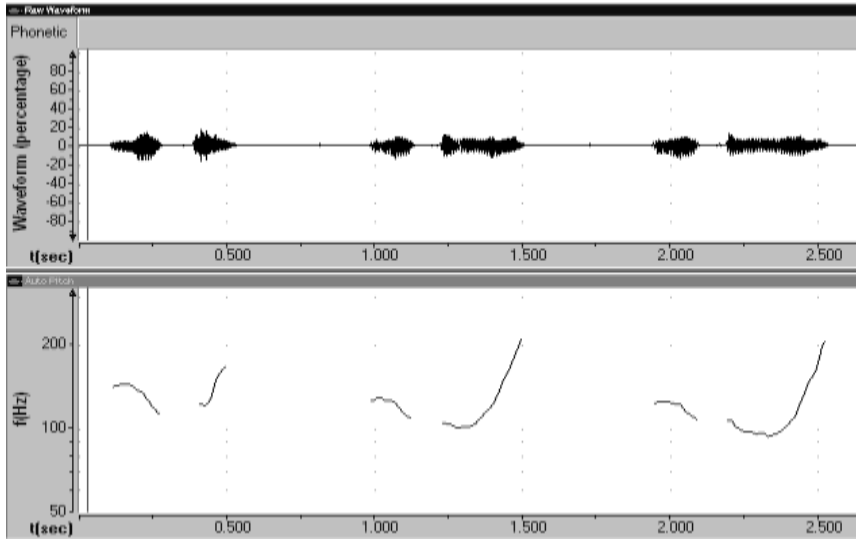


/テレビハ ミタ ケレド |



/アレハ |

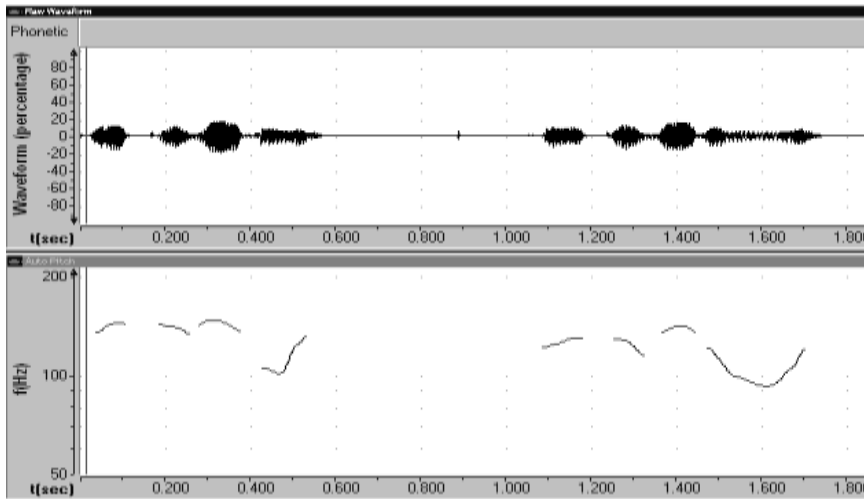
ガッ コーダ↓



/ハナコ↑

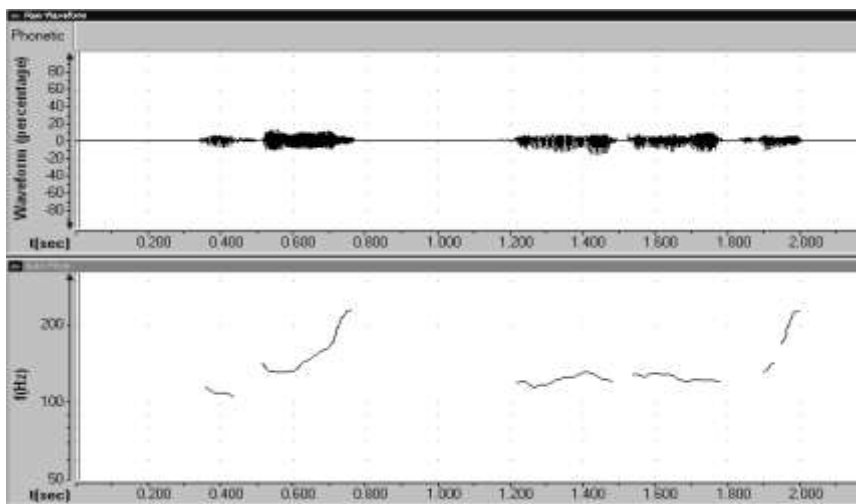
/ハナコノ↑

/ハナコノオ↑



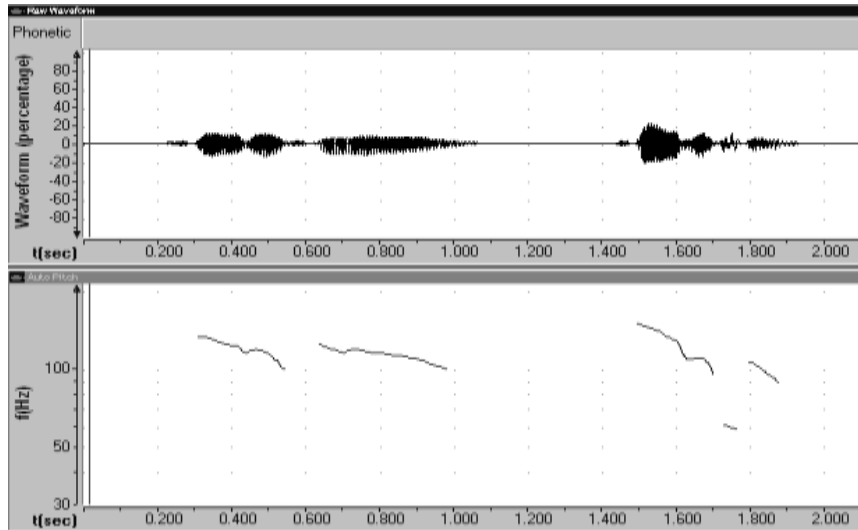
/コレタベル↑

/コレタベルノ↑



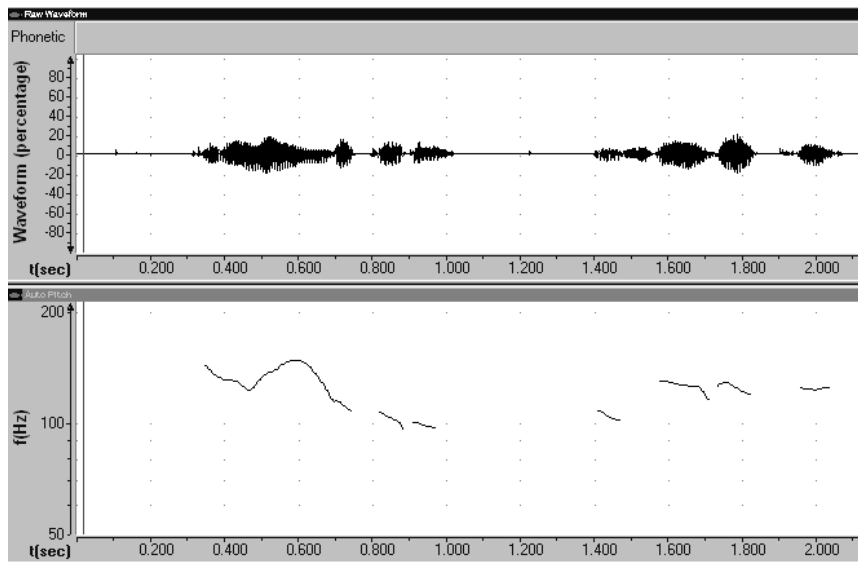
/マサヨ↑

/キミノトモダチ↑



/ソーデスネ | /

/ソーデスネ↓



/コレヨンデカラ | /

/オショーガツ | /

4.2.3. 休止

ここでは2つ以上の音韻的句を持つ音韻的文について考察する。2つ以上の音韻的句は「一時休止」によって分かれる¹⁵¹。休止の機能には、(1) 休止の有無による意味の変化と、(2) 休止が末尾イントネーション(↑|/のそれぞれの形状を変える機能が考えられる。まず、この一時休止の性格について両言語の簡単な記述および比較を行いたい。末尾の休止を/#/で示し、これに対して一時休止はとくに表記しない。

(1) スペイン語

スペイン語の一時休止の前には、上昇 (↑/)、下降 (↓/)、平坦 (//) の3種の末尾イント

¹⁵¹ ここで扱うのは、生理的条件による休止、つまり「息継ぎ」(cf. 藤崎・須藤 1973) ではなく、言語的な意味をもつ休止である。

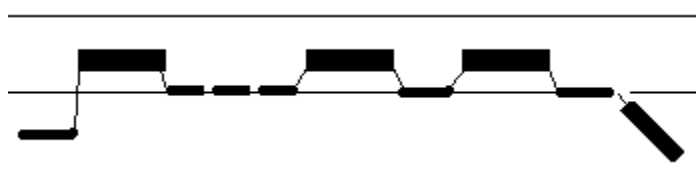
ネーションが組み合わされる。これらの末尾休止と一時休止の有無により、以下のような意味の違いが生じる。



- (1) /'este do'mingo↑#/ (2) /'este do'mingo | 'no 'pwede ser↓#/
- ¿Este domingo? Este domingo, no puede ser.
- (今度の日曜ですか?) (今度の日曜は...、無理でしょう)

(1) の末尾休止の前の上昇は、(2) の末尾休止の前の上昇にくらべ、急激である。(2) は上昇するときもあるが、そのときは4のレベルまで達せず、上昇の角度も比較的緩やかである。一時休止は時間的な空白がある場合とそれがない場合がある¹⁵²。発話が仮にここで途切れてもこの音調のままでは疑問文にならないので、対話者は答えようとはせず、後に続く言葉を待っているのが普通である。

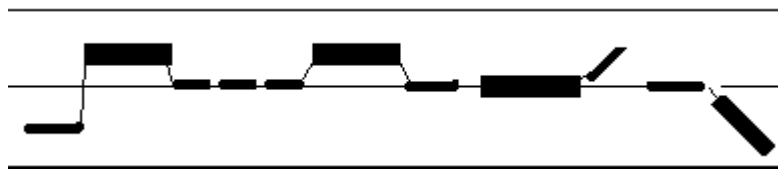
列挙するときの音調 (【図 423b, c, d】) は、接続詞 y の前で上昇し、末尾で下げ、その他の一時休止の前は少し下げるのが普通である¹⁵³。他に、一時休止の前をすべて上昇させることもある。



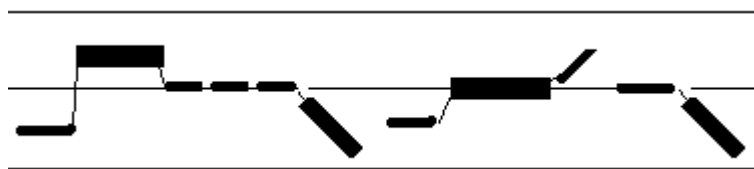
- /laer'ma na de xo'se ma'riay tu↓#/
- la hermana de José y María ([[ホセ・マリアと君]の姉])

¹⁵² 物理的に休止がなくても、言語を記述するときの単位として一時休止を認めるのは、それを認めることによって先行するイントネーション曲線の形状が説明できるためである。これは、アメリカ構造主義言語学の唱える「接続」(juncture)の考え方に近い。物理的な現実をそのまま記述するのでは、言語の構造と機能を的確に把握することはできない。むしろ抽象的なレベルで仮の単位を認め、それによって演繹的に現実の現象を説明する方法を採るべきであろう。このことは4章で用いている音調の記述についても同様で、これが必ずしも現実の音の高さ、強さ、長さを正確に表示しているのではないことは、◆にあげた音響分析によっても明らかである。(しかし、現実のレベルと抽象のレベルを峻別しながらも、両者間に本質的な矛盾や齟齬があってはならないのは当然である。)

¹⁵³ cf. Quilis y Fernández (1969: 173).



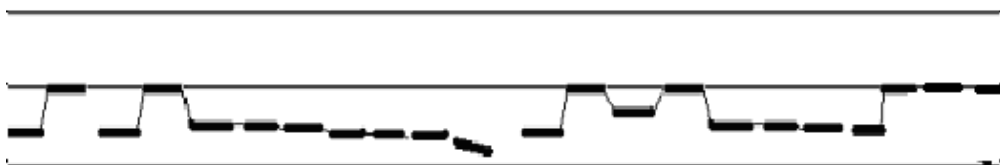
/laer'mana de xo'se ma'ria↑ i 'tu↓#/
la hermana de José, y tú (ホセ・マリアの姉と君)



/laer'mana de xo'se↓ ma'ria↑ i 'tu↓#/
la hermana de José, María, y tú (ホセの姉とマリアと君)

(2) 日本語

日本語では、次のように一時休止の前に平坦の音調 (/|/) だけが起こる。



1. /アノ| アパートノジューニン↓#/ 2. /アノアパートノ| ジューニン↓#/

1 では、連体詞「あの」が文法的に「住人」を修飾するが、2 では「アパート」を修飾する。平坦の音調の直後の部分 (/|/) は物理的に休止がある場合とそれがない場合がある。普通体や早い発話では空白が置かれないのが普通である。この一時休止の平坦音調の重要な特徴は、その後に中高型・平板型のピッチの上昇が大きくなることで、これは丁寧な発話になるほど顕著になる¹⁵⁴。

(3) 比較

スペイン語には休止の前で上昇音調と下降音調の 2 種があるのに対し、日本語では 1 つの平坦音調に限られる。この差によって、スペイン語の発話が起伏に富み、一方日本語の発話が単調であるという印象を与える。たとえば、数字を列挙するとき、スペイン語では、/uno↑ dos↑ tres↑ kwatro↓/や/uno↓ dos↓ tres↑ i kwatro↓/のように、/↑/や/↓/を組み合わせた音調になる¹⁵⁵。

¹⁵⁴ 自然な発話では下降曲線の中に埋もれてしまう単語のアクセントが、丁寧な発話では一時休止を入れることにより、再生されることがある。

¹⁵⁵ S. /uno↓ dos↓ tres↑ i kwatro↓/はいわゆる「列挙のイントネーション」(series- intonation) である。たとえば、音声学の実験でスペイン語話者に単語のリストを録音させてもらうと、次のようにこの型が現れる。

一方、日本語では、/イ1チ | ニ1ー | サ1ン | ヨ1ン/ のように単調なパターンになる¹⁵⁶。

日本語話者は、スペイン語の発話内の上昇音調や下降音調の習得が困難であり、一方、スペイン語話者は日本語の単調な句の連続を真似るのが難しい。

4.2.4. 音調の配列

ここでは2つ以上の音韻的句を持つ音韻的文の中の句の配列について考察する。

(1) スペイン語

句の配列は以下のように分類できる。

(a) 重文型

(b) 複文型：(b1) 付加型；(b2) 挿入型；(b3) 先行型

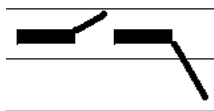
(a) 重文型は2つ以上の句の音調が共に整った形式を持っているものである。先行する句は必然的に一時休止で終わるために、末尾のみが2つの句の相違点となる。たとえば、次の/'dulθe↓/の下降は、/ma'ria↓#/の下降よりも緩やかである¹⁵⁷。

Juan compró un dulce y lo comió María.

/xwan kon'pro 'un 'dulθe↓ i lo ko'myo ma'ria↓#/

(フアンは飴を買って、それをマリアが食べた)

(b) 複文型は2つの句の音調の間に勢力の差があって、主句と従句に分けられるものをさす。



S. /'mulo↑ 'muro↓/

最小対の実験では、音声環境が異なるので注意が必要である。それぞれに番号をつけて、/uno, mulo↓ 'dos 'muro↓/のような発音をしてもらうとよい。

¹⁵⁶ 日本語話者に単語のリストを読んでもらうと、スペイン語のような「列挙のイントネーション」(cf. 前注) は現れないが、次のような強調形が現れることがある。



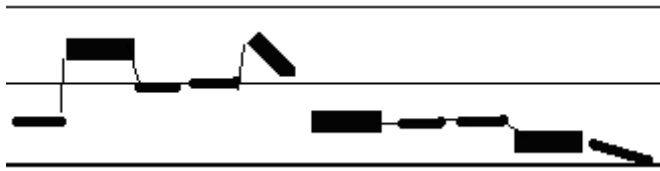
/イノ"チ | ウグイ"ス | ミズウ"ミ | トモダ"チ/

ここでも、最終モーラは疑問調のように上昇することはなく、強められるだけである。この音調は子供の「尻取り遊び」にも現れる。

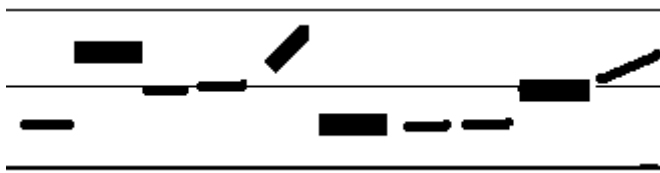
¹⁵⁷ cf. 4.2.3

主句は通常の音調型をもつが、従句は一般に高低の差が少ない変形した音調型になり、全体的に低ピッチで発話される。

(b1) 付加型とは、主句の末尾に従句が付加した型で、次のようなものがある。



1. /la 'bas a komer↓ 'esta ga'keta↓#/
La vas a comer, esta galleta. (君は食べる、このビスケットを)



2. /la 'bas a komer↑ 'esta ga'keta↑#/
¿La vas a comer, esta galleta? (君は食べるの?、このビスケットを)



3. /'ke rika↓ 'esta ga'keta↓#/
¡Qué rica, esta galleta! (おいしい!、このビスケット)

1 は平叙文に付加された従句で、核('esta)が3のレベルまで達せず、従句全体が低いピッチで発話される。2 は疑問文に付加された型で、やはり音調核が通常のものより一段低く、また末尾が4にまで達しない。3 は、感嘆文に付加された型で、単独に発話された型とほとんど変わらないが、音調全体が相対的に低い。

(b1) 付加型には他にも次のような例がある。

/'bwenos 'dias↓ (se'nor↓)#/ *¡Buenos días, señor!* (お早うございます!)

/me 'boy (en'tonθes↓)#/ *Me voy, entonces.* (それでは失礼します!)

/de 'parte de 'kyen↑(por fabor↓)#/ *¿De parte de quién, por favor?* (どちらさまですか?)

/de 'parte de xo'se mo'lina↓('graθyas↓)#/ *De parte de José Molina, gracias.* (ホセ・モリーナと申します)

(b2) 挿入型は主句の途中に従句が挿入される場合である。



/la se'ɲora mora (la be'θina↓) me'la'mo↓/
La Señora Mora, la vecina, me llamó. (隣のモラさんが私に電話した)



/la se'ɲora mora (te a'kwɛrda↑) me'la'mo↓/
La Señora Mora, ¿te acuerdas?, me llamó.
 (モラさん、覚えてる?, その人が私に電話した)

挿入された句は、全体的に音調が低くなる。

(b3) 先行型は主句に従句が先行する文の音調である。



/('bweɲo↓) sel lo pre'sento a us'tedes↓#/
Bueno, se lo presento a ustedes. (さて、あなたがたに彼をご紹介します。)



/('ben↓) te lo pre'sento/
Ven, te lo presento. (来て、君に彼を紹介する)

これは付加型や挿入型と異なり、レベルの2まで上昇し、ときには3まで昇ることもあって、(a)の重文の最初の要素と区別がつかないこともある。

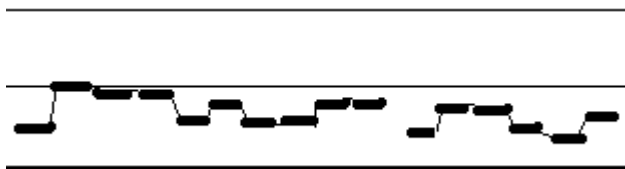
(2) 日本語

日本語の文音調は概略以下のように分類できる。

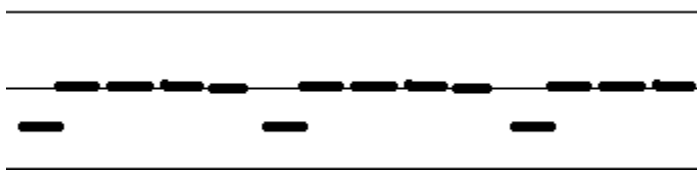
(a) 重文型

(b) 複文型： (b1) 主-従型； (b2) 従-主型

(a) 重文型には次のような例がある。これらは丁寧な発話である。



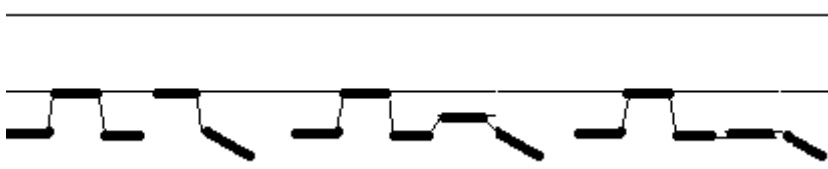
1. /トナリノ イヌ1ガナクト ウチノ1モ ナク↓#/



2. /エンピット シタジキト ケシゴム↓#/

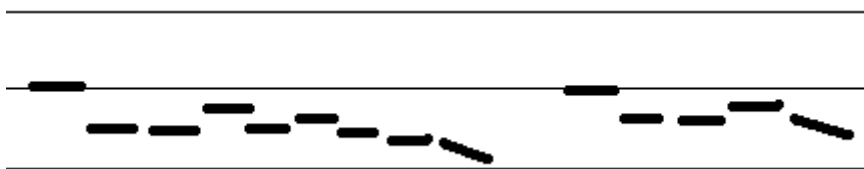
1 では、/トナリノイヌ1ガナクト/と/ウチノ1モナク↓#/の音調の勢力関係はほとんど等しい。一方、/トナリノイヌ1ガ/と/ナクト/の関係や、/トナリノ/と/イヌ1ガ/の関係は複文型である。2 の/エンピット/、/シタジキト/、/ケシゴム/は重文型の配列である。

丁寧な発話の重文型は、それを構成する句の最初の高いモーラが 2 のレベルまで上昇していることが特徴である。しかし、次の図が示すように自然な発話になると、それが複文型に移行し(2)、さらにアクセント核を失って単文型に変形することもある(3)。



(1) /ユキ1ガ | フル↓#/ (2) /ユキ1ガフル↓#/ (3) /ユキ1ガフル↓#/

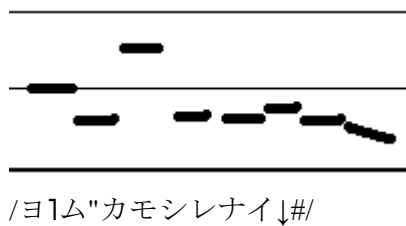
(b1) 複文は主-従型で、次のような例がある。



1. /キョ1ーハ ヨ1イ テ1ンキダ↓#/ 2. /ホ1ンヲ ヨ1ム#/

複文の特徴は、従句の最初の高いモーラのピッチレベルが主句のそれと比べて低いことである。1 の主句の/キョ1/は従句の/ヨ1/よりも高く、この/ヨ1/は次の/テ1/よりも高い。しかし、従句のアクセントは、ぞんざいな発話では失われ、全体の音調は単文型となる。

(b2) 複文。従-主型。複文の配列は(b1)の主-従型がほとんどだが、次のように強調などが影響して、従-主型が現れることもある。



(3) 比較

スペイン語では重文型と複文型の区別が比較的明瞭であるが、日本語では、早い発話になると、すべて複文の主-従型になる傾向がある。この相違は、スペイン語の音調が表現に富み、逆に日本語の音調が単調である印象を与える一因となっている。

4.3. リズム

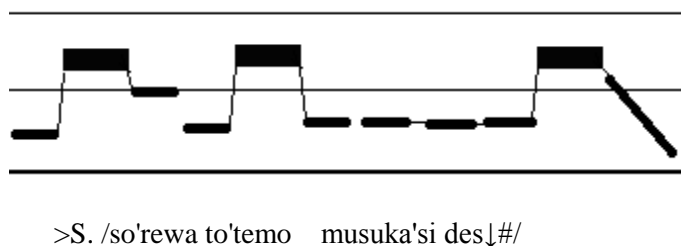
スペイン語のリズムは音節が単位である。すなわち音節の数に比例して、発話も長くなる傾向がある。また、各音節の長さがほぼ等しいという「等時性」isocronismo が指摘されている。

しかし、強勢音節と弱勢音節の長さは大きく違う。また、音調の核になる強勢音節は、他の強勢音節に比べてかなり長い。よって、スペイン語の発話中に長さの等しい音節が等分に分布しているとは考えられない。

日本語のリズムの単位はモーラであって、音節ではない。モーラにも等時性があり、これはスペイン語の音節と異なり、アクセント核や末尾の音調核であろうとなかろうとほぼ等しく保たれる傾向がある。

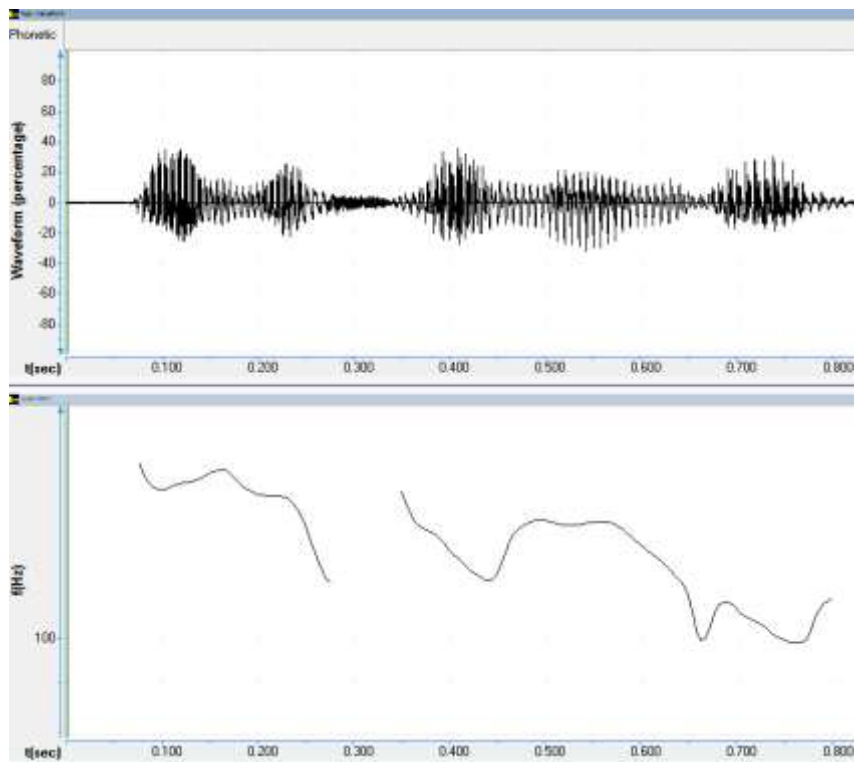
両言語のリズムを比較すると、両者とも英語などの stress-timed rhythm¹⁵⁸ とは一線を画するが、その分布においては両者間に大きな違いがある。たとえば、S. Hoy es domingo. /oyesdo'mingo/ (今日は日曜日)を日本語のリズムで発音すると、>J. /oiesudomiNgo/のように、8モーラになり、かなり間延びした発話になるので、日本語話者は注意しなければならない。

逆に、スペイン語話者は、次のように日本語の音節に強勢を付して、長音化する傾向があるが、これは日本語話者の耳には、/CVH/という長音節に解されるおそれがある。

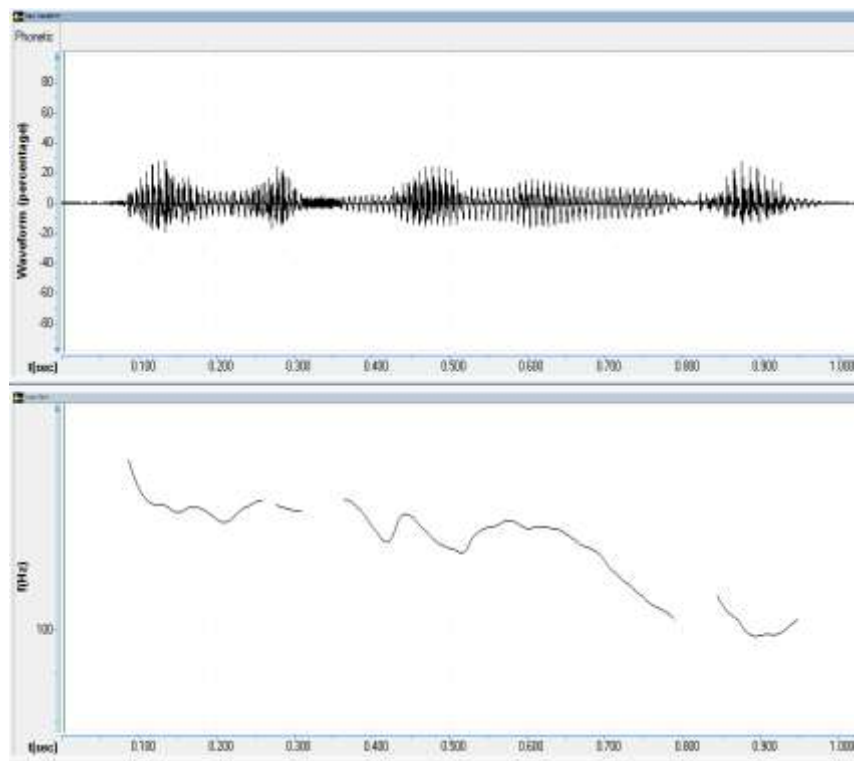


¹⁵⁸ cf. Pike (1947: 13).

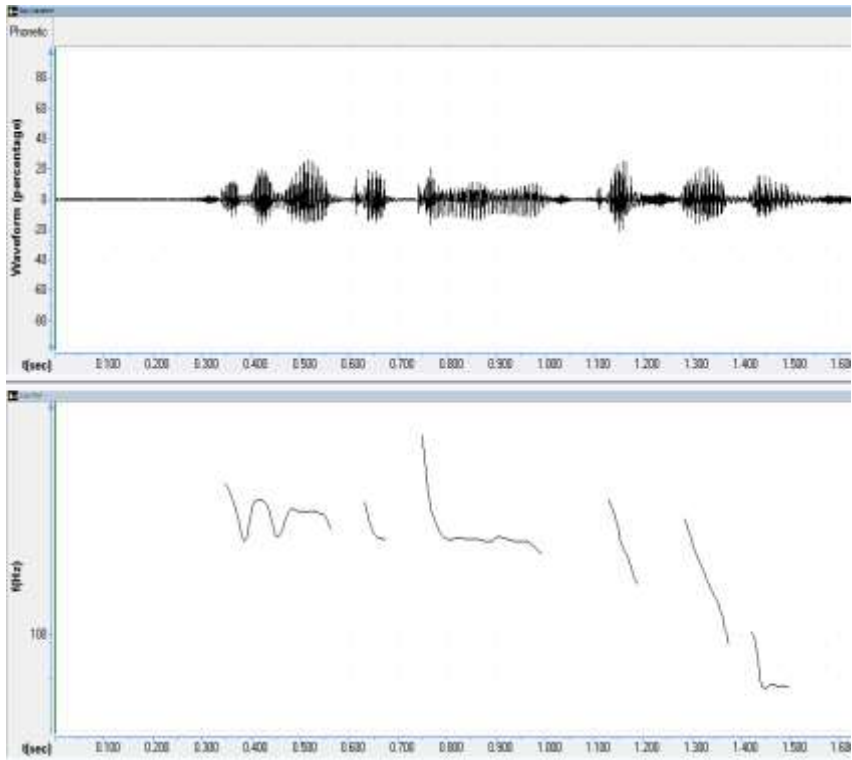
◆Wave form と Auto pitch



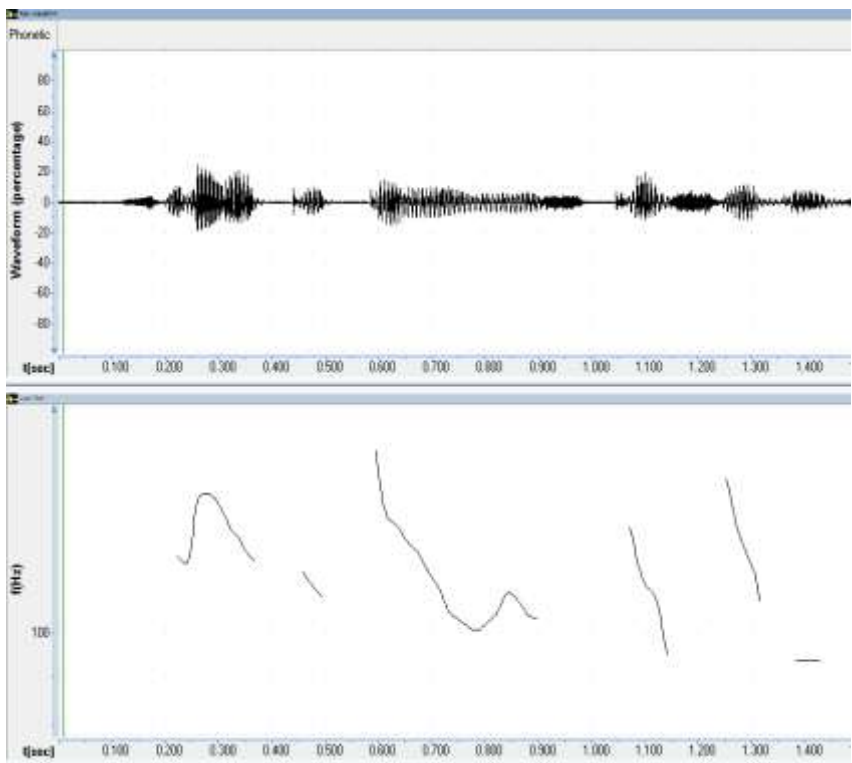
S. /oyes do'mingo/ *Hoy es domingo.* (今日は日曜日)



> > J. /oiesu domiNgo/



J. /sorewa totemo mutsukasi desu↓#/
 ↓ indicates a falling intonation contour.



> S. /so'rewa to'temo musuka'si des↓#/
 ↓ indicates a falling intonation contour.

参考文献

- Abe, Isamu. 1955. "Intonation pattern of English and Japanese", *Word*, 12, pp. 386-98.
- 安倍勇. 1972. 『音声学シリーズ6. 日英イントネーション法』東京：学書房.
- 秋永一枝. 1958. 「東京アクセントの法則について」金田一春彦編(1958), 巻末, pp. 1-68.
- _____. 1966. 「日本語の発音—イントネーションなど」『講座. 日本語教育. 第2分冊』pp. 48-60.
早稲田大学語学研究所.
- _____. 1968. 「いわゆる特殊音節 (特殊拍) について」『講座. 日本語教育. 第4分冊』早稲
田大学語学研究所.
- Alarcos, E. (1950) *Fonología Española*. Madrid: Gredos.
- _____. 1964. "Algunas cuestiones fonológicas del español de hoy", *Presente y Futuro de la Lengua Española*, II, pp. 151-161.
- Alatis, J. (ed.) *Contrastive Linguistics and its Pedagogical Implications*. Georgetown Monograph Series on Languages and Linguistics, No. 21. Washington D. C. : Georgetown University Press.
- Allen, J. H. D. Jr. 1964. "Tense/Lax in Castilian Spanish", *Word*, 20, pp. 295-321.
- Alonso, A. 1953. *Estudios Lingüísticos. Temas Españoles*, Madrid: Gredos.
- Alonso, A. 1953. *Estudios Lingüísticos. Temas Hispanoamericanos*, Madrid: Gredos.
- Alonso, A y P. Henríquez Ureña. 1971. *Gramática Castellana. Segundo Curso*. 24ª ed. Buenos Aires: Editorial Losada.
- Anderson, Y. 1974. "A case for contrastive phonology", *International Review of Applied Linguistics*, 2, pp. 219-230.
- André, E. 1974. *The Perception of Foreign Language Speech at the Pre-meaning Level*. Diss. The Ohio State University
- Anthony, A. 1948. "A structural approach to the analysis of Spanish intonation", *Language Learning*, 1, pp. 24-31.
- 荒井正道・瓜谷良平・宮城昇. 1962. 『スペイン語 I : 発音編』東京：白水社.
- 有坂秀世. 1940. 『音韻論』東京：三省堂.
- Ayer, G. . W. 1960. "An auditory discrimination test based on Spanish", *Modern Language Journal*, 44, pp. 227-130.
- Bartley, D. E. and R. L. Politzer. 1967. *Practice-centered Teacher Training. Spanish*. Philadelphia: The Center for Curriculum Development.
- Beberfall, L. 1961. "Y and LL in related Spanish speech", *Hispania*, 44, pp. 505-509.
- _____. 1964. "The qualitative aspect of the Spanish diphthong", *Modern Language Journal*, 48, pp. 136-141.
- Beym, R. 1960. "Practical phonological orientation for effective spoken Spanish", *Hispania*, 43, pp. 67-69.
- Bloch, B. 1950. "Studies in colloquial Japanese. Phonemics", *Languae*, 26, pp. 86-125. 林栄一監訳『ブロック日本語論考』東京：研究社 (1975).

- Bolinger, D. L. 1951. "Intonation. Levels versus configurations", *Word*, 7, pp. 199-210.
- _____. 1955. "Intersection of stress and intonation", *Word*, 11, pp. 196-203.
- _____. 1961. "Three analogies", *Hispania*, 44, pp. 134-137.
- _____. 1962. "Secondary stress in Spanish", *Romance Philology*, 15, pp. 273-279.
- _____. 1966. *Modern Spanish*, New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- _____. 1968. *Aspects of Language*. 2nd ed. New York. Harcourt Brace Jovanovich.
- _____. (ed.) 1972. *Intonation*. Middlesex: Penguin Books.
- _____. y Hodapp, M. 1961. "Acento melódico. Acento de intensidad", *Boletín de Filología (Chile)*, 13, pp. 33-48.
- Bloomfield, L. 1933. *Language*. New York. Holt. 三宅・日野訳『言語』東京：大修館 (1962).
- Bowen, J. D. 1956. "A comparison of the intonation pattern of English and Spanish", *Hispania*, 39, pp. 30-35.
- _____. 1956. "Sequences of vowels in Spanish", *Boletín de Filología (Chile)*, 9, pp. 5-14.
- _____. 1963. "Teaching Spanish diphthong", *Hispania*, 46, pp. 795-800.
- Bowen, J. D. and Stockwell, R. P. 1955. "The phonemic interpretation of semivowels in Spanish", *Language*, 31, pp. 236-240.
- _____. 1956. "A further note on Spanish semivowels", *Language*, 32, pp. 290-292.
- _____. 1960. *Patterns of Spanish Pronunciation. A Drill Book* Chicago. The University of Chicago Press.
- Briere, E. J. 1966. "An investigation of phonological interference", *Language*, 42, pp. 768-796.
- _____. 1968. *A Psycholinguistic Study of Phonological Interference*. The Hague: Mouton.
- Brosnahan, L. F and B. Malmberg. 1970. *Introduction to Phonetics*. London: Cambridge University Press.
- Brun, G. 1966. *La Lingüística Aplicada a la Enseñanza del Español como Lengua Extranjera*. Madrid. Instituto de Cultura Hispánica.
- Bull, W. E. 1965. *Spanish for Teachers. Applied Linguistics*. New York: The Ronald Press Company.
- Canfield, D. L. 1962. *La Pronunciación del Español en América*. Bogotá. Instituto Caro y Cuervo.
- _____. 1967. "Trends in American Castilian", *Hispania*, 50, pp. 912-918.
- Cárdenas, D. N. 1960. "Acoustic vowel loops of two Spanish idiolects", *Phonetica*, 5, pp. 9-34.
- Coleman, H. O. 1914. "Intonation and emphasis", *Miscellanea Phonetica*, I, 岩崎民平訳『強調と音調』(英語学ライブラリー2) 東京. 研究社.
- Corder, S. P. 1973. *Introducing Applied Linguistics*. Middlesex. Penguin Books.
- Chomsky, N. and M. Halle. 1968. *The Sounds Pattern of English*. New York. Harper.
- Chreist, F. M. 1964. *Foreign Accent*. London. Prentice-Hall International.
- Comité de Lingüística Iberoamericana. 1973. *Cuestionario para el Estudio Coordinado de la Norma Lingüística Culta de las Principales Ciudades de Iberoamérica y de la Península Ibérica*. Madrid. Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Contreras, H. 1962. "Vowel fusion in Spanish", *Hispania*, 52, pp. 60-62.
- Dalbor, J. B. 1959. "The English phoneme/s/ and /c/. A hearing and pronunciation problem for

- speakers of Spanish learning English", *Language Learning*, 9, pp. 67-73.
- _____. 1969. *Spanish Pronunciation. Theory and Practice*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Daniels, F. J. "The so-called pitch accent of Japanese", *33rd International Congress of Orientalists*, Cambridge, 寺川訳『全ヨーロッパの日本語音声学とその研究』法政大学出版局、pp. 51-64.
- _____. 1958. *The Sound System of Standard Japanese. A Tentative Account from the Teaching Point of View*. Tokyo: Kenkyusha.
- Delattre, P. , C. 1963. "Research techniques for phonetic comparison of languages", *International Review of Applied Linguistics*, 1, pp. 85-97.
- _____. 1965. *Comparing the Phonetic Features of English, French, German and Spanish. An Interim report*. Heidelberg: Julius Groos Verlag.
- _____. 1971. "The distinctive function of intonation", in Bolinger (ed.), pp. 159-174.
- _____ and C. Olsen. 1969. "Syllabic features of English, French, German and Spanish ", *Lingua*, 22, pp. 160-175.
- _____, C. Olsen and E. Poenack. 1962. "A Comparative study of declarative intonation in American English and Spanish", *Hispania*, 45, pp. 233-241.
- Dickerson, L. J. H. 1974. "Internal and external patterning of phonological variety in the speech of Japanese learners of English -- Toward a theory of second-language acquisition", Dissertation. University of Illinois.
- Di Pietro, R. J. 1974. *Language Structure in Contrast*. Mass. Rowley. 小池生夫訳『言語の対照研究』東京：大修館.
- Ebeling, C. L. 1967. "Some premisses of phonemic analysis", *Word*, 23, pp. 122-137.
- Edwards, E. R. 1903. *Étude Phonétique de la Langue Japonaise*. Thèse pour le Doctorat d'Université de Paris. Leipzig. 高松義雄訳『日本語の音声学的研究』東京：厚生閣 (1935).
- ELEC. (ed.) 1967. 『日英両語の比較論文目録』 *ELEC Bulletin*, 21.
- Fernández, Joseph A. 1960 "La anticipación vocálica en español", *Revista de Filología Española*, 46, pp. 437-440.
- Feldman, D. M. and Walter D. Kline. 1969. *Spanish. Contemporary Methodology*. Mass. : Blaisdell Publishing.
- Fisher-Jorgensen. E. 1952. "On the definition of phoneme categories on a distributional basis", *Acta Linguistica*, 7, pp. 8-39.
- Fontanella, M. B. 1966. "Comparación de dos entonaciones regionales argentinas", *Thesavrvs*, 21, pp. 17-29.
- Foster, D. W. 1968. "A contrastive note on stress in English and equivalent structure in Spanish", *International Review of Applied Linguistics*, 6, pp. 257-266.
- Frey, H. J. 1974. *Teaching Spanish. A Critical Bibliographic Survey*. Mass. : Newbury House Publishers.
- Fries, C. C. 1945. *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

- Fujisaki, H. and Omura, Y. 1971. "Characteristics of Duration of Pauses and speech segments in connected speech", *Annual Report of the Engineering Research Institute (University of Tokyo)*, pp. 3069-3074.
- García, E. C. 1963. "Review of Saporta and Contreras, *A Phonological Grammar of Spanish*", *Word*, 19, pp. 258-265.
- _____. 1968. "Hispanic phonology", in *Current Trends in Linguistics*, 4, pp. 63-83. The Hague: Mouton.
- Gauntlett, J. O. 1964. "Phonological discrepancies in Japanese loanwords", *Study of Sounds*, 12, pp. 308-326.
- Gili Gaya, S. 1921. "La R simple en la pronunciación española", *Revista de Filología Española*, 8, pp. 271-280.
- _____. 1966. *Elementos de Fonética General*. Madrid: Gredos.
- Gleason, H. A. 1955. *An Introduction to Descriptive Linguistics*. New York. Holt, Rinehart and Winston.
竹林滋・横山一郎訳『記述言語学』東京：大修館（1970）.
- Granda, G. . de. 1966. *La Estructura Silábica*. *Revista de Filología Española*, Anejo 81, Madrid, Gredos.
- Greenberg, J. H. 1957. "The nature and uses of linguistic typologies", *International Review of American Linguistics*, 23, pp. 68-77.
- _____. (ed.) 1963. *Universals of Language*. Cambridge, Mass. The M. I. T. Press.
- _____. 1966. *Language Universals with Special Reference to Feature Hierarchies*. The Hague: Mouton.
- Gregores, E. and A. Suárez. 1971. *Traducción y adaptación al español de Hockett: Curso de Lingüística Moderna*. Buenos Aires: Editorial Universitaria e Buenos Aires.
- Guerin, Thomas. 1976. "The effect of Japanese tonal accent on English intonation and accent", *Culture and Language (University of Sapporo)*, 10, pp. 37-49.
- Hadrich, R. L. , J. S. Holton and M. Montes. 1968. *A Drillbook of Spanish Pronunciation*. New York: Harper and Row.
- Hammer, J. H. and F. A. Rice. 1965. *A Bibliography of Contrastive Linguistics*. Washington D. C. : Center for Applied Linguistics.
- Hammarberg, B. 1974. "The insufficiency of error analysis", *International Review of Applied Linguistics*, 12, pp. 185-192.
- Han, M. S. 1962. *Japanese Phonology – An Analysis Based on Sound Spectrogram*. Tokyo: Kenkyusha.
- Hara, M. 1964. "Actualidad y orientación para la enseñanza de español en Japón", *Presente y Futuro de la Lengua Española*, 2, pp. 2356-371.
- _____. 1965. 「スペイン語音素論(5). スペイン語のいわゆる半母音の音素論的解釈についての再考」『一橋論叢』56, pp. 34-54.
- _____. 1966. 「スペイン語音素論(7). 中和批判」『東京外国語大学論集』13, pp. 37-76.
- _____. 1967. 「スペイン語音素論(8). スペイン語に内部開放接続は存在するか?」『東京外

- 国語大学論集』 15, pp. 101-130.
- _____. 1968. 「スペイン語音素論(9). スペイン語発話の音声学的一大特徴について」『一橋論叢』 59, pp. 50-67.
- _____. 1975. 「スペイン語のレイラミエントの音声的実体」『一橋論叢』 73, pp. 15-32.
- _____. 1975. *Semivocales y Neutralización*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Harms, R. 1968. *Introduction to Phonological Theory*. Englewood Cliffs: Prentice Hall.
- Harris, J. W. 1969. *Spanish Phonology*. Cambridge, Mass. : M. I. T. Press.
- Harris, Z. S. 1944. "Simultaneous components in phonology", *Language*, 20, pp. 181-205.
- _____. 1951. *Methods in Structural Linguistics*. Chicago: University of Chicago Press.
- _____. 1954. "Transfer grammar", *International Journal of American Linguistics*, 20, pp. 259-270.
- 橋本進吉. 1950. 『国語音韻の研究』 東京：岩波書店.
- 服部四郎. 1930. 「『ン』について」『音声の研究』 3, pp. 41-47.
- _____. 1951. 『音声学』 東京：岩波書店.
- _____. 1951b. 『音韻論と正書法』 東京：研究社.
- _____. 1960. 『言語学の方法』 東京：岩波書店.
- _____. 1961. 「アクセント素・音節構造・喉音音素」『音声の研究』 9, pp. 1-21.
- _____. 1973. 「アクセント素とは何か？そしてその弁別的特徴とは？」『言語の科学』 4, pp. 1-61.
- Haugen, E. 1950. "The analysis of linguistic borrowing", *Language*, 24, pp. 210-231.
- _____. 1956. "The syllable in linguistic description", in M. Halle (ed.) *For Roman Jakobson*. pp. 213-221. The Hague: Mouton.
- 林栄一. 1958. 「日英音節構造の比較」『大阪外国語大学学報』 6, pp. 30-44.
- 早田輝洋. 1970. 「東京アクセントのピッチ曲線」『NHK 文研月報』 8, pp. 35-39.
- _____. 1973. 「日本語音形論」比企静雄編『音声情報処理』 東京：東京大学出版会.
- _____. 1974. 「書評. 金田一春彦著『国語アクセントの史的研究』」『月刊言語』 10月号、pp. 46-50.
- _____. 1975. 「アクセントの解釈をめぐって—金田一春彦氏へのお答えの一端として」『月刊言語』 1月号、pp. 88-91.
- Hayden, R. E. "The relative frequency of phoneme in General American English", *Word*, 6, pp. ***.
- Heffner, R. M. 1950. *General Phonetics*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- 比企静雄編. 1973. 『音声情報処理』 東京：東京大学出版会.
- 平山輝男. 1960. 『全国アクセント辞典』 東京：東京堂出版.
- Hirano Weitzman, K. 1967. "A study of the influence of Japanese phonemic structure in the English of the Japanese Americans", *Descriptive and Applied Linguistics (I. C. U.)*, 4, pp. 131-141.
- Hockett, C. F. 1942. "A system of descriptive phonology", *Language*, 18, pp. 1-21.
- _____. 1955. *A Manual of Phonology*. Baltimore: Waverly Press.
- _____. 1962. *A Course of Modern Linguistics*. New York: Macmillan.
- Hoge, H. W. 1959. "Testing in the language laboratory. A laboratory experiment in Spanish pronunciation", *Hispania*, 42, pp. 147-152.

- Holden, K. 1976. "Assimilation rates of borrowings and phonological productivity", *Language*, 52, pp. 131-147.
- Hyman, L. M. 1975. *Phonology. Theory and Analysis*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 今井邦彦. 1971. 「生成文法の音韻論」『英語学大系 (II)』東京：大修館.
- Imazu, T. 1975. "A comparative study of stress-tone contours in Spanish, English and Russian", *Study of Sounds*, 16, pp. 169-180.
- 今津藤一. 1976. 「英・西・露語における『渡り音』の特性」『音声の研究』17, pp. 271-283.
- 井上信行. 1970. 『応用構造言語学』東京：泰文堂.
- International Phonetic Association. 1949. *The Principle of the International Phonetic Association*. London: University College.
- 石井正之助. 1970. 『講座・英語教授法. IV. 聞き話す領域の指導』東京：研究社.
- 石橋幸太郎編. 1973. 『現代英語学辞典』東京：成美堂.
- Jakobson, R., C. G. M. Fant and M. Halle. 1963. *Preliminaries to Speech Analysis. The Distinctive Features and Their Correlates*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press. 竹林滋・藤村靖訳『音声分析序説』英語学ライブラリー(60). 東京：研究社 (1965).
- Jones, D. 1950. *The Phoneme. Its Nature and Use*. Cambridge: Heffer.
- _____. 1960. *An Outline of English Phonetics*. 9th ed. Cambridge: Heffer.
- Jorden, E. H. 1955. "The syntax of modern colloquial Japanese", *Language Dissertation*, 52, ***.
- _____. 1963. *Beginning Japanese. Part I*. New Haven: Yale University Press.
- Kahane, H. R. and R. Peym. 1948. "Syntactical juncture in colloquial Mexican Spanish", *Language*, 24, pp. 388-396.
- 笈寿雄. 1971. 「アメリカ構造言語学における音素論」『英語学大系 (II)』東京：大修館.
- 菅野謙. 1970, 1971, 1971b. 「外来語のアクセント(1-3)」『NHK 文研月報』20, 21, 22
- _____. 1976. 「外来語カナ表記の現状と将来」『NHK 文研月報』3月
- 亀井孝. 1956. 「音韻の概念は日本語に有用なりや」『国文学』(広島大学) 15, pp. 1-11.
- 川上夔. 1957. 「東京語の卓立強調の音調」『国語研究』6, pp. 21-31.
- _____. 1957. 「準アクセントについて」『国語研究』7, pp. 44-60.
- _____. 1961. "On the relationship between word-tone and phrase-tone in Japanese language", *Study of Sounds*, 9, pp. 169-177.
- _____. 1963. 「文末などの上昇調について」『国語研究』16, pp. 25-46.
- _____. 1973. 『日本語アクセント法』(音声学シリーズ. 5) 東京：学書房.
- 川瀬生郎. 1974. 「学習初期における音の聞き取り能力」『日本語学校論集』1, pp. 24-48.
- King, H. V. 1952. "Outline of Mexican Spanish phonology", *Studies in Linguistics*, 10, pp. 51-62.
- _____. 1953. "Sketch of Guayaquil Spanish phonology", *Studies in Linguistics*, 11, pp. 26-30.
- Kohler, K. "On the adequacy of phonological theories for contrastive studies", in Nickel (ed.) *Papers in Contrastive Linguistics*. London: Cambridge University Press, pp. 83-88.
- Kohmoto, S. 1970. *New English Phonology. A Contrastive Study of English and Japanese Pronunciation*. Tokyo: Nan'undo.
- Koizumi, T. 1962. "Some problems of vowel system", *Study of Sounds*, 10, pp. 41-63.

- 金田一春彦 (監修) 1958. 『明解日本語アクセント辞典』 東京：三省堂.
- _____. 1967. 『日本語音韻の研究』 東京：東京堂出版.
- _____. 1974. 『国語アクセントの史的研究. 原理と方法』 東京：塙書房.
- _____. 1974. 「早田輝洋氏の『国語アクセントの史的研究』書評を読んで」『月刊言語』 11 月号、pp. 85-88.
- 金田一京助. 1938. 『国語音韻論』 東京：刀江書院.
- 小泉保. 1971. 「ヨーロッパの音韻論」『英語学大系(I)』 東京：大修館.
- 国語学会編. 1955. 『国語学辞典』 東京：東京堂出版.
- 国語学会編. 1962. 『方言学概説』 東京：武蔵野書院.
- 国立国語研究所. 1960. 『話しことばの文型 (1) —対話資料による研究』 東京：国立国語研究所
- _____. 1964. 『現代雑誌九十種の用字用語』 東京：秀英出版.
- 国広哲弥. 「国語長母音の音韻的解釈」『国語学』 50, pp. 45-54.
- _____. 1963. 「外来語表記について—日英音韻体系の比較」『* *』 東京：大修館.
- _____. 1967. 『構造的意味論—日英両語対照研究』 東京：三省堂.
- 日下部文夫. 1958. 「日本語のアクセント」『言語研究』 35, pp. 1-21.
- _____. 1962. 「東京語の音節構成」『音声の研究』 10, pp. 171-197.
- Kvavik, K. H. and C. L. Olsen. 1974. "Theories and methods in Spanish intonational studies – Survey", *Phonetica*, 30, pp. 65-100.
- Ladefoged, P. 1975. *A Course in Phonetics*, New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- Lado, R. "A comparison of the sound systems of English and Spanish", *Hispania*, 39, pp. 26-29.
- _____. 1957. *Linguistics Across Cultures. Applied Linguistics for Language Teachers*. Ann Arbor: University of Michigan Press. 上田明子訳『文化と言語学』 東京：大修館(***) .
- _____. 1950. *Test of Aural Perception for Japanese Students*. Ann Arbor: English Language Institute. 西岡淑雄訳『言語科学と言語テスト』 東京：大修館 (1959).
- _____. 1961. *Language Testing. The Construction and Use of Foreign Language Tests. A Teacher's Book*. London: Longman.
- Lehiste, I. 1970. *Suprasegmentals*. Cambridge, Mass. : M. I. T. Press.
- Leska, O. 1966. "Le centre et la périphérie des différents niveaux de la structure linguistique", *Travaux Linguistique de Prague*, 2, pp. 53-54.
- Lieberman, P. 1967. *Intonation, perception and language*. Research Monograph, 38, Cambridge, Mass. : M. I. T. Press.
- Linde, R. "The limitation and deficiencies of contrastive studies. – Implications for the teaching of foreign languages", *Descriptive and Applied Linguistics (I. C. U.)*, 6, pp. 101-111.
- Lisker, L. and A. Abramson. 1964. "A cross-language study of voicing in initial stops – Acoustical measurements", *Word*, 20, pp. 384-422.
- Lope Blanch, J. M. 1969. *El Léxico Indígena en el Español de México*. México: El Colegio de México.
- Lorenzo, E. 1972. "Vocales y consonantes geminadas", en *Studia Hispánica in Honorem R. Lapesa*,

- vol. 1, Madrid: Gredos, pp. 401-412.
- Lovins, J. B. 1975. "Loanwords and phonological structure of Japanese", *Indiana University Linguistic Club*. (mimeo).
- _____. 1975b. "The phonological stratification of the Japanese lexicon from a natural generative point of view", *Descriptive and Applied Linguistics (I. C. U.)*, 8, pp. 97-114.
- Macpherson, I. R. 1974. *Spanish Phonology. Descriptive and Historical*. New York: Manchester University Press.
- 前田正人. 1972. 「語彙と発音」文化庁国語シリーズ別冊 1『日本語と日本語教育：語彙編』 pp. 121-142.
- 牧野勤. 1971. 「イギリスの音声学」『英語学大系(I)』東京：大修館.
- Malmberg, P. 1958. *La Phonétique*. Paris: Press Universitaires de France. 大橋保夫訳『音声学』東京：白水社.
- _____. "Obtativo' y 'sujuntivo' -- A propósito de dos grafías", *Revista de Filología Española*, 48, pp. 186-187.
- _____. 1965. *Fonética Hispánica*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- _____. 1971. *Phonétique Générale et Romane. Études en Allemand, Anglais, Espagnol et Français*. The Hague: Mouton.
- Martin, S. F. 1952. "Morphophonemics of Japanese", *Language Supplements*, no. 47, Baltimore: L. S. A.
- Martinet, A. 1952. "Function, structure and sound change", *Word*, 8, pp. 1-32. 黒川新一訳『機能・構造・音韻変化』英語学ライブラリー (31). 東京：研究社 (1958).
- _____. 1955. *Économie des changement phonétique. Traité de phonologie diachronique*. Berne: Francke Verlag.
- _____. 1962. *A Functinal View of Language*. London: Oxford University Press.
- _____. 1960. *Éléments de Linguistique Générale*. Paris: Armand Colin.
- _____. 1969. *La Linguistique. Guide Alfabétique*. Paris: Edition Denoel. 三宅徳嘉監訳『言語学事典』東京：大修館.
- 丸山通一. 1929. 「ラ行父音の本体」『音声の研究』2, pp. 45-50.
- _____. 1929b. 「母音間の父音の価値」『音声の研究』2, pp. 51-52.
- 枅谷好弘. 1976. 『英語音声学』東京：こびあん書房.
- Matluck, J. H. 1965. "Entonación hispánica", *Anuario de Letras (U. N. A. M.)*, 5, pp. 5-32.
- _____. 1969. "Entonación. Lo fonético y lo fonológico", en *El Simposio de México*. México: U. N. A. M. , pp. 124-134.
- McCawley, J. H. 1968. *The Phonological Components of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- Mills, D. H. 1969. "Why learn contrasting intonation contours?", *Hispania*, 52, pp. 256-258.
- 宮田幸一. 1929. 「日本語のアクセントに関する私の見解」『音声の研究』2, pp. 31-33.
- 三浦新市・川辺康雄. 1961. 『構造言語学と英語学習』東京：開文社.
- 水谷修・大坪一夫. 1971. 『音声と音声教育』文化庁日本語教育指導参考書. 東京：文化庁.

- Moulton, W. G. 1962. *The Sounds of English and German*. Chicago: The University of Chicago Press.
- _____. 1962. "Toward a classification of pronunciation errors", *Modern language Journal*, 46, pp. 101-109.
- _____. 1966. *A Linguistic Guide to Language Learning*. Menasha: George Banto Company.
- _____. 1968. "The use of models in contrastive linguistics", *Alatis* (ed.), pp. 27-38.
- Muljagic, Z. *Fonologia Generale e Fonologia della Lingua Italiana*. Bologna: Societa Editorice il Mulino. (traducido por E. Feliu. *Folonogía General. Revisión Crítica de las Nuevas Corrientes Fonológicas*. Barcelona: Editorial Laia. (1969)
- 内藤好文. 1958. 『ドイツ語音声学序説』東京：大学書林.
- 中野洋. 1958 「現代日本語における音素連続の実態」『電子計算機による国語研究(V)』東京：国立国語研究所、pp. 94-120.
- Nakano, K. 1957. "A phonetic basis for the syllabic nasal in Japanese", *Study of Sounds*, 8, pp. 215-228.
- Navarro Tomás, T. 1916. "Siete vocales españolas", *Revista de Filología Española*, 3, pp. 51-62.
- _____. 1916b. "Las vibraciones de la RR española", *Revista de Filología Española*, 3, pp. 166-168.
- _____. 1916c. "Cantidad de las vocales acentuadas", *Revista de Filología Española*, 3, pp. 387-408.
- _____. 1917. "Cantidad de las vocales inacentuadas", *Revista de Filología Española*, 4, pp. 371-388.
- _____. 1918. "Diferencias de duración entre las consonantes españolas", *Revista de Filología Española*, 5, pp. 367-393.
- _____. 1918. *Manual de Pronunciación Española*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas. , 10ª ed. (1972).
- _____. 1925. "Palabras sin acento", *Revista de Filología Española*, 12, pp. 335-375.
- _____. 1934. "Rehilamiento", *Revista de Filología Española*, 23, pp. 277.
- _____. 1958. *Manual de Entonación Española*. Madrid: Ediciones Guadarrama.
- _____. 1962. "La G de 'examen'", *Hispania*, 45, pp. 314-316.
- _____. 1968. *Studies in Spanish Phonology*. Miami: University of Miami Press.
- _____. 1971. "Diptongos y fonemas", *Thesaurus*, 26, pp. 1-10.
- Nickel, G. 1971. *Papers in Contrastive Linguistics*. Cambridge: University Printing House.
- 日本音声学会編. 1976. 『音声学大辞典』東京：三修社.
- 日本放送協会編. 1966. 『日本語発音アクセント辞典』東京：日本放送出版協会
- O'Connor, J. D. and G. F. Arnold. 1961. *Intonation of Colloquial English*. London: Longmans. Reprint. Tokyo: Maruzen (1964).
- O'Connor, J. D. and J. I. M. Trim. 1953. "Vowel, consonant and syllable, a phonetic definition", *Word*, 9, pp. 103-133.
- 小川芳男. 1954. 「英語教授法概論」『現代英語教育講座』2, 東京：研究社.
- 岡田辰雄. 1967. *Hablemos español*. 東京：大学書林.
- _____, ホセ・マタ. 1975. 『現代スペイン語教本 (I)』東京：大学書林.
- 大江三郎. 1967. 「外来語中の促音に関する一考察」『音声の研究』13, pp. 111-121.
- _____. 1976. 「日英語音声面の比較」中島文雄編『講座. 新しい英語教育(II) 英語教育と英語

- 学』東京：大修館。
- 大西雅雄. 1950. 『音声表記法要覧』東京：研究社。
- Okuda, K. 1971. *Accentual Systems in the Japanese Dialect. A Generative Approach*. Tokyo: Bunka Hyoron Publishing.
- 奥田夏子. 1975. 『英語のイントネーション—研究と指導』東京：英和出版。
- Parmenter, C. E. and S. N. Treviño. 1932. "An X-ray study of Spanish vowels", *Hispania*, 15, pp. 483-496.
- Perisinotto, G. S. A. 1975. *Fonología del Español Hablado en la Ciudad de México*. México: El Colegio de México.
- Pike, K. L. 1943. *Phonetics*. Ann Arbor: The University of Michigan Press. 今井訳『音声学』東京：研究社。
- _____. 1945. *The Intonation of American English*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- _____. 1947. *Phonemics*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- _____. 1947. *Tone Languages. A Techniques for Determining the Number and Types of Pitch Contrasts in a Language, with Studies in Tonemic Substitution and Fusion*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Politzer, R. I. 1954. *Phonetics, Phonemics and Pronunciation*. Georgetown Monograph Series on Language and Linguistics, 16.
- _____ and C. N. Staubach. 1961. *Teaching Spanish. A Linguistic Orientation*. New York: Blaisdell Publishing Co.
- Polivanov, E. 1931. "La perception des sons d'une langue étrangère", *Travaux du Cercle Linguistique de Prague*, 4, pp. 79-96.
- Quilis, A. 1963. *Fonética y Fonología del Español*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- _____. 1964. "La juntura en español. Un problema de fonología", en *Presente y Futuro de la Lengua Española*. Madrid: Oficina Internacional de Información y Observación de Español.
- _____. 1965. "Phonologie de la quantité en espagnol", *Phonetica*, 13, pp. 82-85.
- _____ y J. A. Fernández. 1966. *Curso de Fonética y Fonología Española para Estudiantes Angloamericanos*. 2ª ed. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- _____. "Caracterización fonética del acento español", *Travaux de Linguistique et Littérature*, 9, pp. 53-72.
- _____. 1973. *Album de Fonética Acústica*. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- _____. 1975. "Las unidades de entonación", *Revista Española de Lingüística*, 5, pp. 261-280.
- Real Academia Española. 1973. *Esbozo de una Nueva Gramática de la Lengua Española*. Madrid: Espasa-Calpe.
- Reid, J. R. 1957. "A Note on Spanish intonation", *Lingua*, 7, pp. 433-435.
- Rendon, J. J. 1968. "Fonología del español que se habla en el centro de México", *Anales de Antropología*, pp. 87-97.
- Resnick, M. C. 1969. "Dialect zones and automatic dialect identification in Latin American Spanish",

- Hispania*, 52, pp. 553-568.
- _____. 1975. *Phonological Variants and Dialect Identification in Latin American Spanish*. The Hague: Mouton.
- Revista de Filología Española. 1915. "Alfabeto fonético de la «Revista de Filología Española»", *Revista de Filología Española*, 2, pp. 374-376.
- Richards, J. C. 1974. *Error Analysis*. London: Longman.
- Ritchie, W. C. 1968. "On the explanation of phonetic interference", *Language Learning*, 28, pp. 183-197.
- ロベルジュ、C. 1971. 「発音矯正に対する二項対立論の功罪」『上智大学外国語学部紀要』16, pp. 1-27.
- Robins, R. H. 1969. *General Linguistics. An Introductory Survey*. London: Longman, Green and Co.
西野・藤森訳『言語学概説』東京：開文社.
- Rosetti, A. 1965. "Sur le problème des semi-voyelles", *Revista de Filología Española*, 48, pp. 181-183.
- 蔡茂豊. 1976. 「中国人に対する日本語の音声教育」『日本語教育』30, pp. 109-121.
- Sacks, N. P. 1962. "A study in Spanish pronunciation errors", *Hispania*, 45, pp. 289-300.
- 酒向誠. 1956. 『米語音声学入門』東京：福村出版.
- 佐久間鼎. 1923. 『国語アクセント講話』東京：同文館.
- _____. 1929. 『日本音声学』東京：風間書房.
- _____. 1933. 『国語音声学概説』東京：同文館.
- _____. 1959. 『標準日本語の発音・アクセント』東京：恒星社.
- Sánchez, A. y J. A. Matilla. 1974. *Manual Práctico de Corrección Fonética del Español*. Madrid: Sociedad General Española de Librería.
- Sapir, E. 1925. "Sound patterns in language", *Language*, 1, pp. 37-51.
- _____. 1933. "The psychological reality of phonemes", in *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality*. (ed. by D. G. Mandelbaum), pp. 46-60.
- Saporta, S. 1956. "A note on Spanish semivowels", *Language*, 32, pp. 287-290.
- _____. 1957. "Methodological consideration regarding a statistical approach to typologies", *International Journal of American Linguistics*, 23, pp. 109-113.
- _____ and R. Cohen. 1957. "The distribution and relative frequency of Spanish diphthongs", *Romance Philology*, 11, pp. 371-377.
- _____ and D. Olson. 1958. "Classification of intervocalic clusters", *Language*, 34, pp. 261-266.
- _____ and H. Contreras. 1962. *A Phonological Grammar of Spanish*. Seattle: University of Washington Press.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de Linguistique Générale*. Paris: Payot.
- Sholes, R. J. 1966. *Phonotactic Grammaticality*. The Hague: Mouton.
- Schubiger, M. *Einführung in die Phonetik*. 小泉保訳『音声学入門』東京：大修館 (1973).
- Sciarone, A. 1970. "Contrastive analysis. Possibilities and limitations", *International Review of Applied Linguistics*, 8, pp. 115-131.

- 柴田武. 1962. 「音韻」『方言学概説』国語学会編.
- _____. 1965. 「音声—その本質と機能」西尾実・時枝誠記監修『国語教育のための国語講座』(2), 東京: 朝倉書店.
- Shimaoka, T. 1966. "A contrastive study on rhythm and intonation of English and Japanese with spectrographic analysis", *Study of Sounds*, 12, pp. 347-362.
- 城田俊. 1971. 「日本語音韻論によせて」『言語研究』59, pp. 15-42.
- Singh, S. 1968. "A distinctive-feature analysis of responses to a multiple choice intelligibility test", *International Review of Applied Linguistics*, 6, pp. 37-53.
- _____ and J. Blach. 1966. "Study of twenty-six intervocalic consonants as spoken and recognized by four language groups", *Journal of Acoustic Society of America*, 39, pp. 372-387.
- Skelton, R. B. 1969. "The pattern of Spanish vowel sounds", *International Review of Applied Linguistics*, 7, pp. 231-237.
- Sommerfelt, A. 1931. "Sur l'importance général de la syllabe", *Travaux de Cercle Linguistique de Prague*, 4, pp. 156-160.
- Stirling, W. F. 1935. *The Pronunciation of Spanish*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stockwell, R. P. 1956. "On phoneme and allophones", *Hispania*, 39, pp. 325-326.
- _____. "The role of intonation. Reconsiderations and other considerations", in Bolinger (ed.) pp. 87-109.
- _____, J. D. Bowen and I. Silva-Fuenzalida. 1956. "Spanish juncture and intonation", *Language*, 32, pp. 641-665.
- _____ and J. D. Bowen. 1965. *The Sounds of English and Spanish. A Systematic Analysis of the Contrast between the Sound Systems*. Chicago: University of Chicago Press.
- Stone, H. 1957. "Los anglicismos en España en su papel en la lengua oral", *Revista de Filología Española*, 51, pp. 141-160.
- 菅田茂昭. 1962. 「外国語の発音教授. 応用言語学的方法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』1, pp. 40-68.
- 杉山栄一. 1960. 「日本語のアクセントについて」『国語研究』11, pp. 49-56.
- Sweet, H. 1906. *A Primer of Phonetics*. Oxford: Clarendon Press. Reprint, Tokyo: Hokuyou Publishing (1966).
- 高田誠. 1974. 「対照言語学. 現状の概観と研究の枠組の素描」『月刊言語』12月号. ***
- 高倉忠博. 1971. 「英語子音の日本語化について」『音声の研究』15, pp. 165-181.
- Takebayashi, S. "A comparative study of Japanese and English consonant phoneme", in C. J. Stevens (ed.) *Essays in Honor of Claude M. Wise*. Hannibal, Missouri: The Sanderd Printing.
- _____. 1975. "The vowels of Japanese and English. A contrastive study", *Lexicon (Iwasaki Linguistic Circle)*, 4, pp. 49-67.
- _____. 1976. *A Primer of Phonetics*. Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle.
- 田中春美. 1973. 「日英語の比較(II) 発音について」『現代英語学辞典』東京: 成美堂.
- 田代晃二. 1953. 『標準語のアクセント教本』大阪: 創元社.
- _____. 1975. 『美しい日本語の発音』大阪: 創元社.

- 寺川喜四男. 1959. 『日本言語学(下). 音声・音韻論』東京：法政大学出版局.
- _____. 1964. 『全ヨーロッパの日本語音声学者とその研究』東京：法政大学出版局.
- _____, 金田一春彦, 稲垣正幸編. 1951. 『国語アクセント論叢』東京：法政大学出版局.
- Trager, G. . L. 1939. "The phoneme of Castilian Spanish", *Travaux du Cercle Linguistique de Prague*, 8, pp. 217-222.
- _____ and H. L. Smith. 1951. *An Outline of English Structure*. Studies in Linguistics occasional paper, 3, Norman Okla: Batterburg Press. 太田朗訳注『英語構造の概要』英語教育シリーズ(14). 東京：大修館 (1958).
- Trnka, B. 1960. *A Phonological Analysis of Present-day Standard English*. Revised ed. Tokyo: Hokuyodo.
- Trubetzky, N. S. 1969. *Grundzüge der Phonologie*. Travaux du Cercle Linguistique de Prague, 7, (tr. by C. A. Baltaxe) *Principles of Phonology*, Los Angeles: University of California Press.
- 植地**、菅野**. 1961. 「日本語における外来語の表記と発音」『NHK 文研年報』6, pp. 1-80.
- 上村幸雄. 1972. 「現代の音韻」中田祝夫編『講座. 国語史(2). 音韻史・文字史』東京：大修館.
- 榎垣実. 1961. 『日英比較語学入門』東京：大修館.
- _____. 1963. 『日本外来語の研究』東京：研究社.
- Voegelin, C. F. 1956. "Linear phonemes and additive components", *Word*, 12, pp. 429-443.
- _____. 1957. "Six statements for a phonemic inventory", *International Journal of American Linguistics*, 23, pp. 78-84.
- _____ and J. Yegerlehner. 1956. "The scope of whole system distinctive feature and subsystem typologies", *Word*, 12, pp. 444-453.
- Vogt, Hans. 1954. "Phoneme classes and phoneme classification", *Word*, 10, pp. ***.
- 和田実. 1957. 「アクセントの核と滝」『国語研究』6, pp. 1-20.
- Wallis, Ethel. 1951. "Intonational stress patterns of contemporary Spanish", *Hispania*, 34, pp. 143-147.
- Weinreich, U. 1953. *Languages in contact. Findings and problems*. The Hague: Mouton.
- _____. 1957. "On the description of phonic interference", *Word*, 13, pp. 1-11.
- Wenk, G. 1966. *The Phonemics of Japanese*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Wise, C. M. 1965. *Applied Phonetics*. Englewood Cliffs: Prentice Hall.
- Yao Shen. 1955. "Phonemic charts alone are not enough", *Language Learning*, 5, pp. 122-129.
- _____. 1959. "Some allophones can be important", *Language Learning*, 9, pp. 7-18.
- _____. 1961. "Sound arrangements and sound sequences", *Language Learning*, 11, pp. 17-32.
- Yasui, M. 1962. *Consonant Patterning in English*. Tokyo: Kenkyusha.
- Yegerlehner, J. and F. Voegelin. 1957. "Frequencies and inventories of phonemes from nine languages", *International Journal of American Linguistics*, 23, pp. 85-93.
- 吉沢典男. 1960. 「イントネーション」『話しことばの文型(1)』東京：国立国語研究所.

【補遺】

- Celdrán, E. C. 1994. *Fonética, con especial referencia a la lengua castellana*, Barcelona, Teide.
- _____. 1998. *Análisis especgrográfico de los sonidos del habla*, Barcelona, Ariel.
- D'Intrino, F., Del Teso, E., Weston, R. 1995. *Fonética y fonología actual de español*, Madrid, Cátedra.
- Gil Fernández, Juana (ed.) 2000. *Panorama de la fonología española actual*. Arco Libros.
- Guitart, J. M. y Roy J. (ed.) 1980. *La estructura fónica de la lengua castellana*. Barcelona, Anagrama.
- International Phonetic Association. 1999. *Handbook of the International Phonetic Association*, Cambridge University Press.
- Quilis, A. 1981. *Fonética acústica de la lengua española*, Madrid, Gredos.
- _____. 1993. *Tratado de Fonología Española*. Madrid. Gredos.
- Takebayashi, S. 1996. 『英語音声学』東京. 研究社.
- Ueda. H. 1977. "Estudio contrastivo de los sonidos españoles y japoneses (I): vocales y semivocales", *Lexicon*, 6, pp.29-46.
- _____. 1978. "Estudio contrastivo de los sonidos españoles y japoneses (II): Consonantes", *Lexicon*, 7, pp.16-37.
- 上田博人. 2011. 『スペイン語ハンドブック』東京. 研究社.